山川協加

盟

川柳塔



No. 858

特集・第4回川柳塔まつり

十一月号

年賀広告募集

次の四種といたします。

(氏名・住所・電話番号など掲載

願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をおます。同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたし

左記のとおりですので、お申込みのほど、よろ

しくお願いいたします。

口 11、000円

★新年号特集★

「私の一句」

Ш

締切 11月25日(本社事務所宛)

自費出版

〒54-005大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

III

柳

塔

社

原稿締切

11月25日

④ 頁

一八,000円

3%頁一二、000円

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。 あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町 9番4号 TEL·FAX (06) 372-1178

「現代歌まくら」

桶 高 薫 風

一敬老の日の前日に、おじいちゃんと

著者の名は小池光とある。山陽歌壇の選 著者の名は小池光とある。山陽歌壇の選 であった。 電車に乗って取り出して見て驚いた。 電車に乗って取り出して見て驚いた。

でなければならないのである。 現代の歌枕はどうか。 地名においては 現代の歌枕はどうか。 地名においては座と、銀座を冠した街は余りにも多い。座と、銀座を冠した街は余りにも多い。 はまいては

を操性に富む現代では、歌枕や歌枕的 を様性に富む現代では、歌枕や歌枕的 をが、すべて頷けて、俳句の季語と同 のだが、すべて頷けて、俳句の季語と同 のだが、すべて頷けて、俳句の季語と同 のだが、すべて頷けて、俳句の季語と同

ものばかりだ。

見しより少年は粗暴となりきコスモスの揺れ合ふあひに母の恋

前掲の短歌は前半章で因、後半章で果、しんし張りの波をくぐれば母がいるの次の二句を想起した。

とにかく萩の宮城野であり、花の吉野山のくさぐさの花も咲くであろうけれど、ならば桜の名所と想定する。他にも四季

を喜んだことは勿論であった。

昔の歌枕は、宮城野といえば萩、吉野

選評を担当している方なのだ。その偶然者で、柳壇の選者の私と常に同じ紙面で

三窓さんの五・七・五は二句、計三十名を成した作者らしい佳什である。乳癌との闘いと恋の情熱の歌である。乳癌との闘いと恋の情熱の歌である。乳癌との闘いと恋の情熱の歌である。乳癌との闘いと恋の情熱の歌である。第四節

四音。短歌一首と川柳二句が殆んど同じ四音。短歌一首と川柳二句が殆んど同じ短歌と川柳とのリズム感の違いは考慮にものを与えた。音数は音量ではないし、短歌と川柳とのリズム感の違いは考慮に入れても、川柳は如何に短いかを思わねばならないのだ。そぎ落しそぎ落ししなければならない。

る厳しさの積み重ねの外にないと信ずる。感が基礎になり、うがちを主な手段とすいたい。小太刀の冴えの修得は、リズムいたい。小太刀の冴えの修得は、リズム一句で一首と対決することを胆に銘じて、二句で一首に立ち向かうのではなくて、

魚屋に蠅の居らぬが世紀末老いらくの雄蕊雌蕊の露天風呂サーカスを老妻としみじみ旅の果て



Ш

温 泉や

座る羅漢に寝

る羅

漢

栞



幼年時代の光景をはっきり と憶えています。 夕食後近所の銭湯へ行った 頑丈な父の背中に乗って 板 尾 岳 人

それが本当に風呂に神経を遣ったことになる のわりに、 大変大きな要素となるものです。 切れないものであり、また、旅の場合にも、 のでしょうか。 イデアを使った風呂はありますが、 ン風呂とか、やれ空中風呂とか、いろんなア ないと思います。ジャングル風呂とか、 われます。僕たちの生活にとって、 ら始まったようです。父は清潔好きでお洒落 で、金縁の眼鏡に金の指輪をはめていました。 日本人ほどお風呂好きな国民はいないと言 みんながお風呂に神経を遣って 僕の風呂好きはこの頃 しかし、 はたして 切っても

ってことはこんなに簡単で楽なことだったの 呂に入ってみたら、 度も言われました。 や母に「ちゃんと肩までつかりなさい」と何 とにかく深いんです。小さいとき、 いう旅館の風呂に入ってびっくりしました。 宮城県の白石にある小原温泉の それなのに、 なあーんだ、 ここのお風 鎌倉」 いつも父

60 82 81 62 58 56 53 4 2

84

柳 塔 月号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

温泉や

座る羅漢に寝る羅漢……

「現代歌まくら」から

.....

板 橘

尾 高

:

1

橘

高

薫

風

選

JII

柳塔

同人吟)

自選集

柳の群像

児島

与呂志

東

この一 秀句 古川柳歳時 池 大空のこころ 水煙抄 湖 鑑 抄 句..... 賞 詑 水 п 七五三 煙抄 人吟 (94) 八 海 清 菱 橘 TIC. III; 内 木千代 老 H 萬 高 池 笑 選 洋 選 的 : :

第四 茴香 柳界展望……… ご城下川柳まつりに参加して 各地柳壇 エッセー 第四回 編 路 一月各地句会案内 集後記 П 集 0 1/ 花..... 私 川柳塔まつりに出席して 座右の句 成十年度同人総会・各賞表彰記念句会 「つぶやく 川柳と陶芸 子供にも言 まな板の音がしている母がい の 佳句地十選/氏林洋敏 句 谷 n 61 分がある泣きじゃくり ::::: 古川喜美子・ る 恒 松叮紅 岩 西 長 西 吐 太 指宿千枝子 ·岸本孝子 出 浜 出 戸 田 小 田 楓 笑 公 子 楽 路 子 選 選 選 選 : : : : 122 121 120 118 104 103 102 94 92 91 90 90 88

のです。

北海道の登別にある「第一滝本館」は、鹿栗津温泉の「法師旅館」です。 です。貴女は、それに不満を持ったこと はりますか、そんな不満を持たせないのが がありますか、そんな不満を持たせないのが がありますか、そんな不満を持たせないのが がありますか、そんな不満を持たせないのが

あったのです。すったのです。「第一滝本館」でひどい目に渡す限りといっていいほどたくさんあるので渡す限りといっていいほどたくさんあるのでいってもよく、いろんな形や構造の浴槽が見いってもよく、いろんな形や構造の浴槽が見

児島の指宿観光ホテルと並ぶ日本二大風呂と

われたのです。僕は出るに出られず、かとい前に、数十人の女子高校生が素裸でワッと現前に、数十人の女子高校生が素裸でワッと現る。カウェー

でみてはいかがでしょうか。 でみてはいかがでしょうか。 でみてはいかがでしょうか。 そんなものはイヤだ、イヤラシイと思う前に一度でいいです根 (木製)が浮いています。そんなものはイ根 (木製)が浮いています。そんなものはイヤだ、イヤラシイと思う前に一度でいいですから、その方面の真面目な研究書などを読んから、その方面の真面目な研究書などを読んでみてはいかがでしょうか。

呂屋さん、一度御入浴をおすすめします。円で買えた時代に三○万円で建築されたお風派な銭湯があります。昭和の始め借家一軒千川柳塔本社近くに「美章園温泉」という立



新 家 完 司

鳥取

県

父よりも剛 父よりも柔でい

る

少年も山も光っている街だ

古本屋であたたかい

もの買うて来る

ボーイフレンドという大きな靴が脱いである

予言だと思う蟋蟀鳴いている 祭り太鼓にいい雨が降ってくる

幸せそうに饅頭を食ってい

る

取 県

鈴

木

公

弘、

風穴を開けて良いとき悪いとき

死者たちはみんな頑固で目を開けぬ 鳥のように飛べたらこんな街なんか 名所案内三度読んでも汽車は来ず 有縁なり九十歳も九歳も

彼我の差は歴然

八月十五日

八月は苦い月なり黙禱す

子供より婆さん多い地蔵盆 寝屋川市 江

朝顔が勝鬨あげている梢

チンチロリン ポチもご飯を平らげる

気がつけばサイタサイタもはや古希に 米は実らぬテポドンをつくっても メランー 番似合う父である

生き残るため枯れ草に火を放つ 目安箱どこに置いてもむずかしい 旨いめし食って我慢のない暮らし うなずいているけど理解していない

高 薫 風 選

橘

竹原市 小 島 蘭

幸

度

子が 鷺草咲 夫の枕一 キャミソール闊歩アプレとい 元気かと聞いてくださる電話 しまい風呂溢れさせてる嬉 姑となる亡姑と暮らした日を数え 恥 よもや 他国籍の油で揚げるエビフライ 何より 目の前に他人と思えぬカバ とめどなく鳩出す男に従いてゆ 頑 洗ってもあらっても灰 じら 片の 滴 固 空や生駒葛城二上山 帰る独りの部 独 10 いのまなざし伏せる綿帽子 涙が鬼の面を剝ぐ 0 氷にはず わたしを裏切る準備だったとは 断 て美人家系に 幸せ父母 つたたいて泣き寝入り 偏 見に添う む 屋の 水談 の顔を知る 変わ 風の É はいわか + るかも しい 0 中 年 う 顔 П 富山 西宮市 大阪 言 H < 80 東あ 市 市 りき 舟 清 豳 田 渡 水 2 杏 絹 つ子 花 子 ひとりではさびし その若さで汝の敵を愛せるか 共 チ 影に嗾けられて片陰共に出る 糸瓜 童話なら白馬の騎士の出番です 自己証明 子が二人運がい 自己嫌悪靴の踵を低くする 今席を立てば相手の思う壺 敬老に町会くれ 叱られる孫 写 コスモスが咲い ヤツ 犯者になるから聞かぬことにする n のけ のために打たねばならぬ犠 経 道 忌や子規を愛した亡父 写 プ した子の靴が光り出 いこ衣装が先に出来てい 仏 リン 役所三文判ですみ 小さ 0 おろおろしてるだけ てい 靴に たのは い子と悪 42 塔 ふたりはわずらわし るの 油断をしてしまう ロタオ 続 V 3 に影がな 子と 0 ル 道 打の数 咳 美祢市 島 島県 る 根 県 10 安平 藤 伊 次 解 藤

夫の

忌

父の忌

俄然活気付

市

Ш

本

半

銭

風

0

盆

かぜ

が

置

Va

てきばりにする

静

風

モ帳に近頃めだつ誤字脱字

寿

美

弘、

道

平成 旅人に 本当 単調な今日を平和と書く日 おはようは俺から言おう老い二人 ありがとう右手を洗う左の 貧乏神どうも本当に居るらし 見比べることを知らない一人っ子 HH 弁解をする度に吹く隙間 言い訳をするから尻尾長くなる 皮下脂肪無料でお分け致します テレビドラマの教師真似たらクビになる 振り逃げという手をひょいと思い 自己破産 D 生きものがいっぱい死んで四季続 純愛もオープンスタンス 石垣の石の絆を見て飽 斉に泣き一斉に笑う国 力に [がり具合もしなやかな京の ボットは躾も十分行き届 の孫は知らない手毬 一は拾ったらしい鬼の首 満ち足りひなびた寺を辞す 知らない土地 してパ チンコ屋 0 心かず 灯がやさし 明 Eメー 風 から戻り < 和歌山 竹 竹原市 枚方市 出 市 寺 森 JII JII # Ŀ 弘 菁 大 居 除草剤 炎天の 少年 百歳 父がしたような仕種をして五十 親に似た道を歩んで親の顔 算盤を持たぬ絆が太くなる 図 枯れてゆく花を見ている長い余暇 夫逝って小さなピアノ購 ポ 怒ったらあかんあかんと波の音 そして朝 正夢となる計が 白薔薇を截るとき息を止めて H 般若心経 覚えてみたいとも思い 勿論と二歳の孫が返事する 書館 イントの切替すんだ顔である 本 しい屋並にちちろ住みつかぬ 1 ほ 独 の位置を中央だと思う 0 の座像モナリザより優る 墓地 眼 n かない一本の白い道 0 冷 住 覚めのような朝がない 事音ほどは 房弱くして欲しい が砂漠になってゆく 1 少に かどらず 建て直 10 届 ました 富田林 10 八尾市 鳥取 た 雲市 市 県 岩 竹 神 藤 治 原 田 崎 みさ江 ち 泰 かし

ぼく 地 蛍 履 年金を確 箱書きがないと単なるめ 言争 欲 大声 夫婦湯のみ茶しぶに話す今日 さめざめと泣きたい長夜寡婦二人 淋しくて鬼とも邪とも仲直 逆縁で肩ふるわせた義 川下る 身について来た泳ぎ方 このごろは遠くのものがよく見える 飛行機に乗って憂き世を捨てに行く かくしゃくと暖簾を守る袋帯 五百羅漢に亡夫の顔亡義兄の ハンサムな医者が私を丸裸 籠孫等なか 歴書を書 0 L で来年の鬼呼んで秋 た日も 堕ちた議 ひとり 0 13 書 物ばかりへ金が追 か 籍に勝る一行 か合 3 ボケなかったらどうしよう 何 毎日 な 員ネクタイだけは派 気なく茶が入る か 2 寝 た旅 0 朝 0 が明け プラン 発が か し茶碗 n い付かず n 逝 のこと 額 < 大阪市 出 犬山 Ш 県 市 荻 早 111 久保 野 JII 鮫 盛 睦 虎狼 夫 子. 悪筆 美人にはこまめ 母 遺伝子に火へ 三人の子を眠らせた温い 争えぬうしろ姿も亡父に 友達以上 翔 招き猫申し訳ない 猫と見るテレビの 日曜はピ 向 神 粗大ゴミ酔うと明日の世 まだ恋をする気ネクタイ洒落てい スピーチも我 3 様 を看る話 日葵の 鈴も犬も静かな熱帯夜 々はそっと自 0 0 ため って余生静 かい 無情 中で失うもの V ター お 恋人未満共白 0 アノの音をお 当所 日様 助 な の恐れと好奇心 に親近感がある 走 が子の時は上手くない 雨 に聞 分をほ かな風 ば を撒 に声をかけてお 好きは何故だろう 顔に見 中の平和か かりをくり 思う かす か に乗る め 髮 裾 n てやる 背 似 分け てる を語 之 河 る 内 返 な る 長 倉敷市 吹 < 野 H 3 市 市 加 小 野 島 野 F 由 克 之

枝

男

誤字一つブラックユーモアできあがり	なるほどの美人仲人令夫人	あの時はあれで喧嘩も一周忌	要するに国が教えた泣き寝入り	ともかくもスポーツ記事が免罪符	唐津市	セールスはまだまだ庭を褒め止まず	暑いのに挨拶空ろ原爆忌	日記書く時間が惜しい本を読む	ありがとう一日一善果たせたよ	子に諭す反面教師は僕だった	熊本県	愛犬のひと吠え知人ひそと来る	庭先の野鳩に遊び誘われる	頑固者三十二度にうどん食う	友達に電話かけたが聞くばかり	旱魃に草の勢い容赦なし	熊本県	言い負けることにしている古時計	電池替えてはげます時計と私と	プラス思考で別れますという喜劇	コーヒーから二人のドラマ動き出す	割りきれぬ数字があって面白い	熊本市
					仁						高						岩						永
					部						野						切						田
					四						宵						康						俊
					郎						草						子						子
萠えて燃え散り敷く紅葉我が命	娶らない彼等は神の落し児か	霖雨晴れ飛行機雲が一直線	もうごめん水は大事にしますから(関東甲信越)	水水と叫んで逝ったキノコ雲(八月九日)	唐津市 山 門 幸 夫	天国は地続きだったバイアグラ	七十五歳のいのちに重い広辞苑	苦労したことは見せない裾模様	血税を吸うて利権を手放さず	讃え合う十七回のエネルギー	唐津市 久 保 正 剣	北東の風に抱かれて秋が来る	偉いのが悪の見本を撒き散らし	鯛山笠は川柳塔の旗標	文化祭山笠の太鼓が幕を開け	どうしたら腹が空くのか妻に問い	唐津市 田 口 虹 汀	苔むせばどれも変わらぬ兵の墓	手入れして松の話も聞いている	埴輪の眼言いたいことが多過ぎて	うらなりの南瓜にもある物思い	躓いた石から見えた青い空	唐津市 市 丸 晴 翠

友一人自由一途な呑気やだ暴走車くの字に抜ける怖い音場路次覗けばあけび熟れて揺れ一人自由一途な呑気やだ	少年の寄付にこわした貯金箱神々のパレードを見た天の川神々のパレードを見た天の川贈り物これも腐らす老い二人贈り物これも腐らす老い二人	一度なと座って見たい貴賓席 団体でたべる食事は遠慮する 年金の暮しに株価関与せず 断崖を飛ぶよりましなバイアグラ あの人の取柄豪傑笑いだけ 北九州市 北九州市	三日月は怪しいまでに研ぎすまし 三日月は怪しいまでに研ぎすまし 三日月は怪しいまでに研ぎすまし	唐津市
	北	梅	Щ	Щ
	Щ	田	П	門
	竹	宣	高	9
	萌	司	明	111
がやこしい話 がの味覚山盛 がの宝傘寿	耳よりな話は来ないしなやかに男を料理となるの話題は孫に	ただ眠る夢は楽しい カラオケのマイクは 本当のことは書かず 定年を前に父さん翔 どうしようなどとぜ	をの後は声に をの後は声に をの後は声に	
やこしい話になって酒の燗をの味覚山盛りにして峠茶屋の味覚山盛りにして峠茶屋の味覚山盛りにして峠茶屋の味覚山盛りにして	耳よりな話は来ないドアチェーン胎内へ男が戻るUターンとなやかに男を料理するテレビジム底の話題は孫に通じない	ところでと言う本論は甘くない ところでと言う本論は甘くない ところでと言う本論は甘くない ところでと言う本論は甘くない	高知県 でリクリの楽しみもない一人者 をの後は声にならない肩を抱き をの後は声にならない肩を抱き をいたくて司牡丹を一っ気飲み でリクリの楽しみもない一人者	高知県
話になって酒の燗と手傘寿のイヤリング上手傘寿のイヤリング	ロボアチェーン といい ドアチェーン	い松山市	京気飲み で気飲み ない 高知	高知県 赤
話になって酒の燗とりにして峠茶屋上手傘寿のイヤリング	リング (単するテレビ を) は (単するテレビ を) ない に通じない と (本) は (い松山市る宮	は 京 京 ない 高知県	知県
話になって酒の燗とりにして峠茶屋と手傘寿のイヤリング	リング (1) では、 アチェーン (1) では、 アチ	い松山市る宮	ない 肩を抱き 一人者 高知県 小	知県赤

季の移り風の匂いや地の匂い	何気なく投げたサイコロ吉と出る	体裁が二転三転のし袋	黙ってる人の顔色気にかかる	人間の知恵が善うむ悪も生む	香川県川 崎 ひかり	働き者にされて迷惑な蟻	風船がしぼんで孫の去った部屋	無位無冠男臭さが匂わない	宝石をたくさん持って飢えている	絆ばかり伸ばしてしまう豆のつる	今治市 野 村 京 子	舟頭の唄へうれしい舟しぶき (保津川下り)	名園の松は女がすねたよう	勉強はほどほど孫は優しい子	理に落ちて話そこから切り替える	梅干一つ朝のご飯にある祈り	今治市 越 智 一 水	本家へは頭をさげぬ葱坊主	前に酒屋があって山頭火の笑い	愛いちず長いトンネル抜けてくる	商いと知らない蜂の蜜集め	とりもちのようにくっつく世間てい	今治市 矢 野 佳 雲
に馴染む杖は分身だと思う	賞味切れしても蓼喰う虫がおり	隙のある人に深読みしてしまう	ミサイルが飛んで居眠りしておれず	合掌を解けば仏を忘れた手	香川県 神 保 坊太郎	集落に小学生がやっと出来	結願寺思いを遂げた杖の山	蜜蜂も刺のある花近寄らず	温泉に今日の疲れを置いて来る	繰り返す老婆の話耳を貸し	香川県 成 重 放 任	早ばやとねむるに惜しいここ湯元	寝つかれぬ女二人の缶チューハイ	新米で炊き込みごはん 栗ごはん	ずっとずっとガーデニングに凝ってます	進路変更君お笑いに向いている	香川県 池 内 かおり	定年でお払い箱のゴマスリ機	極限の文化地球儀いびつにし	太公望壁いっぱいに魚拓貼る	ライバルを射程の距離に置いておく	汗をした顔に夕陽が美しい	香川県 木 村 あきら

	1,1.	159		1.1.	44	mr	4.44	-1-		Like	.117.	Sefe		+6		**	det	4.	Til	tr.	
人間でいたいこだまのない叫び	たくないものまで見	夏をバテ森のちからを借りにゆく	広島市	付いて来るかいと言ってるのは おょ	結論は出ているノーがまだ言えず	町名が変った里が他人めく	姥捨てを訳すと老人ホームだな	才女です悪女の役もこなせます	字部市	終点もなくて防衛費やたらふえ	愛の手で知恵おくれの子スクスクと	波の芸術偉大なる天然美	人生の浮沈を知って古稀迎え	旅に出る妻があれこれ留守のこと	柳井市	禁止条項守ると先を越されそう	料理試食オイシーと言うエチケット	九死一生それから命惜しくなる	砂時計トンボ返りで蘇る	危機管理湯割りの酎が水臭い	下関市
			森	な					平						弘						石
			田						田						津						Щ
									実						柳						侃流
			文						男						慶						洞
昼の月一人ぽっちはもういやだ	当は優し仁王の力	飛車妻	竹原市	ビール一缶何と豊かなボランティア	雑草を抜いたつもりが叱られる	お喋りが弾む母娘のフライパン	吉と凶どちらの神を信じよう	お引き受けしますとポスト音を立て	竹原市	白黒をつけてお酒が不味くなる	句読点時には忘れ夫婦酒	平成の御代に一揆が起きるかも	嘘つきの女が通る羅生門	愛と死を見詰めた頃の青い海	竹原市	蟷螂よ仁王としっての事か	耳おぼろ鴉の鳴くも憎からず	美女を追う視線たしょうのむりもある	菊の翳瞼に桜散るを見る	愛恋のすっぽんぽんや曼珠沙華	竹原市
は	は優し仁王の力	飛車妻がだんだん強く	竹原市 岩	ビール一缶何と豊かなボランティア	雑草を抜いたつもりが叱られる	お喋りが弾む母娘のフライパン	吉と凶どちらの神を信じよう	お引き受けしますとポスト音を立て	竹原市 時	白黒をつけてお酒が不味くなる	句読点時には忘れ夫婦酒	の御代に一揆が起きるか	つきの女が通る羅生	死を見詰めた頃の青い	原		ぼろ鴉の鳴くも憎	美女を追う視線たしょうのむりもある	翳瞼	のすっぽんぽんや曼珠	竹原市 三
は	は優し仁王の力	飛車妻がだんだん強く	原市	ビール一缶何と豊かなボランティア	雑草を抜いたつもりが叱られる	お喋りが弾む母娘のフライパン	吉と凶どちらの神を信じよう	お引き受けしますとポスト音を立て	原市	白黒をつけてお酒が不味くなる	句読点時には忘れ夫婦酒	の御代に一揆が起きるか	つきの女が通る羅生	死を見詰めた頃の青い	原市		ぼろ鴉の鳴くも憎	美女を追う視線たしょうのむりもある	翳瞼	のすっぽんぽんや曼珠	
は	は優し仁王の力	飛車妻がだんだん強く	原市岩	ビール一缶何と豊かなボランティア	雑草を抜いたつもりが叱られる	お喋りが弾む母娘のフライパン	吉と凶どちらの神を信じよう	お引き受けしますとポスト音を立て	原市 時	白黒をつけてお酒が不味くなる	句読点時には忘れ夫婦酒	の御代に一揆が起きるか	つきの女が通る羅生	死を見詰めた頃の青い	原市古		ぼろ鴉の鳴くも憎	美女を追う視線たしょうのむりもある	翳瞼	のすっぽんぽんや曼珠	Ξ
	でいたいこだまのない叫	でいたいこだまの	こなちか	こだまのない叫び 広島市 森 田	こだまのない叫び 広島市 森 田 ちからを借りにゆく ないものまで見える	るノーがまだ言えず ないものまで見える ないものまで見える	里が他人めく いと言ってるのは お ん ないと言ってるのは お ん なないものまで見える ないものまで見える	と老人ホームだな と老人ホームだな と表人ホームだな と言ってるのは お ん ないと言ってるのは お ん ないものまで見える	の役もこなせます と老人ホームだな と老人ホームだな 里が他人めく 里が他人のは おん ないと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん なないものまで見える	字部市 平 田 実 の役もこなせます と老人ホームだな と老人ホームだな 里が他人めく エニーがまだ言えずいと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん な 広島市 森 田 ちからを借りにゆく ないものまで見える	下部市 平 田 実 の役もこなせます と老人ホームだな 里が他人めく 里が他人めく エがまだ言えず いと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん ないと言ってるのける た島市 森 田 ちからを借りにゆく	おくれの子スクスクと 防衛費やたらふえ 宇部市 平 田 実 の役もこなせます と老人ホームだな 里が他人めく るノーがまだ言えず いと言ってるのは おん な いと言ってるのは おん な 広島市 森 田 ちからを借りにゆく ないものまで見える	おくれの子スクスクと おくれの子スクスクと おくれの子スクスクと 防衛費やたらふえ 宇部市 平 田 実 の役もこなせます と老人ホームだな と老人ホームだな 里が他人めく 国力がまだ言えず いと言ってるのは おん な 広島市 森 田 ちからを借りにゆく ないものまで見える こだまのない叫び	知って古稀迎え なる天然美 なる天然美 なる天然美 字部市 平 田 実 の役もこなせます と老人ホームだな 里が他人めく 里が他人めく エがまだ言えず いと言ってるのは おん ないと言ってるのは おん ないものまで見える こだまのない叫び	市 と 平 田 田 実	市 と 市 みん 平 弘 田 田 津 柳	ボーと ボーム 森 な 平 弘 田 田 津 柳	帯 と	ボール ボール ボート 水 な 平 弘 田 田 津 集 柳	ボーと ボート A A A A A A A A A A A A A A A A A A A	中では、大きないのでである。 生それから命惜しくなるを表すると先を越されそう。 現守ると先を越されそう。 現守ると先を越されそう。 柳井市 弘 津 柳本で知恵おくれの子スクとを記すと老人ホームだなを訳すと老人ホームだなを訳すと老人ホームだなを記すいるノーがまだ言えず。 来るかいと言ってるのは おんな 広島市 森 田 実元なくないものまで見える。 見たくないものまで見える。

朱の帯をほどいたような曼珠沙華ささいな事で迷走します夫婦舟	るコップ	贅沢は知らぬ素朴な妻の指	空き缶とモラルを捨てた道路脇	倉敷市 井 上 富 子	虫干しをしているはるかな思い出と	赤いバラ咲かす毛糸をあみいそぐ	花の過去みる残照の車椅子	原点を明かすわたしの城下町	いつか来た道だね こぼれ種ひろう	岡山市 川 端 柳 子	子も孫も女ばかりよ欲しい武者	カタカナ語また忘れての辞書めくる	言葉不要 心がっちり手を握る	記帳する文字の震えに尻込みす	やっとこさどうにか夏を越せて秋	岡山市 井 上 柳五郎	禁酒禁煙迫るワイフに煙草絶つ	線香の匂いワイフが起きている	落葉さらさら実りの秋を真っ盛り	気がつけば身辺整理していたり	七十路まで生き延びてきた星仰ぐ	呉市 槇 田 英 詩
思い出のかけら集めて夜の汽車淋しさに負けまいとして紅を引く	れも運命一生私のやぶ	もう逢えぬ人かも知れぬ星流る	合掌につつみ切れない欲の数	岡山県 山 本 玉 恵	補聴器をかけても解せぬ講演会	傍聴の子に壇上で堅くなり	デーサービス箸にギザギザ付けてある	この歳で健康管理レントゲン	吟詠にまだ魂は抜けとらぬ	岡山県 二 宗 吟 平	昼飯は昨日も今日も栗ごはん	トマトのおかず食後の果物もトマト	焼き茄子に今日もお味噌が乗った昼	老夫婦指輪を買った事はない	まだ老母の味付けだった祭りずし	岡山県 小 林 妻 子	名水の町に抱かれている余生	有難う上手く言えない水の恩	席ゆずる勇気良心から生れ	モラル無き浮世はひとり歩けない	捨てる神拾う神あり世は情け	倉敷市 田 辺 灸 六

虫の音がつと鳴く 停める気紛れだ		松江市 安
		食
		友
		子
装えば少しは若く見えますか	無用米寿です	出雲市 園 山
		3

松	風鈴が苛立つ因になっている	12	うら盆で亡父がテープの安来節	日の音ガーと明く 存める気糸オ
江市		る		x
浦				
辺				
静				

残り火が炎えてくれない

雨

の鬱

り付く藁一本の欲しい刻

ルビ入れて少し調子に乗り過ぎる

ヤ	
-	
=	
17	
/	
- 1	
100	
ル	
1	
2	
手	
口口	
+1	
は	
1	
X	
4	
-	
右	
1	٠,
1	7
to	
d	1
-ルと話せば気分若くなり	7
	3
	1
	1
	Î

食欲の H いろいろと切替え出来て今がある 当りがよっぽど好きな三輪車 秋原則に腹八分

真似る叩いてほぐすふくらはぎ しぐれ秋秋秋と遠ざかる 松江 市

111

本

畔

葬式から帰って老姑が活気づく 傾けた耳だんだん長くなってくる

孫

蟬

君 少女になってポストまでひと走り の眉怒ると一直線になる

究極の果ては無限の空を見る 夏去って友の便りも来なくなる

出雲市

吉

出

きみえ

めしの 無事終えた手術安堵の深呼吸 ストー 味忘れてしまう注射針 マ(人工肛門)つけた夫と旅の夢 (夫入院

三句

江

岐れ道考えすぎて逆を行く 七転び八起きも老いの語 り草

つがなく生きる証

の良い寝起き

出雲市

久

谷

まこと

手の内を明かして油断させるも が無いから紅葉誉めもせず 術

もう 変り身の早さはふわり秋 八雲たつ出雲と思う夕茜 度もう一度とて彼岸花 の雲

八頭の大蛇が荒れるレザー ぐうちょきぱあで神々の事始 光線 8

出雲市

富

田

蘭

水

廿 捜査という言葉ばかりが大手ふる 三文の徳がやっぱり子に生きる い梨胎動の子に分ける幸

思い切り体育会に年忘れ 高架線できて田舎は活気づく

-14

出雲市

石

倉

芙佐子

紙人形呼べばかすかに返事する	大花火見上げさっぱり未練絶つ	有情無情 影絵のような恋でした	仏にもオンザロックを供えとく	向日葵の明るさ夏の真ん中に	鳥取市 植 田 一 京	日没に向かって奮いたっている	旅先で砂丘を少しコマーシャル	爪先の力残して引き分ける	呆れても居れず何から糾そうか	ジョーカーが甘いマスクをかけている	鳥取市 上 田 宣 子	人生ゲーム何かあるのが当たり前	万国旗くぐり秋風かけっこだ	枝や葉が問題点の顔をする	生き方を変更せよと熱が出る	絵日記は水やり雨の日も守る	鳥取市 石 上 悦 子	空高くトロッコ列車秋を往く	子供らの声に割りこむ妻の声	他人さまの意志で躓くこともあり	無愛想な奴だが吾娘の惚れた婿	友達のままで終った夏の海	島根県 森 茂 美
ブック店時の流れを吸って来る	通院のおみやげ薬十日分	照明器売り場の下が恥ずかしい	飲まず食わずで窓際の鬼ヤンマ	肌も良し眸も輝いて絶好調	鳥取市 武 田 帆 雀	くじびきで隣に虫の好かぬひと	虫の音に作句読書と夜が更ける	腹の虫ジョッキに機嫌すぐなおる	虫けらと言われゴロツキとも言われ	毛虫にも未来は蝶の自負がある	鳥取市 春 木 圭一郎	ときめいた恋の年輪見せぬ妻	ドラの音にふる里の風たんと吸う	顔パスが風化して来た不況風	紅引いて敬老会のはしゃぐ声	ふる里の顔を背負った芋届く	鳥取市 冨 山 檳榔樹	古里で安堵のつぼみ見せておく	幸せな日は親切をしたくなる	悪友の色は私も持っている	好い返事紅葉ひとひら添えておく	やわらかい布に情熱包んでる	鳥取市 福 田 登 美

ワイフレス望んでいるね粗大ゴミ人並みに二酸化炭素吐いているとっさには判断できぬ顔の色携帯が金庫の中で返事する	カラオケに負けじと唄うコオロギが鳥取市	赤いペン闘争心を掻き立てる	ペン先と紙のゲームは果てしない	断酒した親友が痴呆の治療受け	弥次馬は酒の肴をすぐつくる	スランプの消毒薬は欠かさない	鳥取市	法守り走る車が邪魔にされ	水槽に美人の人魚飼っている	亡き妻を偲べば部屋が広過ぎる	老骨が女に秘密守らせる	中年の女の恋は恐ろしい	鳥取市	ボケ気味のうちに身辺整理する	透明な世へと薄着のコギャルたち	デパートで妻が血圧下げてくる	小川から四季の詩消す官工事	道路掃除老人だけのボランティア	鳥取市
	谷						西						岩						美
							村						原						田
	次						黙						喬						旋
	H						Mz.						٠,٠						ızi
	男						光						水						風
きごとを言えば余計に辛くえ知らぬ箸が平気で食べ残手に箸持つ孫を叱れないりがたい話を聞くと眠くなり	送り火の向こうに父が母がいる鳥取市	お遊戯に毒を盛ってはなりませぬ	苦しみを解かさぬ儘に亡母の櫛	僧しみを解いた亡母の温い顔	脚光を浴びた小さな針の穴	亡き姑の空白うめる術もなし	元 鳥取市	ぜいたくの罰かも知れぬ酸性雨	苦手だと知ったときからライバルだ	遊ぶこと覚えた馬が走らない	へそくりが溜まって母さん強くなり	生命線このごろ少しのびてきた	水 鳥取市	常春の昆明茸はよく育ち	桃源郷の絵にわたくしを描き足そう	漓江下り不思議な刻の流れなり(桂林)	雲の峰悟空のお供欲しくなり	好奇心の塊ふたつパスポート	風 鳥取市
泣きごとを言えば余計に辛くなる飢え知らぬ箸が平気で食べ残す左手に箸持つ孫を叱れないありがたい話を聞くと眠くなる	送り火の向こうに父が母がいる鳥取	遊戯に毒を盛ってはなりませ	かさぬ儘に亡母の	しみを解いた亡母の温い	光を浴びた小さな針	る術もな	鳥取	いたくの罰かも知れぬ酸性	たときからライバル	が走らな	まって母	このごろ少し	鳥取	春の昆明茸はよく	源郷の絵にわ	下り不思議な刻の流れなり	峰悟空のお供欲しく	奇心の塊ふたつパスポー	鳥取
泣きごとを言えば余計に辛くなる飢え知らぬ箸が平気で食べ残すを手に箸持つ孫を叱れない	送り火の向こうに父が母がいる鳥取市	遊戯に毒を盛ってはなりませ	かさぬ儘に亡母の	しみを解いた亡母の温い	光を浴びた小さな針	る術もな	鳥取市	いたくの罰かも知れぬ酸性	たときからライバル	が走らな	まって母	このごろ少し	鳥取市	春の昆明茸はよく	源郷の絵にわ	下り不思議な刻の流れなり	峰悟空のお供欲しく	奇心の塊ふたつパスポート	鳥取市
泣きごとを言えば余計に辛くなる飢え知らぬ箸が平気で食べ残す左手に箸持つ孫を叱れないありがたい話を聞くと眠くなる	送り火の向こうに父が母がいる 鳥取市 岸	遊戯に毒を盛ってはなりませ	かさぬ儘に亡母の	しみを解いた亡母の温い	光を浴びた小さな針	る術もな	鳥取市 坂	いたくの罰かも知れぬ酸性	たときからライバル	が走らな	まって母	このごろ少し	鳥取市 岸	春の昆明茸はよく	源郷の絵にわ	下り不思議な刻の流れなり	峰悟空のお供欲しく	奇心の塊ふたつパスポート	鳥取市 倉

色っぽい人魚と恋をしてしまう 神よ泣け特攻隊よケロイドよ 恋さめて不倫のトゲが抜けません ペラペラとしゃべるな風 好きなんだ逢えば喧嘩をふっかけ み仏にすがると罪が消えますか 招 知 嗤うひと女の敵は女なり 光ってた君青春 枝先にもう戻れない 売りつくし人を集めて秋を追う つぎつぎと一族集め逝きそびれ けれぬ席に参加しうろうろす 眺 1 らすなともらしたうわさもう戻る いたぶんだけ酒を飲んで寝る 月に夫婦で語る過去未来 いくつ食べてそんなに美しい たくしのボディガードのお父ちゃん が立たねば越える海だった 8 ジンロードの真 帰らぬ夢を追うおんな のレクイエム 栗のイガ ん中へんで風になる が聞いてるぞ 鳥取 鳥取 米子市 鳥取 る 市 市 市 近 前 山 鷲 JII 見 田 洋 佳 IE. 子 枝 々 子 枯れてゆく木と知りつつも鶴を折る 逆縁のつらさ針山歩くよう 雷に打たれたように蟬が落 心乱れ駱駝も人を寄せ付けぬ さみしくはないよみんなが守ってる あの時の笑顔最 時々はピアノが洩れる友の 進みすぎた暮しに背をむけている 飾 老父のロー言が出てしゃべり出す まだ苦痛のもれて来そうな骨箱 時 息を吐くそれは絹糸吐くように 寝たきりの父を守っ 飾り気のない 美学のように男同 一人芝居もひとりで出来るものでない n 間 りすて素顔 つまでも王座におれぬ柿の朱 れる足場を押さえてくれる友がい 程 までに摘まね に祈っ てい になった吾亦 お地蔵は気楽だな 後になろうとは たに何故急ぐ 士で妬 ば ならぬ た五百 ね合う 花 が有る 米子市 米子市 米子市 米子市 だ 茂 青 石 政 理 戸 垣 花 高 田 H 1枝子

鶴

子

代

米子市 田	中	亜	弥	米子市	白	根	S
表札もいばりばなしの父である				約束が果せず茄子が紫に			
目をとじた父に剃刀あててやる				秋なすの艶にふたたび恋をする			
父をゆすぶり今日のわたしをひびかせる				高速で突然止まることがある			
父と母のあいだにいつも立たされる				美容院男もしらが染めカット			
緊張の余りに父のミステリー				逆らってしみじみ敵は多数決			
米子市 澤	田	千	春	米子市	木	村	春
軽石はつらい昔を語らない				徽臭い蔵の奥から出る昔			
甘ちょろい虫が壺から出て困る				足下の土に先祖は住んでいる			
軽い脳味噌つれてお笑い聞きにゆく				情報の早い世相にひきずられ			
また今日もつらい話を月とする				吉日に仕立ておろしを着ることに			
酸欠の町にコスモス耐えて咲く				甘酸っぱい思い出残し赤とんぼ			
米子市 林		瑞	枝	米子市	永	井	三津
手術続く深夜に高次治療室				縋りたい樹も時にある寡婦の森			
クモ膜下出血主治医にまだ会えぬ				母子家庭気丈な母で子の無邪気			
意識もうろう義姉はわたしと同じ歳				お手本にならぬ大人見子が育つ			
御祈祷を頼む武内神社まで				仏門の中で気付いた我が器			
元気の気を抜かれて病院から帰り				裏切らぬ川柳友に生きて行く			
米子市 野	坂	な	4	米子市	中	井	Ф
樹の幹を這う神様を見てしまう				残すものお花畑の花と種			
よろこびを測る尺度はそれぞれに				この蟻のどの一匹が私だろう			
何時見ても絵の達磨さん凜と立つ				さらわれて吹かれて風に人が逝く			
羽衣を借りて貴方に逢いにゆく				目をとじて木馬で回る夢を見に			
役立ったつもりが邪魔になっている				鴨居までとどく男の孫三人			

き

枝

2

後咲きに微笑みかえすさるすべり競えてきた私に喝は入れ過ぎず癒えてきた私に喝は入れ過ぎず・からぬは凪を待つまからからない。	ちゃんの種卒業	母さんの見えぬ我が家に風が無い 末席が耳そば立てて風を読む 三回忌思い出の風たぐり寄せ どの橋もたたけば渡る気にならぬ どの橋もたたけば渡る気にならぬ	米子市 日本の過去の罪問うミサイルか 日本の過去の罪問うミサイルか がースデーケーキ作って独り食う 七人の侍と姫わが句会 も大の侍と姫わが句会 を見る吾が悲哀
	Щ	淡	最 本
	中	路	上 吉
	康	W n	和 宗
	子	n 子	枝 光
シルクよりやっぱり綿のシャツを着る名案はないが度胸でカバーする颯爽と変身をした不肖の子塩がめ飲めとすすめられても毒だみ茶	行かぬが妥協	人生の仕上げばちほち駒を打つ少年に心和ます駅が無い中金を齧るでっかい虫を飼うれてコツ車だけど我が家の知恵袋がコツ車だけど我が家の知恵袋	満面いまさら嘘と言えも 場に我と思えぬ力あり 場に我と思えぬ力あり 場に我と思えぬ力あり
•	松	野	米 山
	本	П	田 本
	よ	節	幸 玲
	よしえ	節 子	幸 玲 子 子

もう止そう後継ぎのない梨作り	法の裏うとい顔してくぐり抜け	冷凍で七つの海の味が着く	人間の弱さつぶやきつつ生きる	土壇場になれば素手でも火を摑む	鳥取県	富士の絵を飾り幸せ待っている	難問は亡父に相談したくなる	仲良しがいつからだろう敵になり	久しぶり帰ればビルが立っている	思い出が谺を返す齢になり	鳥取県	その昔我が家も食べた松葉蟹	微睡みの中にナツメロ深夜便	塩梅は良さそうだけど髭の顔	告知から二人三脚冬の章	気楽さと淋しさ田圃止めた秋	鳥取県	天下泰平 極悪人になるひとり	長男の扶養家族にしてもらう	地獄まで螢になって飛んでゆく	清貧の持ち味笑い皺ができ	御身大切 食欲の秋が来る	鳥取県
					上						西						羽津						土
					田						原						Ĵij						橋
					俊						艷						公						
					路						子						乃						螢
何もせず晩酌だけが続いてる	遺伝かも知れぬ大きな笑い癖	酸欠になるほど笑う喜劇みた	長生きはやめよう子等の為だから	信頼の友が身近に居てくれる	鳥取県	うどん定食或る晴れた日の日曜日	まだ青い娘で返事ハイハイハイ	甘い無花果 男に食わすのが惜しい	何の苦もない顔をして豆を煮る	一言が許せず妻は無口なり	鳥取県	学ぶ子の清いひとみがたのもしい	安らぎの一時童歌に酔う	赤トンボわがもの顔に秋を舞う	老いたとて頭は留守にせぬように	快適なリズムに朝の歩がはずむ	鳥取県	寝たきりが定期預金を抱いている	何取りに来たのか呆れる物わすれ	チロリン村の友だちが呼んでいる	一升瓶で芋名月を楽しまん	都合ではとっさに疼く神経痛	鳥取県
					Щ						田						津						乾
					本						村						村						
					正光						きみ子						八重子						隆

渋紙をゆっくりはがす罪の音	もう一人の自分に出合う座禅堂	湯の唄を一つもらった箸袋	やがて欠けることは話さぬ夫婦箸	哭いたのは私の中のもう一人	鳥取県	礼儀正しい一しょうびんが今日は	達筆でないが横文字なら書ける	なま臭い風が六法書をめくる	風上でペンキ屋さんが塗っている	金婚か今をしみじみ語り合う	鳥取県	敬老の老という字に弱くなり	生かされて諦めもつく仏間の灯	ラッキーな週休二日娘とデート	美しく映る鏡が欲しくなり	潮時を待てば静かに海は凪ぐ	鳥取県	自由自在時間空間我が傘下	喪が明ける遺影の笑顔そのままで	ドッコイチョ孫に真似られ楽天地	思い出も服も可燃のゴミに出す	マグカップ大きい方にして独り	鳥取県
					原						土						土						始
					み						橋						橋						
					2						はるお						睦						寛っ
					を						D						子						子
有り難いことに呆けずに母がいる	直球をとっさに返せない焦り	すねに傷その一言が身に響く	その風と戦っている枯れ芒	度々に風を起しに現われる	鳥取県西川	寺へ来てたっぷり酸素すっている	ふる里の窓辺に母はもう居ない	秋冷えの村へ嫁さん来てくれぬ	何食わぬ顔で飯つぶ拾ってる	つとめ果したピエロへ温い明り待ち	鳥取県 黒 田	漁に生き海の機嫌と響き合い	造花などイヤだと仏さまが拗ね	翔べそうで気まぐれ風を待っている	悪友がつなぎ直した縁の糸	方言がとっても温い朝の駅	鳥取県 石 谷	ふる里に移れば淋し影法師	男と女雨で相合傘にする	しんみりとなった心をもてあます	明日は明日と思えば夕日美しい	昼の月見ながら地酒飲んでいる	鳥取県橋本
					和																		
					子						く に 子						美恵子						多哥由
										3	— 2	22 -											

菊一ぱい供えて亡夫に語りかけ	失敗を神様きっと見捨てない	人脈をたどれば酒の乱がある	人間不信だんだん口が重くなる	紅葉の季節自然が絵画展	鳥取県 近 藤	けじめにはならぬ言葉で逃げて居る	生きて来た証日記で保存する	体調のセーブは座禅から学ぶ	肩書を外すとけじめ取れますか	忍び寄る病魔の影に怯えてる		孫の如露 夏の陽受けて虹えがく	うちわ背に盆踊りした幻か	達筆もワープロの世で目立たない	雑草の強さ呆れるばかりです	あの人はとっさの知恵がありすぎる	鳥取県国森	哀愁を乗せてゆっくりいわし雲	灯心にじわじわしみる言いつたえ	ロケットが上がりしきたり軽んじる	過ぎて行く月日が謎を深くする	花園で琴の音色が冴えわたり(亡き親友へ)	鳥取県 権 代
					春						単						武						康
					恵						車						子						女
何故にそう肌を見せたいキャミソール	バーゲンに買わない客がぞろぞろと	西日受け溶けてしまった午後の時	地蔵盆遊びおさめの夜も更け	盆提灯美しと見た亡母と見た	神戸市 木	残暑きびし それだけ書いて日記閉じ	独りごと言うてひとりで苦笑する	白萩のやさしさとんぼをやすませる	秋彼岸母と作ったおはぎなど	合わせ味噌合わせ具合が今朝の味	神戸市 山	殺しあう国ありレストランでメニュー	平和なら男の化粧も許そうぞ	至福とはカタログ見てる妻の顔	転勤の倒れしままに植木鉢	車窓より過ぎし彼方を老夫婦	神戸市 中	肥沃の地男は堕落したくなる	酸性雨極彩色のパラソルに	陣痛の狭間運転して行った	ガンと言う母に躾を直される	風紋を描いて無口天も地も	鳥取県・吉

口

美

穂

村

ゆきを

田

孔美子

村

貴代子

挨拶は省略まずは握手する	氷山の一角騒いだりしない	多い少ないもめているのは大人たち	あの日から割れそうなもの飾れない	リビングに飾りはずした顔が寄る	芦屋市 黒 田 能 子	梨 葡萄 栗 さつまいも おんなの季	真実に霧が懸った鼻の汗	翔んでみたいなローランサンの美の世界	母と娘になって再びめぐる秋	パンの香が素通りさせぬ秋たけなわ	尼崎市 長 浜 澄 子	未来の詩もそう遠くない流れ星	月がきれいと聞いても腰の重いこと	振り返るなといわれても来し方の長き	魅惑の海に胸の底まで捉われる	ひたひたと情けが寄せる北の旅	尼崎市 春 城 年 代	幸せな首を並べて夜の秋	秋蝶乱舞妻は少女の顔になる	ひらがなで書けば詩情の増すことば	残暑まだ続き熱帯魚はあくび	少々の不義理重ねて夏を越す	尼崎市 春 城 武庫坊
幸せを少し小出しにして喋る	制服を脱ぐと仲間の輪がぬくい	抜きん出て赤が先ず咲く秋桜	鈴虫の声大きいぞ飼育箱	父と子の子のリードする政治論	西宮市 亀 岡 哲 子	落日へひととき空の世界なり	ジョッキから楽しい詩があふれ出る	鏡の中のわたしはいつも冷静だ	苦い思いびしゃりと消した大花火	ぽっかりと雲よ気楽な旅ですか	西宮市 西 口 いわゑ	年の功姑の降ろした蜘蛛の糸	人生のおつりをもらう今日の分	なぜか今朝さも辛そうに鴉鳴く	雑然の本棚 主写し出し	その時は目を光らせて買った本	西宮市林はつ絵	仲直りしたくて老姉は柿を剝く	熱帯夜ラベンダー色の風恋し	真夏日に棘だけ生きてバラ哀れ	夏風邪の横でこおろぎ鳴いている	虫の声待ちくたびれた秋ざくら	伊丹市 山 崎 君 子

無い国になったよ赤とん	るこの	頑なな殼持つ栗を剝いている	梅雨明けぬままの秋なり空の青	野良ねこにされて三匹生きている	西宮市 牧	早とちり蛙はかえるの唄が合う	朝目覚めプランを立てる無頼なり	女でも男でもないわが住居	天地無用ひとりで生きた長い知恵	はるかはるかわたしにあった青春は	西宮市 山	洗濯機に昨日の乱が消えてゆく	身の疵にくちびるやさし伎芸天	今はもう響かぬ太鼓打っている	風やさし握りこぶしを開かせる	ラストスパートかけねば今が彩褪せる	西宮市 門	古里を出た日の色よ女郎花	母傘寿遊ぶ喜び知り初めて	ずる休み何時か試して見たかった	辺境の生れでマンション最上階	多い方をそっと押しやる娘の育ち	西宮市 秋
					渕						本						谷						元
					富喜子						義						たず子						て
					子						子						子						る
なり	れてはならない神戸忘れた	癖ついたペンで私を書きためる	ジョギングにワルツのとんぼついてきた	肝心な事は飾らず言っておく	西宮市	年ごとに笑いの種が減ってくる	寝坊した朝は気分も食もよし	おしぼりで一息ついで胸算用	年とって眠れる獅子でないと知り	ゆっくりと団扇の涼が性にあう	西宫市	トランペット哀愁漂うモンマルトル	湯上がりの適切でない言葉寒し	人知れず咲く大根の花僕は好き	大連に来てアカシヤの雨降りそそぐ	バラ園で会社の話ばかりする	西宮市	無人駅阿蘇に鶏頭咲き乱れ	夕顔が皓々と咲き秋の音	その名をば誰がつけしぞ酔芙蓉	彩替えて君を待ってる酔芙蓉	葉鶏頭仰ぎて高し大観望	西宮市
			-		击				,		出	in			1.		市						出
			き		113						114						5.450						114
			きた		緒						井						井						久
			きた																				

珍しく肩を叩いた子の無心 正論を無口が開く社のピンチ 正論を無口が開く社のピンチ とちらにも分けてやりたい優勝旗	かたくしを期待外れという妻よかなさとを一人有難がっているやさしくて騙しきれない人がいる	文母兄弟 女性三名置いてゆき 三姉妹一番上は痴呆の身 足腰は弱るし頭は疲れるし 亡き母の年にだんだん近くなる ふる里は私の眠るすきもない 川西市台風がこないとしまらない九月 台風がこないとしまらない九月	裏しからアイスピックが消えている 南丹よし柿の葉ずしも添えて買う 行きつけば榊莫山みつをの字 思わざることの続きし盆の月	宝塚市
	吐	氏	吉	嵯峨
	田	林	田	根
	公	洋	笑 .	保
	_	敏	女	子
定待好の日	ピあ 秋ン わ立	一亡 考熱し白ハ 日夫 えさき黒イ	シ体菓セ骨ャ形子ン切	
定年でできた自由に自由なく結のみやげは旅費を上まわるがのみやげは旅費を上まわるがのいまなたがの暮れがしく意見がおうてビヤホール	ピンクがいいな還暦のちゃんちゃんこあわよくば句をものにせん散歩道 秋立って身辺整理思いつく	一目を置き合っているあねいもうと に表に一歩近づく心経暗記して 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 で大に一歩近づく心経暗記して で大に一歩近づく心経暗記して で大に一歩近づく心経暗記して で大に一歩近づく心経暗記して	庫米	姫路市
な秋わるなたれるなたれ	クがいいな還暦のちゃんよくば句をものにせん散って身辺整理思いつく	はしてくれ 年が寄ってく 年が寄ってく それっきり それっきり 経暗記して	ーを切ると隣も切れと来る 特がある通勤車 長庫県 を切ると隣も切れと来る	路
な秋わるなたれるなたれ	クがいいな還暦のちゃんちゃんこよくば句をものにせん散歩道 って身辺整理思いつく	にする 年が寄ってくる 年が寄ってくる それっきり 大阪市 大阪市	一を切ると隣も切れと来る一を切ると隣も切れと来る	路市
な秋わるなたれるなたれ	クがいいな還暦のちゃんちゃんこよくば句をものにせん散歩道って身辺整理思いつく	除はしてくれぬ 年が寄ってくる 年が寄ってくる 大阪市 西 経暗記して	一を切ると隣も切れと来る一を切ると隣も切れと来る	路市古

十三夜集まっている飲み仲間携帯がふたつも鳴っている車中精いっぱい出した失敗明日に生き能力の限界知って出さぬ欲	大阪市 河 井 庸力な味方となったコンパクトとつずつ出口を閉めて喋る人とは長生きごっこしていますとは長生きごっこしています	大阪市 神夏磯 典顔をカバーの髭が愛らしい 大阪市 神夏磯 典としずくのブドウ酒に酔うあかんたれ としずくのブドウ酒に酔うあかんたれ かした医学老化に打つ手なし	大阪市 稲 本 凡いさんと呼ばれほほ染む古希の女とりもの一つおまけの煮物買うとりもの一つおまけの煮物買う	大阪市 大 塚 節
	佑	子	子	子
死に体に追打ちかける貸ししぶりおが家にもオンブズマンがひとり居るわが家にもオンブズマンがひとり居るかが家にもオンブズマンがひとり居るかが家にもオンブズマンがひとり居るがない。	栗御飯ほのかに香る亡母の味のこれの選り火のあと遠花火を排田コスモスだけが乱れ咲を味りが重彼岸団子と墓参り	ンターナショナルすど とら素直に言えて恙い とらや葛飾大食が とらや葛飾大食が	大阪市でいたですと嬉しいことを言うが一番を受けている。というでは、大阪市を関が得した思う酔い心地を開からですと嬉しいことを言うが、大阪市の、大阪市の、大阪市の、大阪市の、大阪市の、大阪市の、大阪市の、大阪市の	
ぶ り り 居 る	大阪市	れ 基 無し り 大阪市	大阪市 大阪市 大阪市	大阪市
が り 居 る	大 地 〈	大違い大強い	大阪市津	大阪市川
がり り 居 る	大阪市	大阪市		
がり り 居 る	大阪市板	大阪市杉	津	Щ

待つよりも待たせる時計すぐ進む	写経して人間魂浄化する	元気出せ自分励ます応援歌	輪が回る二十日鼠は檻の中	もうこれで良いよ元気を出そうよね	大阪市	現実と思い込むには悲しすぎ (弟の死)	子も夫も出かけた後の深呼吸	浮き雲の流れる過疎に老母がいる	秋風に老母をさそって萩の寺	ひとりぼち私を庇う影ぼうし	大阪市	逝きたくて死んだ訳でもない仏	野球よりおくに応援面白い	息子の嫁に耳の掃除はことわられ	一流ママそんな扱い妻はせん	体重はバンドの穴が教えてる	大阪市	芒野は暮るるに早き峠茶屋	やんわりと花束の如 孫を抱き	窓ぎわに芒一本生けてあり	天国に電話かけたい秋夜長	秋日傘仕えぬままに彼岸花	大阪市
					小						津						寺						奥
					糸						村						井						田
					昭						志華子						東						良
					子						芋子						雲						子
肌同じみんな友だと散財し	答弁は決まり文句で前向きに	見せかけのリッチな国に危機迫る	缶ジュース条件反射で裏を見る	エルニーニョ日本の四季を狂わせる	大阪市	口裏を合わすと嘘が歩きだす	二枚舌嘘と真が絡み合う	使い減りしたのか骨が軋みだす	投げようと握った石が手に馴染む	欲と影何処へ行っても従いてくる	大阪市	吉凶が平等でない窓の月	尼将軍といえども女悋気持ち	またかいな何時もの虫がと影法師	嘘 ほんと選り分けて聞く母の耳	ラムネ瓶二銭の頃の音で鳴る	大阪市	逆転のチャンスないまま秋深む	オンザロック噂ばなしは聞かぬふり	立ち読みの雨は小止みにならずして	労働歌などは知らないパートです	朝食は猫優先の老夫人	大阪市
					Щ						井						Щ						辻
					内						上						原						Щ
					叭						白						章						慶
					笑						峰						久						子

興福寺阿修羅の澄んだまなざしよ 事椅子行きたいとこがたんとある 女には二つの顔があるという 大阪市	ナツメロの特集見てる走馬灯 製とどく秋の恵みが滴する 製とどく秋の恵みが滴する りょう うろこ雲	要数をふやして赤旗なびかない リストラに大樹の影も危ぶまれ 彼岸花仏に背く赤い花 値上の 色は仏に近づける をとり 食の介助へ行く日課 ほとり はいい かない まがま はいかない まがま はいかない まがま はいかない まがま はいかない まがま しょう はいかない まがま はいかない まがま はいかない まがま はいかない まがま はいかい しょう はいかい しょう はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいかい はいか	大阪市	大阪市
杪中	ļ.	渡	北	本
本	Š.	部		間
蕗	Ê	さ と 美	勝	満津 子
児	<u>I</u>	美	美	子
世の矛盾悶悶として星夫の手の記憶うすれて夫の手の記憶うすれて	娘と孫と旅す病院を出れば病院を出れば	皮肉ったのにを肉ったのに	夏椿落下流水花筏 群れるのはメダカ 群れるのはメダカ	
月夜 生 秋深し スでチリワイン 堺 市 神	る 倖 せ 娘 が 優 し は に れ て い る 病 に れ で い る 病 に れ で い る 病 に れ で い る 病 し に れ で い る 病 に れ の に に に に に に に に に に に に に	う名の人を知っている ・ はなし進まない ・ はなし進まない ・ ないががと礼言われ	問うた巨匠が幕を引くも昔は柳腰も計は柳腰	大阪市 小
月夜 生 秋深し スでチリワイン 界 市	地良し	市 え ア る 則 田	問うた巨匠が幕を引くも昔は柳腰も計は柳腰	小林
月夜 生 秋深し スでチリワイン 堺 市 神	地良し	市 えアる	問うた巨匠が幕を引くも昔は柳腰も計は柳腰	小

うし ミル フラ U ふっ 新 傘 今 うんうんと素直 姑 健 猫 とり 下 - 寿過ぎ さんの 聞 猫 大 IJ H 康 画 3 せ がすっ てなお きれてから足どり クのめば小鳥のようなのどぼとけ > 虫 維 鉄 をひろげ 0 コプター _ 居でメ から の上 ス を 介 H 持 40 オン」十二歳には見せられ 味をい にすれ 乱 老 今日も 0 放 護 夫婦 水大阪 し木陰 步 約 世 をゆっくり船がゆ か 10 り自 たらそれ D 0 43 の轟音仰 0 にくれ ただく て楽をしています スト ば 風 IJ 0) ン大ぶりに切って に の駅 鈴がひびき合う ズム 波風たたぬ 7 由忘 吹か 児とふ V Vi で買う る空返 ス溜 猫がの ます で お れてる ぎ種を播 0 れてる 無事 軽 命 いこと 8 かながら 家 3 E 事 暮 < ず n 13 市 市 市 市 る 柿 宮 近 志 本 花 藤 \mathbb{H} 紀美女 豊 Ŧ. か りん 代 子 じわ 美人同 気の 息抜 肩書 おか 幾万の恋歌流 ひとり 孫 旅 お 才 天 蟻 力 カラフルな薬どれ 派人を泣 枚のカ ンネトー 化 仰 0 木 0 V 置け かきの 手が Ĺ ľ 桃 1 > 粧 列 の無名が僕 ダー b 伴 10 0 " 時 日 0) 人間 つも 離れ と効い 7 意気で真夏日越えまし カ なフェーン現 2 向 か 顔 パフェ 今日 す 職 日 F E が 0 を取 う 摩 場 n 老 陰 1 P 海 してきた 5 老 1 てきたの なく 履 の宿で を選 周 かい 辺 妻 0 0 る五 んだ硫 お 平 かが効くだろう 戻す 歷書 を 趣 42 と言うて見る 0 味多彩 深 ば 宝 和 群 は妥協 飾 物思 3 な 象 銀 色 n 11 など要ら は 花 黄 7 か 河 7 0 霧 10 to せず ル 逝 [50] 畑 Vi Ш 岸 を付け って 3 知 寒 (北海道旅行 和泉市 和 高 和 た n 田 石 田 から 市 如 市 市 浅 芳 西 野 地 中 出 洛 房 狸 文

猫

に指さして教える飛

行機

焼の先祖

を探

す食べ歩き

時

村

酔

岸和田市	
原	
さょ子	

岸

和

田

市

古

野

U

で

H 0 喧 \$ 0 証

号令を自分に掛けて背を伸 ちゃ んはうどん食べても爪楊枝 ばす

みな消されて滝の音ば かり(ナイヤガラの滝

緩 ゴウ音も入れてビデオを回 や か してる 和 田市 岩 佐

ダン吉

かみんなが持つかなんだろう D 流 アに死者 n あくせく 1の呻き声 す 3 私

43 献金を透かせば政治見えてくる 核

でゼロ

争展

ic

13 の思 背中へお母さん

あ 極 楽 の世では一服つけてみはったら でよろしよろしと吞 んではる(児島与呂志さんを悼む (福崎しげおさんを悼む 高 須

岸和

H

市

賀

金

太

年金のぼくも税金はろてます

梅干しに

創 膏 張って経済治るの 要冷蔵とある不思議

和 H 市 寺 \mathbb{H} 甚

気がか 堂 マと煙 Vi n まは 草 かい が喫えた頃に辞 済 な んだとたんに力抜 11 温もり かい あ れめ 3 1+

郵便

だけけ

活気ある客の群

婦

唱

夫随 局

すっ

かり妻に慣らされる

いりあ する父い る命 途に夢を追 てくれ るこ 幸よ

片言 0 電話キューピッドか も 知 n か

生を丸く納めて終りたい

風 雪になじんで友は北に住 む

いつまでも歳をとらな

10

定

期

夫々が自由に生きる三世 代

診 先生の渾名先輩から伝え 察を待 0 間気になる咳 0 人

1 ル カル ムー 0 ン <u>Ш</u> レンズの中では睦まじく つ消え道路つく

D 7

六十 言い の手ならい娘の晴着 過ぎの愚痴もどらない秋あ 縫 う か ta

ってランチタイムは女性 群 尾

市

宮

崎

シマ子

飾

を満喫食べ 庭 0 ポブラに つくし 11 U め詫 読みつくし UK る今

校

月の 落日を拝むやさしい 枚 紙 V 夜は 0 重みよ遺 虫 0 音もものさびし 言状 鬼と住

秋風に血が騒ぎ出す笛太鼓

和 H 市 長 谷 JII

岸

呂 万

苑 子

和

田

市

原

-31 -

どの花も咲いて見比べたりしない	合掌をした手がすぐに蚊を叩く	けがをしたことはおふくろには内緒	お百度を踏んで最後の恩返し	無明の海を巧みに泳ぐ占い師	八尾市 村 上 剛 公	忙しない忙しないとて楽しそう	作り笑いがその内本物に変わる	ピン札をすぐしまい込む癖がある	こころ耕すペンが重たくなってくる	ぼくを躾けるママとばあちゃんけんかする	八尾市 村 上 ミツ子	絵手紙にいっぱい秋の実が熟す	体調のよいみの虫でよく揺れる	遊び上手忘れ上手で生き上手	ぶり返す残暑ひまわりだけ元気	ええとこがいっぱいあって絵にならず	八尾市 宮 西 弥 山	蓮の花友の面影すぐ消える	花をまとい老いをまとうていく命	まだすこし女を残し傘をさす	お散歩はひとりの道よ夕茜	寂聴尼法話のなかに恋のあり	八尾市高橋夕井
					治						子						生						花
くよくよはおよしなさいと曼珠沙華	親馬鹿がつくって見せる力こぶ	カラオケに歌うツモローか	娘と歩くアメリカ村で異邦・	群れながらわたしもひとり木もひとり		声かけ合うて仮設ひとりやおまへんで	さわやかな風にうっかり昼寝	寝る前の水一杯が宝水	妻は留守地酒で秋の色をぬる	踊りの輪知らず知らずに手が		お葬式我におきかえ秋の中	薬物混入私を守るティーポッ	FAXに五七五あり三年生	白杖の歩幅に従いて青をまつ	菩提娑婆訶ははと語らう秋彼		真実の口にこわごわ手を入れ	トレビへは五円玉ですジャポンです	一日で成らぬローマを半日で	コロッセオ石の文化に血の臭	亡父亡母を連れてお盆をイタリ	
曼珠沙華	こぶ	から元気	人	木もひとい	八尾市	おまへんで	校する		.0	踊る	八尾市		F			岸	八尾市	る	ンです		63	リアへ	八尾市
曼珠沙華	こぶ	ら元気	人	木もひとり	八尾市 大	おまへんで	校する		•	踊	八尾市 吉		ŕ			岸	八尾市 高	る	ンです		63	リアへ	八尾市 内
曼珠沙華	こぶ	ら元気	人	木もひとり		おまへんで	校する		8	踊	尾市		F			岸	尾市	3	ンです		11	リアへ	
曼珠沙華	こぶ	ら元気	人	木もひとり	大	おまへんで	校する		•	踊	尾市 吉		ŕ			岸	尾市高	る	ンです		63	リアへ	内

秋刀魚やや焦げて庶民のいろになる	五分粥に元気が出たと走るペン	水引草精いっぱいのちさい花	下車駅までつまらぬ電話聞かされる	神経の半分で聞く妻の愚痴	富田林市	挨拶はいらない南向きの部屋	何もかも分かって海が荒れている	逃げ込んだ所に置いてある箒	不景気へ大きな声を出しにくる	向日葵に金の心配させている	松原市	フリーターなどと気取っている無職	輪の外で飲むコーヒーは濃く熱く	自分史のどこか自分に甘い章	ひと夏の夢朝顔よありがとう	長寿国猫も金魚も私も	松原市	名人芸揺れる車内で化粧する	居酒屋も一番隅に座る癖	私にはティッシュくれないのは何故だ	生臭さ少し残して生きている	ライバルの影がわたしを抜いてゆく	八尾市
					片						小						玉						篠原
					岡						池						置						61
					智恵子						しげお						重						つふみ
					子						お						人						2
花図鑑小さな庭をあふれさす	なんとなく庇いたくなる秋桜	半分はあなた委せできのう今日	親切な人の隣でバスの旅	出しゃばらぬ人を引っ張り出す話	藤井寺市	すぐばれる嘘が可愛い人でした	三本の矢をばらばらにした遺産	焦点を絞れば見える母の愛	いずれ住むところだ墓を洗っとく	亡母からの便り時雨に濡れて着き	藤井寺市	騒がれているとも知らず孫の顔	病院を二つ回って洗濯物	ばあちゃんの宝が増えてバカになる	古稀迎え孫の産湯を手伝える	初孫を飽きなく見入る硝子ごし	河内長野市	いつかまたふり返るかも日を溜める	気持よく聞いてもらってみな忘れ	久し振りとんびの輪を見た奥びわ湖	雷が遠くで鳴っている矛盾	敬老の日から自転車やめました	富田林市
					高						吉						植						松
					田						岡						村						本
					美代子						美						喜						今日子

ふり切って親より先に逝くでない	杯を回して国を論じ柳を論じて	落し蓋老いに逆らうべくもない	身八つ口不況の風が吹きぬける	羽曳野市	リストラとベースカットが睨めっこ	誘惑を軽い財布に救われる	スポーツに青春賭けている平和	隣席の美人気になるまだ男	好きなこと言うて男を上げている	羽曳野市	首筋の涼しさ秋が来るだけで	ひと声をかけて横切る若い猫	つり橋でなりふり構うのはおとこ	面影は恋した時のまま残る	水に流せる大人にはまだなれず	藤井寺市	不景気をぼやきながらも空の旅	やんわりと刺された釘に気が付かず	惜敗と言って完敗慰める	セールスは先ず玄関の菊を誉め	あれ以来好きなカレーも食べてない	藤井寺市
				吉						榎						鴨						中
				Ш						本						谷						島
				寿						吐						瑠美						志
				美						来						子						洋
ほそ道や身に染れ	八十歳少し緩めな	結論が出るまで酒は	酒臭いハンカチで拭		立ち止まること	勘当ですんだ	五百円握って今日	ルーブルも	一万語増や		フラッペ	知床の氷	みの虫は	キリギリ	アブラ虫		不器用の言	足元を見て	左利きの	すばらしい	涼風を入れ	
む風の一行詩	た夢袋	伯はおあずけか	で拭く玉の汗	東大阪市	まることを知らない回游魚	だ昔のどら息子	て今日も医者通い	ブルも閣僚もみな切り捨てた	万語増やした辞書で儲ける気	羽曳野市	ラッペとかっこはいいがかき氷	氷がはこぶ春の音	みられるほどに楽でない	ス餌を残して死んでいる	殺され方がひどすぎる	羽曳野市	不器用のうしろにひとつ目が欲しい	足元を見てるつもりの前のめり	女優きれいな箸づかい	ばらしい右脳を持った友ばかり	を入れるとさんま焼くにおい	羽曳野市
風の一	た夢袋	おあずけ	く玉の	大阪	ない回游	0	も医者通	切り捨て	した辞書で儲ける気	曳野	とかっこはいいがかき氷	がはこぶ春の音	みられるほどに楽でな	ス餌を残して死んでいる	殺され方がひどすぎる	曳野	欲し	前のめ	いな箸づか	った友ばか	くにお	曳野
風の一	で夢袋	おあずけ	く玉の	大阪市	ない回游	0	も医者通	切り捨て	した辞書で儲ける気	曳野市	とかっこはいいがかき氷	がはこぶ春の音	みられるほどに楽でな	ス餌を残して死んでいる	殺され方がひどすぎる	曳野市	欲し	前のめ	いな箸づか	った友ばか	くにお	曳野市
風の一	で夢袋	おあずけ	く玉の	大阪市 森	ない回游	0	も医者通	切り捨て	した辞書で儲ける気	曳野市 三	とかっこはいいがかき氷	がはこぶ春の音	みられるほどに楽でな	ス餌を残して死んでいる	殺され方がひどすぎる	曳野市 酒	欲し	前のめ	いな箸づか	った友ばか	くにお	曳野市 福
	ふり切って親より先に逝くでない	り切って親より先に逝くでない ほそ道や身に染を回して国を論じ柳を論じて	り切って親より先に逝くでない 八十歳少し緩を回して国を論じ柳を論じて	り切って親より先に逝くでない を回して国を論じ柳を論じて 八十歳少し緩し蓋老いに逆らうべくもない は蓋老いに逆らうべくもない 酒臭いハンカ	り切って親より先に逝くでない ほそ道や身にを回して国を論じ柳を論じて 八十歳少し緩し蓋老いに逆らうべくもない 結論が出るま八つ口不況の風が吹きぬける 吉川寿 美 河臭いハンカ	り切って親より先に逝くでない ほそ道を回して国を論じ柳を論じて 羽曳野市 吉 川 寿 美 酒臭い八つ口不況の風が吹きぬける 引 寿 美 ごち止ストラとベースカットが睨めっこ	り切って親より先に逝くでない (ほそ道を回して国を論じ柳を論じて (大声とベースカットが睨めっこ (大一歳) (大一名力) (大一名	切って親より先に逝くでない 近天道 切って親より先に逝くでない 五百円 五百円 五百円 大一歳 一次に青春賭けている平和 五百円 五百円 日本 11 一次に青春賭けている平和 五百円 五百円 12 日本 13 日本 14 日本 15 日本 15	り切って親より先に逝くでない ほそ道 カ切って親より先に逝くでない 双曳野市 吉 川 寿 美 水一戸とベースカットが睨めっこ 双曳野市 吉 川 寿 美 八つ口不況の風が吹きぬける 酒臭い し蓋老いに逆らうべくもない 酒臭い で回して国を論じ柳を論じて 10 では、 10 では、 10 でない 10 おおい 10 10 10 11 2 12 2 13 2 14 2 15 2 16 2 17 2 18 2 19 2 10 2 10 3 11 3 12 4 13 4 14 4 15 4 <td>り切って親より先に逝くでない り切って親より先に逝くでない り切って親より先に逝くでない の受して国を論じ柳を論じて の切って親より先に逝くでない ほここと言うて男を上げている の当れる の当れる の当れる の当れる の当れる の一次の風が吹きぬける に遊らうべくもない を回して国を論じ柳を論じて の回して国を論じ柳を論じて の切って親より先に逝くでない に述らうべくもない に逆らうべくもない た回して国を論じ柳を論じて に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない た回して国を論じ柳を論じて に逆らかない。 に逆とがない。 に</td> <td>羽曳野市 榎 本 吐 来 一きなこと言うて男を上げている アイン アラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ カウロ不況の風が吹きぬける し蓋老いに逆らうべくもない と</td> <td>おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 おの美人気になるまだ男 ポーツに青春賭けている平和ポーツに青春賭けている平和</td> <td>おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 一きなこと言うて男を上げている ポーツに青春賭けている平和 ボーツに青春賭けている平和 歌を軽い財布に救われる 双曳野市 吉 川 寿 美 八つ口不況の風が吹きぬける し蓋老いに逆らうべくもない を回して国を論じ柳を論じて を回して国を論じ柳を論じて が切って親より先に逝くでない</td> <td>り橋でなりふり構うのはおとこ お</td> <td>り橋でなりふり構うのはおとこ みの虫はり橋でなりふり構うのはおとこ 羽曳野市 榎 本 吐 来 フラッペと声をかけて横切る若い猫 羽曳野市 榎 本 吐 来 一万語増席の美人気になるまだ男 おしゃにううて男を上げている 羽曳野市 吉 川 寿 美 立ち止ま 水一ツに青春賭けている平和 おり上げている アウロ不況の風が吹きぬける フラッペを回して国を論じ柳を論じて おり切って親より先に逝くでない ほそ道や ほそ道や ほそ道や ないし</td> <td>に流せる大人にはまだなれず アブラ虫に流せる大人にはまだなれず キリギリ を</td> <td>藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫に流せる大人にはまだなれず</td> <td>京気をぼやきながらも空の旅 京大人にはまだなれず 京が出恋した時のまま残る り橋でなりふり構うのはおとこ り橋でなりふり構うのはおとこ り橋でなりふり構うのはおとこ おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 一万語増 おの美人気になるまだ男 おりたに近らうべくもない おり切って親より先に逝くでない はそ道や でない はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はるさい はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はきないと声をかけて横切る若い猫 おりまが出 はきが出 はそ道や はそ道や はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまがよこ おりまが出 はるさい はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまがよりにはまだなれず おりまが出 はきが出 はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はきが出 はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はを述が出 はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はをが出</td> <td>及をぼやきながらも空の旅 不器用の 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子</td> <td>左利きの を証やきながらも空の旅</td> <td>大利きのと言って完敗慰める を誉め を引きいに造らうべくもない でして国を論じ柳を論じて 羽曳野市 吉 川 寿 美 でして、</td> <td>以来好きなカレーも食べてない 以来好きなカレーも食べてない 以来好きなカレーも食べてない と言って完敗慰める と言って完敗慰める を持ちれた釘に気が付かず 素井寺市 鴨 谷 瑠美子 を利きのたいと言って完敗慰める 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫流せる大人にはまだなれず 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫流せる大人にはまだなれず カルーブルをこと言うて男を上げている アブラ虫を軽い財布に救われる おこと言うて男を上げている アブラ虫です人気になるまだ男 フランペースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ カーケ語増 立ち止まを軽い財布に救われる アカッペもない おも論が出る おいに逆らうべくもない おもか出る おきに変して ない まる はんでない おも</td>	り切って親より先に逝くでない り切って親より先に逝くでない り切って親より先に逝くでない の受して国を論じ柳を論じて の切って親より先に逝くでない ほここと言うて男を上げている の当れる の当れる の当れる の当れる の当れる の一次の風が吹きぬける に遊らうべくもない を回して国を論じ柳を論じて の回して国を論じ柳を論じて の切って親より先に逝くでない に述らうべくもない に逆らうべくもない た回して国を論じ柳を論じて に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない に逆らうべくもない た回して国を論じ柳を論じて に逆らかない。 に逆とがない。 に	羽曳野市 榎 本 吐 来 一きなこと言うて男を上げている アイン アラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ ストラとベースカットが睨めっこ カウロ不況の風が吹きぬける し蓋老いに逆らうべくもない と	おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 おの美人気になるまだ男 ポーツに青春賭けている平和ポーツに青春賭けている平和	おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 一きなこと言うて男を上げている ポーツに青春賭けている平和 ボーツに青春賭けている平和 歌を軽い財布に救われる 双曳野市 吉 川 寿 美 八つ口不況の風が吹きぬける し蓋老いに逆らうべくもない を回して国を論じ柳を論じて を回して国を論じ柳を論じて が切って親より先に逝くでない	り橋でなりふり構うのはおとこ お	り橋でなりふり構うのはおとこ みの虫はり橋でなりふり構うのはおとこ 羽曳野市 榎 本 吐 来 フラッペと声をかけて横切る若い猫 羽曳野市 榎 本 吐 来 一万語増席の美人気になるまだ男 おしゃにううて男を上げている 羽曳野市 吉 川 寿 美 立ち止ま 水一ツに青春賭けている平和 おり上げている アウロ不況の風が吹きぬける フラッペを回して国を論じ柳を論じて おり切って親より先に逝くでない ほそ道や ほそ道や ほそ道や ないし	に流せる大人にはまだなれず アブラ虫に流せる大人にはまだなれず キリギリ を	藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫に流せる大人にはまだなれず	京気をぼやきながらも空の旅 京大人にはまだなれず 京が出恋した時のまま残る り橋でなりふり構うのはおとこ り橋でなりふり構うのはおとこ り橋でなりふり構うのはおとこ おの涼しさ秋が来るだけで 羽曳野市 榎 本 吐 来 一万語増 おの美人気になるまだ男 おりたに近らうべくもない おり切って親より先に逝くでない はそ道や でない はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はるさい はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はきないと声をかけて横切る若い猫 おりまが出 はきが出 はそ道や はそ道や はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまがよこ おりまが出 はるさい はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまがよりにはまだなれず おりまが出 はきが出 はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はきが出 はそ道や に流せる大人にはまだなれず おりまが出 はを述が出 はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はそ道や はをが出	及をぼやきながらも空の旅 不器用の 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子	左利きの を証やきながらも空の旅	大利きのと言って完敗慰める を誉め を引きいに造らうべくもない でして国を論じ柳を論じて 羽曳野市 吉 川 寿 美 でして、	以来好きなカレーも食べてない 以来好きなカレーも食べてない 以来好きなカレーも食べてない と言って完敗慰める と言って完敗慰める を持ちれた釘に気が付かず 素井寺市 鴨 谷 瑠美子 を利きのたいと言って完敗慰める 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫流せる大人にはまだなれず 藤井寺市 鴨 谷 瑠美子 アブラ虫流せる大人にはまだなれず カルーブルをこと言うて男を上げている アブラ虫を軽い財布に救われる おこと言うて男を上げている アブラ虫です人気になるまだ男 フランペースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ トラとベースカットが睨めっこ カーケ語増 立ち止まを軽い財布に救われる アカッペもない おも論が出る おいに逆らうべくもない おもか出る おきに変して ない まる はんでない おも

することがないから本を読んでいる	太郎にも芽が出た研究助成金	双刃の剣 効く薬には副作用	自分史を書いても誰が読むかしら	自己紹介 元軍曹と付け加え	豊中市田	告白を聞かされる身のあほらしさ	ふられたり捨てられたりで幸せで	駅までの道でどんどん追い越され	安らぎの秋のコーヒー ノンシュガー	アキアカネすうっと通った視野のすみ	安	地鎮祭バブル弾けてそのまんま	ご多分に漏れず会社は左前	熱帯夜 行のようです盆おどり	世の移りお産も二人三脚だ	ミサイルが飛んで来ましたでは済まぬ	安	友だちと老眼鏡を買いに行く	反省をすると長生きは出来ぬ	念の為ひとりかどうか聞いておく	体重と歳は私事である	誠実な人誠実に歳をとり	東大阪市 谷
					中						藤						永						口
					正坊						寿美子						春						義
隣国がミサイル発射を知らぬ国	診察券いろいろ持って目ざす喜寿	待ちきれず庭に打水すぐ雷雨	私が掃いたから妻がまた掃く	ミスター タイガースが処暑に逝く	豊中市 滝 北 博 史	広辞苑「まったり」加え乙な味(改訂5版)	憎まれ口叩いて憂さを晴らす仲	輪数珠持ち物見遊山の社寺詣で	日焼け顔口引き締める始業式	蟬しぐれ子供の網に黙秘権	豊中市 湯 浅 馬 洗	人も虫もすべて空なり無に還る	一人住む母への土産重からず	ガーデニング片仮名の花競い咲く	喉いやす氷もなかった終戦日	フラッペよりホットコーヒー欲しい齢	豊中市 井 上 直 次	月見草 月のない夜は何を見る	ふと裏をかえせばつまらない仕掛け	残る世をせめてお洒落なイヤリング	ころがればころがったまま生きるだけ	し残した事の多さよ虫すだく	豊中市 吉 田 あずき

どこよりもうまくて安い 妻 0 味 箕 面 市 椎 江 清 芳 稲光こころ変りを責めたとて 公園で気の合う喜寿と満三つ 吹田 市 Ш 本

ほめている言葉がわかる犬の 耳

意地張らずお飲みなさいと酌に くる

本当の勇気いるのは斬られ役 雑兵であっても父は父である

10 やり忘れてません か親 も子も

思

面 市 出 セ ツ子

> 微熱つづく未練を少し溜め過ぎた 気負いなどなく裏方に徹すべ 割り勘のす早い男友に持つ

吹田

市

古

111

L

箕

悔 母という女に泣ける場 いの数だけ夕焼けが燃えてい 所が無 Vi る

真実を映す鏡を磨いてる

退転決意静 かに陽が炎える 吹

不

栗 谷 春

田

市

子

日となりて 0 空

神やさし人は恐ろし雲の 色 結納は残暑きびしい

今

朝の空ことし

番秋

恐れるな涙も悪くないもの j

気に入らぬ世間も捨てたものでない

愛愛と口 にした日も遙かなり

秋 姑 一心に仏具を磨く親孝行 来る空水風を肌 の方が別 居を望む世 が知 る 15

不

況

風

飲み放題の

店 が増

之

市 瀬 戸 まさよ

吹

田

叱っても褒めても涼しい顔 解く時を想って緩く 大西日藁屋のここも核家族 つまらない夢をみており油 結んどく 照 してる ŋ

お幸せねなどと他人は言うてくれ

吹

H

市

石

原

筋書きを一人芝居でぶちこわす 毒入りのジュー 0 身にふさわしい辞書を繰る スへ孫が案じられ

松茸は経済学の外で売れ の身をソロバンまでが 馬 鹿

にする

吹田

市

茂

見

よ志子

幾年を経てもやっぱりそば枕 伊勢外宮 見付けたフランス料理 店

志摩の 友からの便り小さな秋も描き あほらしい張り合うほどの事もない 海晩夏の 夜湯に溶ける

36

E

靖

列島の黄金の波を喜ぼうシニアの夢か現か百名山シニアの夢か現か百名山野間がホームページで照れている	まだけが光って見える片思い 君だけが光って見える片思い まに関し切った祖父 で自慢の順は盆梅孫に嫁 で自慢の順は盆梅孫に嫁	カットでもしなけりゃ魔女になりそうな犯濫する流れのような怒りかた にきた蠅まで払う性かなし ないエットは同じ鳥と仏法僧	客のないケーブル同士行き違う 大鳥居いくさ上手な人祀る 表彰に口の渇きがとまらない 手花火をして夏休み終わるなり 老人が可愛くなって昼寝する
	森	正	君 ま さ お
	生	雄	子お
朝めしが終り昼までなにしよう 割勘と決まり先輩ほっとする 割勘と決まり先輩ほっとする	依怙地かも我盗泉の水飲まず、依怙地かも我盗泉の水飲まず、まがつけば友の多くは黄泉の国気がつけば友の多くは黄泉の国気がつけば友の多くは黄泉の水飲まず、	音飾り無縁な亡母と同じ年五年後の再会何気なく約し五年後の再会何気なく約し五年後の再会何気なく約し	茨木市 といでコーヒーカップ選んでる たこ焼のパーティ今日は日曜日 さり気なくフランス製の横かぶり 大留守ビデオの編集しています 弱き者汝は女とは言わず で、た市
	Ist.	III	島 堀
	傍	Щ	四 知

諷云児

克

治

良

江

ふみ

かき氷手にしてまわる内子町大渦を観入っているまに阿波鳴戸大渦を観入っているまに阿波鳴戸	八月は喪の月 白い夾竹桃 八月は喪の月 白い夾竹桃 大月は喪の月 白い夾竹桃	ベクソカズラの清そな花をご存じか イクソカズラの清そな花をご存じか 本はを涼しい陰でお見送り 出棺を涼しい陰でお見送り	を 大方市 前 た も つ 大の乱れ怖い時代が来るようで 世の乱れ怖い時代が来るようで 世の乱れ怖い時代が来るようで	高槻市 井 上 照 子
大臣の鞄の中を覗きたい 人生の節目節目にある出合い 虫達に申し訳なく草を引く 早々にお暇をする下戸の家	身の程をほとほと託つ栗のいが 向日葵がまわらぬうちに万歩計 三世代富士山を見るひかり号 三世代富士山を見るひかり号	表別の 表別の 表別の 表別の 表別の 表別の 表別の 表別の	寝屋川市 平 松 かすみ若いっていいなあ鰻食べるとき義兄になる人を辛口批評する。 そ・リアより寿退社願う母	寝屋川市 岸 野 あやめ

息切れの部下を労るコップ酒重くとも息切れしない父の貨車重くとも息切れしない父の貨車を仏に縋り老いて行く	のびう戸食	長生きの家計 長男苦労する 要屋川市 堀ターザンの野性美今はダサイとか ターザンの野性美今はダサイとか 医師目指せ孫に転嫁の亡父の遺志 医師目指せ孫に転嫁の亡父の遺志	は は は は は は は は は は は は は は
	岡	江 井	H
	97 ST		٤
	波留吉	光	と し 子
かすがいが効かず家裁もサジを投げジョークともとれる誘いに少し揺れ髪満ちた日の日記帳長くなる	大阪府で病みつきになるモーニング通院で病みつきになるモーニング通院で病みつきになるモーニング東の間のヒロインでいる貸衣裳東ののる頃に男の匂い立つ	を を を を を を を を を を を を を を	人待てば尾を振る小犬寄って来るリーダーになってもメダカの子は目高群がって鯉になる夢持つメダカ群がって鯉になる夢持つメダカ
	八	籾 妻	坂
	十 田	山谷	上
	田洞	山 谷 隆 重	上高

乾盃する背中はみんな隙だらけ、とじ引きでペア組んだのが縁となり、自一文字に結んだ口が頼もしい	道雲亡父の叱咤が聞こえそ和	たった今出たバス停の一時間遊ぶこと知らない姑とする同居佐ぶこと知らない姑とする同居	泳がせておこう煮つまるカレー鍋 和歌山市 福	砂時計君の命は人まかせがき虫の子に泣き虫の父がいるがき虫の子に泣き虫の父がいる	位しても独になれぬ九州しても独になれぬ九州の子一人前に鎌を振林めの言葉並べる他人院の裏の事実を知るカールではまのありません。	· •
	端		本		尾	澤
	三		英		緑	俶
	男		子		良	子
もしや恋君の動きが気にかかる魚臭の町男からっと茶色系焼香へ進む肩押す風は秋	生へ過去を白紙にしてお		ソロバンを弾くと羽目をはずせない 和歌山市 堀 畑 靖	紀の川の水を汚して生きのびるタンタンタン タンタンタン建盤蒼き月昇るマリンバと笛とわたしも秋の虫	要知恵をしまい込んで	

香

秀

子

子

傷口をじわじわ開く人の口	漬物の石なり笑うのが苦手	恥ずかしいものの一つに冷蔵庫	甘えたら低温火傷してしまう	どの面をつけて出ようか月曜日	和歌山市 川 -	招待へ迷い迷ったのし袋	五割引やっと私の手に入る	克明な消印で来る督促状	カレー事件未決のままに空の青	ちちろ啼く二百十日と言う忌日	和歌山市 細 !!	雑木林の秋は絶対カーニバル	放置自転車 失業率が心配だ	煎餅の堅さ老舗の意地通す	大阪弁きつねうどんが欲しくなる	怪鳥の巣かもしれない京都駅	和歌山市 古久保	身のほとり飾る花なら青がいい	本を読む速度の落ちて虫しぐれ	豆腐ほどの存在感もないおとこ	消し忘れた記憶と川を遡る	くるり身をたたみ木槿の死に支度	和歌山市 木 本
					上富						川稚						和和						朱
					湖						代						子						夏
セメントで自然の顔が塗られ	海からも山からも来て冷蔵	たくあんを嚙む音のする暇な店	病み付きは古いのれんの狸	苦しいがやっぱり坂は登ら		聞き流すことにも慣れて紫蘇をも	ソプラノになんにもひるむことは	びしょ濡れの影を干したい	私の宇宙の底にまだ地雷	謀反かも集団で降る流れ星		奥様を納得させた みのもんた	七味唐辛子の中に万人向きの	肩書きのとれた淋しい昼の	そうですかアレルギーねと	マイナスとプラスが寄ってからドラマ		袖の下無縁のままで職を退く	表向き副でほんとは実力者	相槌を打ったばかりに呼んだ	中道へ両翼からの誘い水	奇形魚にヒトの未来を諭され	70
れゆく	庫	な店	蕎麦	ねば	和歌山市 池	蘇をもむ	ことはない	里の庭			和歌山市 山	んた	の味	酒	ねととぼけとく	からドラマ	和歌山市 宮			だ乱		される	和歌山市 青
れゆく	庫	な店	喬麦	ねば	歌山市	蘇をもむ	な	0			歌山市	んた	の味	酒	とぼけとく	からドラマ	歌山市	X.		乱		れる	歌山市
れゆく	庫	な店	喬麦	ねば	歌山市 池	蘇をもむ	な	0			歌山市 山	んた	の味	酒	とぼけとく	からドラマ	歌山市 宮	X .		乱		れる	歌山市 青

子	露天風呂螢の乱舞よろこばせくの世のはかなさしのびあおぐ星がえをすい込む如く山の色とがえをすい込むがいのものがあおぐ星に名前出ない人	天国に酒があるのか気にかかる 奈良市 天 正 千元気かと今日もテレビに尋ねられ れ橋一人で渡るほかはない	お月さんにスピード違反の許可もらうで、一ブルの散歩のようにルーペ持ちで、カラスケースの中で剝製が睨むで、またになりです。 と 保護の香を鎮静剤に白昼夢	和歌山市 楠 見 章 子 何気なく入った道にも有る序列 をうしても高い所へ土を積む とうしても高い所へ土を積む とうしても高い所へ土を積む ロ気なく入った道にも有る序列 ロ 三千子
路で相聞歌ふと風に聞く (万葉歴史あるき) の友も祇園の灯も温い (同窓会) の友も祇園の灯も温い (同窓会) の友も祇園の灯も温い (同窓会) の友も祇園の灯も温い (同窓会) の大も祇園の灯も温い (同窓会) の大り洋皿並ぶ里の膳 生駒市 ながらもりもり食べる 女なり とり自分を更に磨きかけり自分を更にをある。 出し、 は 出し は は は は は は は は は は は は は は は は は		梢	州	子 学
豊 悟 ア 恭 平 I 次 郎 ト 昌	て米買うテンポ狂いだしたかせて笑いの洩れる家咲かせて笑いの洩れる家咲かせて笑いの洩れる家	大和高田市 岸の頭脳がのたうって 大和高田市 岸の頭脳がのたうって	がらもりもり食べる 女なりつその新聞を待っているしのララバイ深夜ラジオきくしのララバイ深夜ラジオきく	野体思いは巡る七〇年 解体思いは巡る七〇年 が注皿並ぶ里の膳 生駒市 麻奈良市 米
豊 情 ア 恭 平 次 郎 ト 昌				
次 郎 昌		豊 平	1告	オー
		E)		E. Santa

哲学の道歩いて来たネックレス	花の名をわすれたことがないわたし	逢いに行く道に彼岸の花があり	こめかみに秋深くなる笛を吹く	乱れ咲く小さな花にある情話	京都市 山	考えごと不意に信号変ってる	特別に話もないが茶の誘い	浄土にいってからでも税金とられそう	無理はせぬ僕には僕の目の高さ	山奥に住んでみたいな十日ほど	京都市都	銀河系惑星内の口喧嘩	遮眼帯かけて父看る母看取り	ありがとうございましたは皮肉声	大衆の声援一人が走ってる	機械音ばかりで育つビル小窓	奈良県 中	タイガース球史を飾る人の逝く	言い訳に耳貸す度量の歳になり	もみじ揚げ箕面の秋をご相伴	秋深し黒部の旅に粉雪舞う	上燗に焼き松茸で差し向い	大和郡山市 坊
					海						倉						原						農
					友						求						比						柳
					熙						芽						比呂志						弘
ほろ苦い思い出がある落葉踏む	雨露を凌ぐ小さな屋根があり	衣装分けしつけの糸が付いたまま	ひとすじの煙に過去を昇華され	仏縁の巡り合わせた過去の人	富山市島ひかる	人生がもう一つある借家主義	アメリカをらしくして来た黒い肌	自販機に今日も及ばぬ朝を履く	父の背に稼ぎ疲れたバーコード	老いてまだ今日をもしもに賭けている	富山市 酒 井 輝	べっぴんで何か足りない曲線美	ご苦労をかけました母の背がまるい	露草に想い出があるトタン屋根	音痴もばあさんもハッピーバースデー	鰻屋の品書きうなぎにょろにょろと	京都府 稲 葉 冬 葉	戸を一枚いちまい閉めて秋の暮れ	花道を落ちゆく恋のねたましや	燃え尽きて緑をまとう曼珠沙華	摘んでも摘んでもブルーベリーの森	晴れ微風 空を彩る気球ショー	京都市 大 河 未佐子

い性草た優	増	田	紗	弓	田	獏	沓
てしまうDN	Ξ	宅	ろ	亭	田	満	
大勢の前でもらした子の特技ある日ふと父が訪ねてきた下宿一つだけ忘れてならぬ恩がある							
気楽でよ こんなことばで見舞う仲恩をふりまいていた頃のうつろ							
の日本のようよニュース引	板	Щ	まる	子	水	潮	
出来ばえも人も素朴な野菜売り戦前の日本のようなニュース聞く							
新築の店はまたまたレストランどこまでが本音かためす大ジョッキ引き潮の足許を見るしっかりと							
故郷の風を届ける幼友の声富士宮市	渥	美	弧	秀	藤	早	
み仏に召された姉を偲ぶ夜夜さよならも言えず病姉は昇天す							
子等巣立ち友旻夫帚のティータイム息抜きのつもりの酒がほろ苦い							
子等巣立ち夜長夫婦のティータイム							
美山 宅 田 弧 ま _み ろ 紗		弧まみ亭弓	秀 子 亭 弓			藤水田田田	

E	東東へもう親友でいられない神様じゃないから人を許せない神様じゃないから人を許せない はいから人を許せない はいからがら飛んでゆき	八王子市 播 本 充 子 所を飲むにも冷熱の器具とおす ではれて対話よどみなし がいコンへ呼ばれて対話よどみなし からもあまたの締切日 でいるの熱戦をどう言う英字紙をもとめ	町田市 竹 内 紫 錆 窓口が茶髪じゃ用事頼めない 窓口が茶髪じゃ用事頼めない 意子を探してる でいる できる はい から でいる できる から でいる できる から でいる でいる でいる から でいる でいる から でいる から でいる から でいる から でいる かい	横浜市 菊 地 政 勝
\$ 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	ででは使いたくない力瘤 黒髪と黒い瞳を持つ天使 黒髪と黒い瞳を持つ天使 がすり傷でしたと言えるさわやかさ	型がある。 ・ はいでは、 ・ はいでは、 はいではいはいは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・ はいでは、 ・	天国は退屈娑婆に戻りたい と	仙台市 川 村 映 輝

女 秋 旅 妻 負 忍 月 大 真 II 選ばれて嬉しさ募る渺 同 貫 卷 非常食袋の 幸せは金の 光 0 is 2 禄を拝ん 儘 風 E かい 0 15 坂失うものが多過ぎる 実をちらり 人に鞭を与える四 頭 をいつも ひぎ 元に青く焦 なるも は叶 寄る老 言 出 持 1 0 か見たような気がする とした編集後記 「塔の看 押され つ紐 花 3 ガ 鉢 存 疑 えてく で 力 i 在 心 中で期限 の長さは愛ならん 横抱きにして生きて 13 0 板摇 も少し には触 感が増 覗 かれる石 從 て登る杉 暗 61 Vi かす今 ます n 0 鬼は捨て去ろう えて猫歩 ば ぎ無 2 して秋 白 切 借 れず日 句 流 vi 洒 れ星 水をや Ŕ 落 選集 n 湖 木立(羽黒山参拝 選 n to to 抄 0 向 ta 顔 出 n む 3 ぼ 51. 弘 弘 弘 12 0 前 前 前 前 る 花 市 市 市 市 佐 中 11 高 治 枝 橋 Ш ふさゑ T 岳 雅 加 子 水 城 下馬評 汗乾く せっ 生命溢 話 餌 渓 阿 礼 計 雪を待つ野菜をなぶる痛 秋 津 欲生の化身のように蓮華咲 財産も借 遺恨に埋もれた純 14: 生 す 取 報 のうた豊作高値夢と 面 流 拝 後の審判」を描くに描 手に を飛ぶ蜉 路 か のこころ 0 堂 たびぐうんと大きくなる岩魚 H i) 0) 呼吸 、風を稲 ちを内 中 光 n で 感動越えて言葉なし、システィナ礼拝堂 に名作訪 0 0 Ŀ 弾 天井落ちん肉体美 振舞う去就定まらず 煽るとリスクつきまと 財もない との 手 17 のみさばき筆捌き 蝣に跳 る春 助 0 穂と待 13 魚が ね増す 鏡 イワナ雪に なだめてきた平 を行 痩せ 岩 潔 ぶ岩魚 いるら の美しさ 木 0 案山 慕情 書 我 < Ш く 三 < 慢 Us 跳 < 子 九 ta Vi 弘前 弘 弘前 弘. 和 11 前 前 A 市 市 市 市 櫻 相 福 1: 庭 馬 本 慕 花 順 銀 匠 情 波 風

乳ガンをよその夫に教えられ	直筆の絵ハガキ永久保存する	水だけでめろめろになる名演技	女性には手を焼いている濁り酒	過去形を水に流して乾杯す	黒石市 相 馬 一	帯封の札は悪魔の爪の色	夏の帯蟬の抜け殼遠花火	昼夜帯ははのなみだが乾かない	四季の帯揃えて母のものがたり	帯祝いほのぼのつぼみ香が匂う	弘前市 一 戸 ツ	結ぶのはおんな おとこはそれを解く	あしたからあしたから酒は断つつもり	災害があって覚える川もある	いわし雲今日の一日ありがとう	あけぬ梅雨せめて阪神勝ってくれ	弘前市 浅 田 隆	梅雨明けず残暑厳しという気候	自家野菜訪問売りの乳母車	親ばなれあわだち草のたくましさ	密入国鼻緒の草履つっかけて	沖縄の海の色した茶器の底	弘前市 今 愁	
					花						ネ						樹						女	
袈裟ころも和尚もジャズを聞いている	呼び止めてくれと背中に書いてある	尻尾出すまでは黙って見ていよう	人柄のよさは見せかけだけでした	お出迎え敵にも味方にも見える	砂川市	誤字脱字一字が解き手眠らせず	D51の力はないが津軽発	歴史から消してはならぬ 津軽 歌	みちのくの奥に柳史がまだ眠り	蔵書三百 先人達の夢の跡	青森県	貧乏くじばかり引いてるお人好し	私にも女の幸がきっとくる	生前に贈って欲しい栄誉賞	梅雨あけぬままナナカマド赤くなる	人々の笑顔が集う裏長屋	十和田市	授業中祭り囃子を聴く机	乗り違い発車のベルは鳴り終り	ご焼香待ってる庭は送り雨	マンガ本立読みしてる喪服着て	柩の前記念写真と阿弥陀仏	十和田市	
					大橋						諏訪						阿部						小笠原	
					政						柳												敏	
					良						々						進						人	

若者の余熱か雪も積らない逃げ道を探すと迷路ばかりなり頷いて相槌打つも骨が折れ	現の靴と小犬遊んでたわいなし 児の靴と小犬遊んでたわいなし が尾広げて鳩はびっくりし	实 。	で で 大終え を がますます深くなる で で が を が は が の 化 石が顔をだす で で の に は あ の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に が の に に の に に る に の に の に の に の に の に に に に に に に の に に に に に に に に に に に に に	番川県 墓掃除無縁仏の草も抜く がり気のない付き合いで長続き がり気のない付き合いで長続き を迫う
	杉	板	石	山 工
	本	垣	原	地藤
	孝	夢	淑	マッ
	男	酔 -	子	ア 笑
故郷のせせらぎの音今いずこ朝顔が種を残して秋になる朝顔が種を残して秋になる	若きらと飲むコーヒーに明日がある おき人にめぐり逢えたり秋の風 よき人にめぐり逢えたり秋の風	取汰翁	高取県 では埋れ花に劣らぬデスマスク では埋れ花に劣らぬデスマスク では、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、	新米で炊く芋粥も姑ゆずり 青報を信じた胸が騒がしい 古報を信じた胸が騒がしい も知れぬ宝さがしをした土蔵
	石	2	乾	林木
	尾	さえき	士	村
	かつ	Ch-	喜 与	露 富美 杖

東だと妻もたしなむ吟醸酒 本がけ鳴いて終った蟬を掃く 命がけ鳴いて終った蟬を掃く かっそりと氷雨降る夜の孤独の死 がみ放題食い放題にほだされる がみ放題食い放題にほだされる 変だと妻もたしなむ吟醸酒	え火をたき見上げれば行錯誤時間ばかりが過行錯誤時間ばかりが過行が過いるよしてる私も普通	消夢学話 ぎて水巧さ少んに 父ガにく
XIJ	菊	池 太 村
田	池	田 田 上
泰	F	善幸 信
司	トミヱ	守 枝 子
しきたりを守れば若い高い声 地球儀を回せば何もかも小さい どこまでも主にぴったり影法師 バスツアー命あずけて楽しんで 立山の緑に酔いて若返る 山々に抱かれ弁当なおうまし 初体験孫の花束誕生日	町内になくてはならぬ汚れ役 紅葉の森で落ち葉の私語を聞く ちったもんだ亀が甲羅を干している 相生市	平凡をためらわず生き幸せよ 戦死した亡夫とのテーブ切れてない 頼る息子は遙か遠い異国に住む 引き際の美学も失せて恥多し 四十年指輪無くても仲は良い なすのも生かされるのもタイミング 俄雨濡れて飛込む屋台酒 川西市
松	中	松 黒 小
尾	塚	本 台 熊
柳 右 子	礎	た 伊 江 だ 佐 し 武 美
A-1		だ佐

間 K 大阪 市 町 H 達 子 芸術 0 ファ .7 3 ン喪 0 帰 りでは あり

遠慮げにビル 鶴と急ぐ今年も平和 の谷 祭東 典山

少しリッチに対鶴と急ぐ今日 日は 孫 がにと 秋 良 だき頃 のスケジュール 偲ん でいる ホ 1 ル (ハリウッド黄金時

大阪市 水 利 武

のほうが優 勝

行 が 溜 息 0 42 てい いる景気

タイ

ガー

・スニ

軍

秋何銀 、深し高野の山へ友の霊 食うても身につきそうな秋 0 味

0 余 白 に似 合う夢 \$

阪

市

中

節

7

あ

なたも年とる

のよ母

大往

生

和

H

市

17 10

子

人

4

見分けつかぬ兄弟の声からだ付きひと切れの松茸千円至福かも人生々名ELL

大阪 市 福 出 雅

楓

きとし 生 けるもの

赤

10

薇

生

巡り 暑さ台 逢い古き校舎の合歓の花 風様という感じ

この

涼 風 夏 のひざかりふと恋し

クスリとは 物 聖なるものよなぜ 効 亦 思議 いじる 大阪

市

出

本

久

峰

よりも

1

は 偽 薬本 なぐすり効い ようもないプライド たか小 一步 吏おとなし 踏 2 出 ++

De

敬老と言わ n る日 つ々に鞭を打つ

0

秋

は

W

とりを目

覚

め

さす

何 あなたまか せ は 許されぬ

親 父より退 職金をかわ Vi が ŋ

岸

和

田

市

井

赴 九 任先土日に妻 + 度頭を下げる恐い人 の偵察機

頭 さん絶景に来て 波に 乗る 岸

定を愛し 自演 も幕は お n

エ年坪ル齢庭 不詳軽 1 <u>-</u>= やかな業師 東北 0 稲 は 凶 作に

心 な 10 言 集に 沈 む 紙の 舟 岸

和

市

加

藤

基

ゆっくりと点字聖書を進む指 ふるさとの 母は錦をほ L しがらず

ヨナラを言 いたくなくてシーアゲイン 八尾市 長谷

Ш

春

蘭

咲きず 疲れ たか朝顔 の小ささよ

夏草 秋風や写真の顔のまかなかなも聞きとり 一へ口笛軽く のまた老いて 大放 < 12 耳となり

市

ません

寿

-50 -

の愛たっぷり吸ったも無いやさしさも無いやさしさも無いやさしさも無	ठ म त	と時を温もり合える友がいる 携帯がお供で昼食味気ない がと時を温もり合える友がいる ひと時を温もり合える友がいる		藤井寺市 福 元 古希の友ピンクのスーツよく似合う 安曇野のわさびクリーム食べてみる 受診待つひととき知らぬ児をあやす 気がつけば鈴虫の声とぎれがち	八尾市 生 嶋
久留美	EJ,	明	喜	みの	ますみ
美	ť	七	西华	のる	み
ラックスしたらいい句が生年はひまわりの花大当り幅の絵は吊り鐘と茜雲	宝くじ買わぬ夢なき老いとなる母無力共に泣いてる思いやり掬っても掬っても滋味ある老人外っても強味ある老人	田出	気もそぞろ帰宅を妻にうとまれる 追伸に心ゆさぶる一行詩 夏痩せか妻のボールに切れがない	たい僧ハミングしつつ落葉掃く はさんちょいと箱出てまた入る はさんちょいと箱出てまた入る はさんちょいと箱出てまた入る	豊中市
Щ	五	闭	栗	藤	田
JIJ	4	4	田	井	辺
日 出 子	艺 大 良	吉 大 『『			正三郎

をひとまず 通 ŋ , すぎ 方市 宮 Ш 久 言 て コッコ(クック) 履 かせと孫 歌 Ш

スト ラの 波

息子寝息若き自分をみ n 来た息子 0 里 てしま 帰

妻 の愚痴じっ くり 聞いてる長い風

爆 忌 蛇 П U ta n ば水が出 る 寝屋 Ш 市

後

黎之助

原

31 出 L のす ~ ŋ 段 R 悪くなり

算朝 顏 術 E 芙蓉も炎暑に負けてな で解けぬ世紀末 10

0

頭

屋 III 市 冨 Ш ル イ子

なまり耳 # 0 裏 に思 に思わず振り b 2 落 L 六 返る

玉 幸

りだけ 白 0 元気で生かされ 世界島 で土 V て感謝 じり

昨独

H

今

寝屋 111 市 籠 島 恵

子

忘れ

シリ

ウス

七十

さん日課

売 子 n かい 切れ 帰 る少しホ てましたとトウフ買い 1 ホ イし てしまう 忘

天 高 ï 休耕田のそばの ねなんて話 のそば 花 畑

L は 歌 山

玉

置

当

代

Va

V

た命

だ粗

末に

は

でき

X

魚だとて ただ

夢に見

ている滝

のぼ

n

ひらを開

けば星が 力

降ってくる

過ぎて気

が錆

びてくる

B 0 ぱりネ 夏を惜 甘 んで 10 Ľ 咲 1 ちゃ 10 た遠 h 花 ぶり 発 市

行 < 追 声 空鉄砲に かい 届 < 娘 吸のご懐妊 に起こされ

> 秋 歳 です ね鏡よ君はしつこい 7 言

う

中

2

ta

が怖 様 に流 61 L 何を食べても旨過ぎる 目しとく 願 10

0 < りとひとりを生 きる 深 呼 吸

和

歌

市

木

村

初

子

WD

味 浮雲に似 はい まいちでもばあちゃ た人生の今を生き んの ハンバ 1

討 to は 承 知 自説は曲 げ 6 ń 弘、 2 前 市

菗

苗

果

林

昼寝 健 康 甲 もとまどう梅 斐 夜の眠 りの幾 雨 0 明け 層 倍 X 秋

寝返りで病み きな絵と向き合うあぐらかたりべ たなづけるすべを 知 n か

八戸市 島 \mathbf{H}

治

に乗せると言った女が逝き (シリウスー東京行 南部高速バス) 昭

の片想い死んだ女にまでないと泣いた友だんだん来なくなり にテー かけ偲んでい 青森県 ます

吾

谷 大

平 倖 苛 均 せ 立 「寿命」、 でせは感動感激鋭くで でせは感動感激鋭くで ない。 では感動感激鋭くで 追秋 均せ 伸便 寿 命 六年越えた旅 元 気 取 ŋ 途 中

恒

松

甘辛年充

い口金電

出

3

か

B

鳅

振

る

好 余 ま

3 生 だ

かと

と壜の口を関すに遊ばせる

手 来

る を

権

没落!

居

眠りをして

ば

か

n 3

辻

白

渓

子

杖

で字が書

け

3

地

道

3

杖を突きな

が

顔 から が かい

すると峰

打

ち食

to

されけ

とんぼとの対話は 杖で指す六甲山の

0

夕

杖を置きゆ

0

くり

祈る地蔵さま

邪

魔

なる杖をとうとう持

叮

村

太 茂 津

野

紅

車座の話題 車骨口 董 笛 t 0 中指 か 18 あ 6 が " 骨董 ŋ 老

12

を

寄

6 す

11 82 3

もう

屋

が

返

つ事 鳴

界 的 醜聞 でさす がクリ 臍 < n がやめけ >

F

世

たされ 黒

紫

JII

た曼 の柔らか 珠 沙 華 波 多

人信じ合うて平和市場籠女の長い

和愚

な離れ

島

日緑寂

はこべ

に泣

63

いたことがある

ささを

語

ŋ

0

くし

は なす

西

12

祭

がばや

は

恋人

かい

居

るとは思えな

61

顔

這うてでも出席すると返

事 素

書

か焦

たばみのい

種の話

をし

た握

手:

の家系を遡る

口

でも何処か頼りになる男

野 Ŧi. 楽 庵 らず 月 原 宵

明

-53 -

よく 留守 碧耳 聖対故 不補 聴覚視覚 若 1] 食 飲 食 広 九 F. 秋 み代 です 況も器 糧 欲 十の恩師 + 水底書決郷 11 + 気で居 0 番 0 1 かい のに 読 は 0 遊ぶ猫が今夜も や 支援 を稼 より 音は 避 好 0 クル の退 ち なこお 返 む 味覚 b 暫 編生きて来たい を聞 17 事 況 方にも耳 0 IÍI. 迎 < た to ても歩けば老 L 打 屈 4. 2 L 酒 0 かい しなさい 程 出 える同窓会 ろぎちちろ鳴き出 温 も削る老 ち L かい すると神 10 要るもの 秋の雲秋の 切る攻 の滴 私 度 7 重 10 穏 垢 V 0 3 とい 11 茶で 職 戻ら 金曜 健 かい 物 た へめもあ だけ 溜 12 う 10 秋 0 派詩 は 心いを知っ 0 まる 振油声 な どんどん買いなさい 0 H 0 風 < ち は 敵 0 風 13 要る 1. 3 た 小 小 宮 金 林 井 口 西 由 文 雄 笛 多 香 秋 生 17 やこがの 一新 柿 許 梵 1) 1 賞 さよならの 枚 秋 鐘 位 だ 味 送 た す 1] チ 11 期限 ことば ねこだ n b 秋 攻 n 0 7 に て来る冬に コ 辞令で単 を肩 防 今年も 話 済 幕 は プ 1) 0 0 b 遺品ぬ 遺 故 0 4 ように友情まだつづく すぎた人間 何 流 n 0 郷 か b で テレビに 1 足 0 10 谺 3 行 痛 やなニ がの 冬 n 後 坂 n 孫 見 0 0 の上 秋暮 が続 どか 身 は 0 溜 捨 寒 0 運 ろで見てまが 事 む 機 きび ててて秋 か 赴 温 まる かい 15 駄 な な故 ŋ 手 L 嫌 7 が多すぎる 任 洒 n < B 多すぎる 暖 P 母 術 ば 1 す 願 身 かい 咲 故 とい なおり くなり るい艶 すの L う 郷 郷 構 痕 スで眼 える 箸を置 海 不 0) 0 る 況 駅 3 秋 がさめ か H 野 正 藤 藤 田 井 村 本 素

水

身郎

明

朗

	~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~	548545454545454545454545454545454545454	T854854854854854854854	645G
幕れなずむ絵に一線の水光る 全山紅葉 霧幻想の絵に仕立て 雪の朝音なく椿の花が落ち 雪の朝音なく椿の花が落ち	池の端そぞろ歩きに出逢う四季 表輩や師の声を聞く川柳忌 親切に教えてくれた遠回り まと腕組んで歩いたことがない お名残と台風七号大暴れ	ゆっくりしておいで一足先に逝く足あがり出来る孫だよすごいだろのあがり出来る孫だよすごいだろうはしてないですがい赤とんぼ	果にもかけこみ寺があるらしい 月の無い琴きき橋で琴を聞く 上Pでたまに聞くもよしラテンの音	
	क्ष्म	西	遠	松
	萬	田	Ш	JII
	萬	柳宏	可	杜
	的	子	住	的
飲んだ夜は飲んだ音色で鳴るギターすぐに堕ちそうな女が手強いぞすぐに堕ちそうな女が手強いぞおまねき左ぎっちょで鋏振る	の秋芽 しぶとくいのち匂わせる の秋芽 しぶとくいのち匂わせる	八 上 ・ 大恋も恋もするべし男傘 ・ 生恋も恋もするべし男傘 ・ 生恋も恋もするべし男傘 ・ 生恋もで愛という字は書きやすし ・ 大恋もで愛という字は書きやすし ・ 大恋もで愛という字は書きやすし ・ 大変もので、これで、の風		高
	内	木	尾	杉
	天	千	岳	鬼

遊

笑

#### Ш 柳 太平記 (246) Ш 柳 の 群 像 東 志

「川柳ってこんなもんと違うか、わてはそ 方思うんや」句会後の昼食の席で、よくコッう思うんや」句会後の昼食の席で、よくコッう思さんなられた。享年76、病名は肺ガンだっぬ人となられた。享年76、病名は肺ガンだったそうです。(中略)=戒名・千与呂志信士。たそうです。(中略)=被名・千与呂志信士。

一九二二(大正11)年一月23日大阪市浪速 一九二二(大正11)年一月23日大阪市交通局・昭和 護町運輸事務所に市電車掌として入局。昭和 15年難波管区駅にて56歳で停年退職。

本格的に川柳を始められたそうです。『川柳塔の前身『川柳雑誌』への参加は昭和28年で『川柳大阪』へは昭和24年ごろより、川柳5年難波管区駅にて56歳で停年退職。

美房・中原比呂志、

番傘

の田口一香・吉

市内居住の「川柳塔社」笠原吸江・吉岡

電が順次廃止され、谷町管区への地下鉄配転支部文化行事の責任者として活躍されて、市ち部文化行事の責任者として活躍されて、市鶴町電車時代は、職場代議員の経験もあり大阪』の発行責任者、編集を永年にわたり続大阪』の発行責任者、編集を永年にわたり続

の混乱期も休むことなく作句を続けられた。

老人達に川柳を勧める一方、市役所にかけ合 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部 を作るために塩満敏さんの協力を得て「川柳部

田喜代志各氏の協力を得て市の文化活動としての「市民川柳教室」を誕生させたのです。「川柳藤井寺」は市長に与呂志さんがお願いした題字で今も盛会、好作家も多く誕生してした題字で今も盛会、好作家も多く誕生して

下ろし活動されています」
「川柳岩出」の創立に尽力され、現在その句報は一三〇号を越え、この会は岩出町文化協報は一三〇号を越え、この会は岩出町文化協報は一三〇号を越え、この会は岩出町文化協

先輩の人柄について詳述している。 長というリーダー的地位は断固として辞退さ を感じ敬服する次第である。そして代表や会 しながらこれをやり遂げられるのだから、 **輩は、肩肘を張ることなく、飄々とにこにこ** 性とエネルギーを要するのですが、 きがあるのに、会を新しく生み出し、軌道に わたる長文のあとで、この筆者はこう与呂志 における中原比呂志の悼文だが、この一頁に のが自分の使命であるかの如くである。 に秘めた川柳に対する情熱はただならぬもの れ、世話役、 以上は『川柳大阪』(平成10年8月号)誌上 かつての『川柳雑誌』誌上で名物だった 「既存の会に参加するだけでも苦労すると 加えて維持継続するのにはかなりの根 脇役として川柳を見守ってい

"雅号ぶっちゃけばなし』(3)に与呂志本人は

それを北川春巣・冨岡淡舟両氏が『よろし』 大阪の句会場の改名で、旧号は好坊だった。 私の与呂志命名は、 昭和27年10月の川柳

よい雅号を得られるよう望みたい。その点よ だから、余りにもピントはずれの流行にとら と思う。雅号にはその人なりの味があるもの といかんので老けたかなと反省中である」 歳のせいか今迄のように、よろし、、よろし、 い雅号を持つ私はしあわせだと思う。最近は われたような雅号は人事ながら抵抗を感じる。 欲を湧かせるのも雅号のもつ一つの不思議だ "よろし"を協賛されたことによる。 作句意 彼の生涯唯一の句集は、昭和54年6月川柳

塔社刊の四六判二百五十余頁厚表紙の『地下 てる」とは湯気が立つほど熱い。とにかく仲 を通り越して妬ましい。「風呂も一緒に入っ とくに奥さんを愛する575はうらやましさ 二田一三夫が面白いことを書いている 鉄』である。その跋文で、編集を担当した不 与呂志さんの川柳には家庭の句が多い。

> お借りして入れた」 れたものと思う。それで句集はこの字だ。 ていたようで、金ヘンに矢の字も試みに書か 起をかついだのと近鉄観光課の編集長からき いたことがある。与呂志さんはこの話を知っ 『市電』誌から市電創期時代の珍しい写真も 「金を失う」に通じるからと、「金の矢」と縁 また序文は中島生々庵川柳塔主幹で曰く カットなどは記念乗車券を使った。また、 かつて近鉄さんが、金ヘンに"失"では

うようなベターハーフであり三人の息女であ であったかもしれない。なんといっても彼に を見送らねばならなかった彼の苦労性は宿命 とっての支えと倖せは、影のかたちにより添 「92歳という高齢の母に仕え、その前に兄

たちの為にも頑張らねばという彼である。 めらうことなく妻に感謝し得る彼であり、 私がここまできたのは彼女のおかげーとた あの朝は夫婦で母を風呂に入れ 与呂志 娘

たが、いい齢に近いのに坊とはヘンだと、加 ついてこんな愉快な話があるのでつけ加える。 筆があとさきになったが、この人の雅号に 「最初は本名の好夫からとった好坊であっ 叱られてさげすまれても義母を抱く 安らかなねむり確かめたのも妻

したのは「金ヘン」に「矢」という鉄だった。

った。四、五十ほど書いた中から、ぼくが推

この句集の題字は与呂志さんに書いてもら

のよいご夫婦仲である

会場爆笑の渦だった、という話も出たらしい」 際その句の主が「よかろう」と応じたので、 楼(よかろう)という人が居られ、入選発表の て与呂志と決めたが、その際本社句会で余可 藤ライトさんに連絡したので、二人で相談し 「昭和30年代後半から40年初めにかけて、

もこの御両人の美しいお人柄でもあった」 の靴や下駄の出し入れをされたそうで、これ 顔一つせず引き受けて、ながいこと泥だらけ 句会入口の下足番をいとにこやかに、いやな は、同じ齢ごろの西田柳宏子さんとコンビで 川柳塔本社句会が千日前自安寺で催された際 一時間以上も前から出席していた与呂志さん

遺作を紹介しておこう。 最後に児島与呂志句集『地下鉄』から氏の 初めての子へ夫婦の眼あきもせず

ささやかな祝いにうれしい墨をする 恩にきた筈のお金がかえせない しあわせの朝末っ子と妻の声 裏長屋隣の時計に起こされる 妻連れたつり池さっぱり釣れぬなり 春風邪におばはん無理しな無理しなや

▼次号は「森下 冬青 雨の日に夢の中で死んでった 与呂志 (中原比呂志資料

## 古川柳歳時記 23

# 『七五三の祝』

#### 宙

清

博美

十一月十五日に行われる子供の成長の祝いとで、出三の祝」である。男女とも三歳になると「髪五三の祝」である。男女とも三歳になると「髪」、男子五歳で「袴着」、女子七歳の「帯解」、この三つの祝いを総称して「七五三の祝」という。

芝明神深川八幡等は参詣多し」と記している。芝明神深川八幡等は参詣多し」と記している。「○十一月十五日賀代神へ参詣有、とりわき赤坂山王社神田明神、「子供髪置はかま着、帯解の祝と、男女美を尽し、賑髪置、袴着、帯解の祝とて、男女美を尽し、賑髪置、袴着、帯解の祝とて、男女美を尽し、賑髪置、袴着、帯解の祝とて、男女美を尽し、賑髪置、袴着、帯解の祝とて、男女美を見いる。

客を粧ひて出立様になりしま、、天保に及ん客を粧ひて出立様になりしよりいみじく華に出立しが、町家に移りしよりいみじく華に出立しが、町家に移りしよりいみじく華を活解の祝といふ。是すなはち七五三の祝歳を帯解の祝といふ。是すなはち七五三の祝歳を帯解の祝といふ。是すなはち七五三の祝歳を帯解の祝といふ。是すなはち七五三の祝歳を帯解の祝といふ。是すなはち七五三の祝なり。こは月の初めより月の終りまで、男子工蔵を奏着の祝ひと称し、大保に及ん客を粧ひて出立様になりしま、、天保に及ん客を粧ひて出立様になりしま、、天保に及ん客を粧ひて出立様になりしま、、天保に及ん客を粧ひて出立様になりしま、、天保に及んを表している。

土の両社、赤坂氷川宮、湯島天満宮、浅草三、大の両社、赤坂氷川宮、湯島天満宮、大草等とく人をして敬神の意を発せしめたり」と奉納にて富饒なり、随てよく神職たるの品位かて土器の盃にて御酒を賜はりぬ。又幣を以於て土器の盃にて御酒を賜はりぬ。又幣を以於て土器の盃にて御酒を賜はりぬ。又幣を以於て土器の盃にて御酒を賜はりぬ。又幣を以於て土器の盃にて御酒を賜はりぬ。又幣を以於て土器の私はる、の式ありけり。当時のこととて神職必ず賽物に拘はること決してな事終にて富饒なり、随てよく神職たるの品位のことにまで筆を及ばせている。

は 記し、 
を 記し、

-七+五+三=十五、というだけの句。
-七+五+三=十五、というだけの句。
-「とらを三井てうつハ七五三 寛元減1
-「とらをうつ」は「ドラをうつ」で、遊一でにうつつを抜かし金を使う意。本句は、親が七五三の衣裳を整えるために、呉服観が七五三の衣裳を整えるために、呉服屋三井で大散財をしたとの意。
-1、10、事帯と袴で十二両 ニュロ ニュロ コーンちらは親類縁者つき合いの出費。 ーこちらは親類縁者つき合いの出費。 十二両は五歳と七歳の利かせ。

神明宮

深川八幡宮、

市ヶ谷八幡宮

赤城築

旅所、萱場町薬師仏の境内、

神田明神社、

挙ぐるのみ。当日永田馬場、山王宮、

ひは次第にすたれたるなかに只身祝とて産神で其華美を厳禁ありしより、武家は却て此祝

へ詣ずるも告朔の儀極めて質素にして其印を

安四鶴2

七五三とハめつらしい十五日

髪置に乳母も強気な髱を出し かミ置きの下駄ハぬかるみしらずに居明二礼5 祝いのために新しく揃えた下駄も、 世話をしている子供の祝いに、 の時とばかりめかしこむ。 ぶにだっこでは汚れることもない。 まだ十分に髪の量がない。 乳母もこ おん 初 21

**髪置 * に乳母もとつちりものに也** ―とつちりものは酔っ払い。祝いの酒で乳 母も泥酔

〇帯解

るが、これを袴着という。幼児から少年への 成長を祝うのである。 男子五歳になると、裃を着せて氏神詣をす

はかま着に初てほめる若衆ぶり はかま着にしやうぞくつけか二三人 安七亀3 一ほんの一寸大人びる。 - 幼い身に裃を附けるのである。 着付けに は何人かの手がいる。 宝十二満1

> はかま着のどうだましてもぬがぬ也 袴着にや鼻の下迄さつばりし 着慣れない裃で氏神の石段を。 - 普段は青鼻二本だが、今日はきれい。 どうしても脱がない。 ・裃姿がお気に入り。脱がせようとしても

七27

れての参詣である。 革羽織を着た出入りの仕事師などの肩に担が の祝い。新調の振袖を着せて氏神詣をするの 衣裳を着せ、髪化粧も花の如くにつくりたて だが、富裕な商家では、目も覚めるばかりの 男児五歳の袴着に対し、女児は七歳で帯解

帯ときを出って女房ハ跡トてゆひ 帯解ハ濃おしろひのぬりはしめ ―初めての厚化粧で参詣 一母親の化粧は後回し。 明八松2 初

帯ときの継穂になりしかた車 帯ときハ男を尻にしきはしめ 帯ときハ半分人か着てあるき 下戸を見立って帯ときのかた車 明八松2 安四鶴2

生酔の中へ帯ときかへるなり 一以上いずれも肩車を詠んだ句。 参詣から帰ると、家では酒宴の真っ最中。

髪置のくしさせばおちさせばおち

よんやさくくとはかま着は上り

安八梅1

うに言って、引張り上る。 氏神詣の途中、道端の水溜り、 とんだりくくとはかま着をつるし 壱つとんだりとはかま着つるし上ヶ

跳越す上 安七亀1 安五智1

59

#### 同 人吟 H 満 秋

―10月号から

## 大空が好きでたまらぬトンボたち

ことになるので可哀相になったからだ。一つ う人間が努めねばなるまいと思っている。 とを思い出し、虫達もこの世を謳歌できるよ すいすい飛んでいるトンボ達を見るとそのこ 標本が一応出来たので採集もやめた。大空を えてもすぐに放してやることにした。だから の標本が出来たらもう同じ種類のものは捕ら 追わないようになった。捕まえると必ず殺す 捕らえたが、その内にこれはと思うものしか 初めはやたらと網を振り回してどんな虫でも 曜日は自分で弁当を詰めて採集に出かけた。 匹も捕らずに帰ることも多くなり、その内 十代前半の私は昆虫採集が趣味だった。 Н

## 弱虫のままの雪より白い骨

は着眼を褒めても中八や下六には眼を瞑らな とは言えないと思っている。指導される方々 の基本である。これが守られないものは川柳 路郎先生は言っておられる。十七音字は第一

いでしっかり規制して欲しいと思っている。

また句想の拡がりから七七五の句が多くな

はならないと思う。

川柳は十七音字の人間陶冶の詩であると、

に盛んになってきていることに注目しなくて 柳の基本を逸脱していく傾向にはなく、さら 揚に構えている。けれどそれ等が甚だしく川 分等が吸収する予備軍だ、くらいに思って鷹 あり、それぞれに盛んな応募状況のようだ。

コピーライターが選ぶ万能川柳などが

伝統を名乗る者達は、それらがいつかは自

ラリーマン川柳、生保などで募集する会社川 にある。伝統を掲げるものから、俗に言うサ

今や川柳を名乗る文芸は百花繚乱多種多様

な骨は綺麗で色気さえ感じられた。 手術でなくしていたかもしれないが、 に骨が意外に少ないのに気がついた。 ついこの間友人の火葬に立会った。その時 肋骨は 真っ白

考えさせられるものがある。

於いて一割以上のハンデを貰うことだから、 ってきている。二文字多いことは競吟の場に

## 当然のようにゴミの日ゴミを出す

孫子の代には悩むか困り果てることだろう。 に困り始めている。平和利用とか言う核にも ないプラスチックなどを作りだしてその処理 ように生活しているからだ。人間は消化出来 はゴミを出すことはない。自然に還元できる 問題であると思っている。人間以外の動植物 人間社会において今最も重要なことはゴミ

### 一合の米でもとげば生きる音

ひとり者の生活音であろう。 い。お米のキュッキュッという音、これこそ ないが、田舎の米なので良く研がないと糠臭 合のお米を研いでいる。それでもうまく研げ その一人だが一合ではうまく炊けないので一 独り暮らしの老人が意外に多い。ま、私も

### 放流の稚魚は知らない解禁日

とは、魚が知ったら怒ることだろう。 人工孵化させて稚魚にまで育て放流するの 何ヶ月かあとに来る解禁日のためである ひかる

### 朝顔の起床ラッパが聞えそう

綺麗なラッパの形の朝顔を明日は見よう。 朝の遅い私はいつも萎んだ朝顔を見ている。

## 京の風浴衣のよさを知っている

都倉水

へ抜けるのか、ブラジャーが透けて見えると糊のきいた浴衣の袖から入ってくる風はどこと受け止め、目の保養をさせてもらっている。ようだ。感心出来ない柄もあるが時代の流れようだ。感心出来ない柄もあるが時代の流れ

## 生きていますか葉書一枚下さいな

少し興醒めだ。

稲葉冬葉

ので患者さんは気にするらしい。癌の方へのが患者さんは気にするらしい。癌の方への

欠かさず出すが戻らない。 原水禁叫んだ胸へ放射能 という葉書から原水禁叫んだ胸へ放射能 という葉書から見舞いは遠慮させられることが多い。

## なまじ席譲ってむっとされました

西出楓。

くない思いをさせていたのだろう。いる。折角譲ってくれようとした方々に面白きたが、最近は素直に掛けさせていただいてきたが、最近は素直に掛けさせていただいて

#### 井上白

例えばの話で釘を打ちに来る

若いときはよく煮え湯を飲まされたものだ。他へ例を引いてそれとなく見え見えの忠告

べ比べあっている風景が見られた。

宴果てる頃になるとあちらこちらで薬を並

## たのしみは水蜜桃が冷蔵庫

が速くなる。今年も私の好物を知っている冷蔵庫で冷えている水蜜桃を思うと帰宅の辻 川 慶 子

いる。

### 推敲を重ねて妻に申し上げ

谷口義

最近は女などと多寡を括ってはいけない。最近は女などと多寡を括ってはいけない。世のに妻という女には気をつけた方が良い。世の中で一番恐ろしい存在だから、口のききかた中で一番恐ろしい存在だから、口のききかた

## 同窓会食後のくすり一せいに

堀江光子

高齢化時代だからでもないだろうが同窓会高齢化時代だからでもないだろうが同窓会をしたが、学校は五十三年前から無いのだ。をしたが、学校は五十三年前から無いのだ。をしたが、学校は五十三年前から無いのだ。

### 体力のいる約束に口ごもる

嵯峨根 保 子

があってもお断りせざるを得ない。気力では負けないつもりでも体力となると

# リハビリをするため生きているみたい

今があると思えるようになると幸せだ。も頑張らなければならない。あのリハビリでも頑張らなければならない。あのリハビリでうだ。生きていくためには痛くとも苦しくとうがあると思えるようになると幸せだ。

## 一緒には死ねない夫婦茶碗かな

ように詠まれると頭にこびりつく。は違っているかも知れないと思っても、この意味をいろいろ考えて作者の意図が自分のと意味をいろいる考えて作者の意図が自分のと

# うまいかと問われまずいと言いにくい

答者の立場が最初から答えを決めている。という返事が欲しいからである。質問者と返という返事が欲しいからである。質問者と返

### 母を語るとき少年になる夫

の母しか語れないが、この気持わかるわかる。母は十八歳の時に亡くなったからそれまで



#### 河 内

選

方美人かるく なし他人 中天も 、好かれては は肴にして 地も人も 嫌わ 厭きず れて F. 久美子

んわり

0

色に

あ

3:

なく

染まってる

市

V.

蔵

信

子

りとかわされ

てから興味持

不一八修物

ば な

世

0

分が待てずに

濡

n

る通り

雨

7 身辺の やカク

ヒー

一をことわる理由ないのでゴタゴタだから放っておく

のです

盛るサラダの横にそっともる

器量もバカにするなと露地 一つに 出端 挫 かれ 3 野菜 綾部 市

> H 芳

藤

郎

娘

1 の小

言を妻に

ば

かり言う

手も足もなげ出-

ī

実家は良いところ

しておこうハイ チー

ズ

足腰

か

くて独り暮

しです

情

か

恋 強

か聞

か す

E

四

+

吉日へ

少し

おまけの褒め

言

葉

渋そうな茶が出

て足

んが崩せ

な

vi ta

ヒト土に線引く愚を重

鬱街母落

をし

たポ

スター

が笑っ

てる

路樹の手入れ差がつく県の忌に経読んでいる蟬時

境雨

の日はわたしの好きな花を買う

いて香水通り過ぎ

塾力

塾どの子も鷹になるように

タカナの

П

和

浜 市

秋

元

4

1

I

"

1

財

布

0

方

かい

先

にやせ

羽曳

野

コスモスも相槌をうつ立 ヤホンを外してごらん秋の音ングラスはずせば唯の男の子 あ との 躾に 泣 V ている ち

> 市 JII 信

子

倉 Ŧi.

市

矢

月

寝屋川市	瀧	本	八十八	八	唐津市	宗			弘、
安売りの胡瓜アートの曲りよう					大統領おれもおまえも不倫する				
美術展売約済みは良く見える					いつからか野党の席で吸うタバコ				
先端の技術で売りぬく町工場					ストレスに効きめ確かな野良の汗				
清水湧く弘法さまの杖のさき					周平を読みたき日なり秋の雨				
肌眩し祭り沸かせるギャルみこし					毬をつくゆとりなどない里の寺				
羽曳野市	安芸田		泰	子	河内長野市	大	西	文	次
淋しさを埋めて嵩んだ電話代					長雨に棚田気になる米の出来				
足留めの夕立もよし縄のれん					台風でおじゃんになった祭り笛				
熱燗に少しほぐれた重い口					お閑なら来てと言われたことがない				
旅行する孫に預かる兜虫					停年前の首リストラにちょんぎられ				
猫の子へ園児たちまち列崩す					日に一度褒められそうなことをする				
京都市	高白	島	啓	子	尾張旭市	Ξ	浦	き	\$2
ひとり寝る家に電気を二三か所					呆け防止のツボはしっかり覚えとく				
妻のガン一人の胸にしまえない					良い人ねと言われ鏡と自問する				
反乱の檄をとばした人が来ぬ					無駄死にと思いたくない夫の戦死				
道草が皆栄養になっている					喜ぶべきか憂えるべきか夏肥り				
雛壇といけいけらしい銀行家					退屈な顔が並んで質疑中				
和歌山県	中	後清		史	横浜市	Ξ	村	八重子	子
饒舌の友に寂しい影を見る					川風にどよめき乗せて咲く花火				
頼りない親に気丈な子が育つ					祭太鼓にせかされて帯結ぶ				
本番でピシッと決めたプロの味					見回して優先席に浅く掛け				
むつまじさ誇示するようにペアルック					木洩れ日を朱に染めあげる曼珠沙華				
独り旅 一会の水にうるおされ					憂さ払う声が少うし甲高い				

あさがおは隣の厨向いて咲き	鴨居から忍者のような蜘蛛の糸	あと一人揃うと丸い輪が出来る	目のやり場なくて誤魔化す咳一つ	指輪には申し訳ない太い指	大阪狭山市 伊 藤 尚	思い出もトンチンカンになる老後	神様の機嫌とりつつ今日も昏れ	動揺を読み間違えて攻められる	過密から過疎にもどって気が狂う	とりあえず呼吸はしてるが死んでいる	鳥取市 夏 目 健	行く夏を惜しむか残り蚊そっと嚙む	バスツアー隣の婆がよくしゃべる	三人目出来て父ちゃん猛打賞	候補者が無闇に私の手を触る	浅学と言うて先手を打っておく	唐津市 樋 口 輝	無口よりお喋りがいい妻元気	星の降る里の蛙の合唱団	順不同にもそれぞれの指定席	居酒屋で打つ一日の句読点	居酒屋に名前の知らぬ顔なじみ	札幌市 三 浦 強
					子						_						夫						_
突然に花火のような死亡記事	低金利預けしぶりもしたくなる	安ければ買う気の賞味期限見る	家で吞む酒一合で酔うている	数えでは言わないでくれ古稀の宴	新潟県	子に残す足跡深く刻んどく	正装をすると寄り道したくなる	割り切って言うのはいつも第三者	ベテランに混じった雑魚の勇み足	メロン半分たのしみ残す冷蔵庫	和歌山市	古里の駅に似ていて途中下車	先送りしてきたつけに泣かされる	赤とんぼに露払いさせ墓のみち	留守電の小言言い訳うけつけぬ	借りに来た嘘を承知で貸してくれ	羽曳野市	逃げられぬ病と仲良くすることに	気弱さが大きな荷物せおいこむ	伽藍堂で聴くコンサート捨て難し	お茶パック茶柱いまに死語となる	老いの身も避けて通れぬ不況風	兵庫県
					高						吉						芦						円
					野						村						田						増
					不						さち子						絢						純
					-						7						子						子

縁談にポチも家族と正座する不揃いのトマトに露地の味もらうで分別子鼻が可愛いと言うプロポーズの子のである。	ストレスを夫婦喧嘩で追い払う 本命に絶対賭けたことが無い 門務所に自由は無いが只の飯	一大歳これから育てい味方茄子とキューがなら敢えて繕う	妻はもう見な あウェディン をかすアドバ のウェディン で をかすアドバ で で で で で で で で で が す で に す の た が す で に す の た り に う が り に う が り の た り の と り の と り の と の り の り の り の り の り の	海峡を渡ると温い国訛り 北九州市 岡
	沢	背	田	田
	せ つ 子	尽呂久	扶	幸
	子	久	美代	生
老いてなお恋を夢見る一人旅戦覚の秋 先に延ばしたダイエット味覚の秋 先に延ばしたダイエットがいなりである。	サンプルが大きかったねエビフライひたすらに下向きとおす茄子の花寝返ろう花いっぱいのグループへ	成張ってる夫の脚が頼りない 写真では仲良い夫婦撮ってある 貧乏がファイトの汗を光らせる 和歌山市	<ul><li>一ス横目</li><li>一ス横目</li><li>一ス横目</li></ul>	宝くじ当ればなどと思わない羽曳野市
	高	上	大	徳
	Ш	地	大村	徳山

医者と行く旅油断して風邪をひき	もう二度と来れぬと穂高焼きつける	残雪で沸かすコーヒー五感研ぐ	登らねば見られぬ花だ描きとめる	横浜市	父さんでなくちゃ駄目なの風呂掃除	パパ あなた 名前は何処お父さん	惜別ができずに迷うリサイクル	仲直りのつもりでしょうか茶に誘う	横浜市	難しい本を枕に午睡する	夏空へ花火のように百日紅	祝電の披露へ序列きめられる	熱帯夜虫の初音にほっとする	横浜市	からかいといじめとの差紙一重	人ごとの目が災害の画面見る	ハッタリへ時計ブランド品に替え	なけなしの九十歳の血を吸う蚊	横浜市 :	丁寧な言葉に焦れるべらんめえ	顔だけの手入れを笑う膝小僧	馬鹿になる事を覚えて友が出来	遅咲きの恋に人生観狂い	横浜市
				長					保					布					北					荒
				島					田					Щ					沢					井
				亜希					絹					嘉					街					広
				希子					子					信					湖					和
戒名を貰って今もまだ元気	箸は右作業は左使いわけ	子の浴衣一夜で縫った若い夢	に万葉の詩しのぶ	静岡市	逆転を信じねばったど根性	早起きは時代錯誤と疎まれる	びれて堂々めぐり	用で流れに逸れている私	静岡市	許そうと決めたらどっと眠くなり	買い足した金魚古参を追いまわす	期へ遊び足りない白い肌	にされている下手な	川崎市	老いるとはこんなものかと医者通い	少しだけ背伸びしてみるクラス会	時流にも力が無いと乗りきれぬ	虫の音のエール夏バテ追い払う	横浜市	鏡台でパパが百面相をする	限界を悟ってからは上を見ぬ	した主見る腰が浮	1)	横浜市
				中					増					和					鈴					Ш
				西	ĺ				田					泉					江					下
									扶					見早	i)				純					省
				雅	i				美					早子	ē.				子	S				子

引き分けにしとことうまく逃げられた決めかねて両方買うてしもた靴別かされる野球で私通になりプロ野球うちにも監督一人いる 大阪市 中	なんとなく祭り気分にさす太鼓傾いた空家にくもの巣がみごと踊りの輪ホームレス達たのしそう私なら譲ってあげぬ恋の椅子	を受し入れた眼鏡に華やぎぬ の点を袋に入れて持ち歩く の点を袋に入れて持ち歩く	大阪市 一大阪市 一大阪市 一大阪市 できせを逆手にとって寡婦の店できるがは がかり できまる がまっとこの涙は面の下にある がまっとこの涙は面の下にある	改装に足が遠のくお品書き テスト後に不安ふくらむ子の多弁 テスト後に不安ふくらむ子の多弁 換気扇止めて内緒の話する	三重県
7. C.		22	Ξ		尾
澤		本	浦	本	崎
伽		舞	千 津	勇	
羅		夢	子	太	勤
あつい汗かいた体が軽くなる 電話より手紙で遙かなつかしむ 電話より手紙で遙かなつかしむ	美男子につま先踏まれがまんする 還暦は油の切れる信号機 古傷を癒す深山のかくれ宿	病窓に秋を知らせる赤トンボ 菊花展蝶も審査をして回り 対房に義理で付き合う手芸展 女房に義理で付き合う手芸展	声かけて欲しい老人とはなりぬ 月毎の逢瀬むなしい亡妻の墓 人柄の良さは顔から仕草から	長続きしたいからする割勘に 長続きしたいからする割勘に 手短のはず夏の夜の長電話	大阪市
山		#	田	乙	榎
本		尻	中	倉	本
		民	1	武	日
宏		子	シエ		の出

五食分つくって妻は有馬の湯出しゃばりが町の空気を変えている秋祭り働く人と酔うた人	富田林市	的な話に薄い血や涙	独り暮しも板につき	=	関白も手伝う家事の跡始末	羽曳野市	火だるまにならず橋龍退陣す	病み上がり指輪もしかとさだまらず	川の字が直ぐに崩れる熱帯夜	涼風を運んでおくれ赤トンボ	堺市	時々は娘の幸せにお邪魔する	舞台裏から台詞が飛んでくる初日	毎日を生きているのが舞台です	冗談で流してくれている情け	堺市	タイタニック沈み東宝浮き上がり	不満気なオルブライトの顔が癪	シャッターが閉まっているぞ倒産だ	去年まで呆けてなかった言うている	堺市
	Щ					Щ					村					見					梶
	原					田					上					本					本
	昭										靖					ちゃ					哲
	水					晋					雄					子					平
口無立秋 下駄ち日																					
下手な父の説教一理あり駄遣いすると財布の鈴がなるち直る元気をくれた温い風日和少し遠出のペダル踏む	河内長野市	イアナの不幸ツアーに	熱燗がうれしい月が丸くなる	按摩機を買って絆が細くなり	送迎の塾の車に最敬礼	河内長野市	牛乳をゆっくり嚙めと無理を言う	厚化粧妻が宣戦布告する	勝つよりも負けない策に明け暮れる	肩書きを一杯並べて無職です	枚方市	スタートの昂奮がある老いの坂	哀の日もやはり時間に縛られる	ぼちぼちでいいさ君にも逢えたから	ひと言をのみ込んできた妻の愛	富田林市	叩かれるたびに男の顔になる	菓子折りに阿吽の呼吸込めてある	肩書きが取れてお酒が旨くなり	訳を誰にもせず	富田林市
手な父の説教一理あり遣いすると財布の鈴が直る元気をくれた温い和少し遠出のペダル踏	河内長野	イアナの不幸ツアーにする商	燗がうれしい月が丸く	摩機を買って絆が細く	迎の塾の車に最敬	内長野	乳をゆっくり嚙めと無理を言	粧妻が宣戦布告す	つよりも負けない策に明け暮れ	書きを一杯並べて無職	枚方市 濱	タートの昂奮がある老いの	の日もやはり時間に縛られ	ちぼちでいいさ君にも逢えたか	と言をのみ込んできた妻の	田林	かれるたびに男の顔に	子折りに阿吽の呼吸込めてあ	書きが取れてお酒が旨くな	い訳を誰にもせずに一人	田林
手な父の説教一理あり遣いすると財布の鈴が直る元気をくれた温い和少し遠出のペダル踏	河内長野市	イアナの不幸ツアーにする商	燗がうれしい月が丸く	摩機を買って絆が細く	迎の塾の車に最敬	内長野市	乳をゆっくり嚙めと無理を言	粧妻が宣戦布告す	つよりも負けない策に明け暮れ	書きを一杯並べて無職	方市	タートの昂奮がある老いの	の日もやはり時間に縛られ	ちぼちでいいさ君にも逢えたか	と言をのみ込んできた妻の	田林市	かれるたびに男の顔に	子折りに阿吽の呼吸込めてあ	書きが取れてお酒が旨くな	い訳を誰にもせずに一人	田林市
手な父の説教一理あり遣いすると財布の鈴が直る元気をくれた温い和少し遠出のペダル踏	河内長野市 柏	イアナの不幸ツアーにする商	燗がうれしい月が丸く	摩機を買って絆が細く	迎の塾の車に最敬	内長野市 水	乳をゆっくり嚙めと無理を言	粧妻が宣戦布告す	つよりも負けない策に明け暮れ	書きを一杯並べて無職	方市 濱	タートの昂奮がある老いの	の日もやはり時間に縛られ	ちぼちでいいさ君にも逢えたか	と言をのみ込んできた妻の	田林市 中	かれるたびに男の顔に	子折りに阿吽の呼吸込めてあ	書きが取れてお酒が旨くな	い訳を誰にもせずに一人	田林市 大
手な父の説教一理あり遣いすると財布の鈴が直る元気をくれた温い和少し遠出のペダル踏	河内長野市 柏 本	イアナの不幸ツアーにする商	燗がうれしい月が丸く	摩機を買って絆が細く	迎の塾の車に最敬	内長野市 水 谷	乳をゆっくり嚙めと無理を言	粧妻が宣戦布告す	つよりも負けない策に明け暮れ	書きを一杯並べて無職	方市 濱 田	タートの昂奮がある老いの	の日もやはり時間に縛られ	ちぼちでいいさ君にも逢えたか	と言をのみ込んできた妻の	田林市 中 井	かれるたびに男の顔に	子折りに阿吽の呼吸込めてあ	書きが取れてお酒が旨くな	い訳を誰にもせずに一人	田林市 大 橋

膳の旅は三日で飽きがくる と去る日の汗をいとおしむ と去る日の汗をいとおしむ と去る日の汗をいとおしむ とまる日の汗をがる中国産 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	保険満期で生前墓碑のプラン練る古希すんで嘘言い合うて仲好うて古希すんで嘘言い合うて仲好うてあげ足取って正論潰すいやな奴を魚のひるねあぶくが一つ嘘一つ 羽曳野市 森 田 四税払い気兼ねして吸う愛煙者	を は で長生きしてと慣ら にマンガになって がになって がになって がになって がになって がになって で長生きしてと慣ら でもリストラをして でもリストラをして でもリストラをして でも、 でも、 でも、 でも、 でも、 でも、 でも、 でも、
重	三郎	智子吉子
一性辛に 夕絵手紙 タボー を かんしゅう かんしゅう おんしゅう おんしゅう おんしゅう おんしゅう おんしゅう おんしゅう かんしゅう かんしゅん かんしゅ かんしゅう かんしゅん かんしゃ かんしゅん かんしん かんし	<ul><li>肌だしてな</li><li>立ち話少し</li><li>立ちが少</li><li>立ちが少</li></ul>	わ豊武口 鼻有暗ま たか者下 持り算っ しさ震手 ち難をす
一足早く秋をよび 合傘はたのしそう を雀のあさげに起こされる なれて蛍も生きている なれて蛍も生きている	んでもありの夏が来る はまあるい吹き溜り はまあるい吹き溜り に断市 はまあるい吹き溜り に動市	和歌山市 でに生き怪我ばかり負うている うはラストシーンへ置いておく うはラストシーンへ置いておく ならぬ顔に美人と書いてある 和歌山市 同士なかなか幕が開けられぬ いしてストレス追い払う を切り裂く少年のナイフ を切り裂く少年のナイフ
よりない おお 岩	んでもありの夏が来る れでもありの夏が来る はまあるい吹き溜り はまあるい吹き溜り に なに群れくる赤トンボ なに群れくる赤トンボ なに群れくる赤トンボ なに群れくる赤トンボ	程我ばかり負うてい 飲んで不味い酒 トシーンへ置いてお トシーンへ置いてお に美人と書いてある 和歌山市 なか幕が開けられぬ なか幕が開けられぬ く少年のナイフ く少年のナイフ
よりない る	んでもありの夏が来る はまあるい吹き溜り はまあるい吹き溜り に断市 はまあるい吹き溜り に動市	和歌山市和歌山市和歌山市 をか幕が開けられぬ トレス追い払う イ少年のナイフ く少年のナイフ
よりない おお 岩	んでもありの夏が来る んでもありの夏が来る れでもありの夏が来る れでもありの夏が来る	和歌山市 森 怪我ばかり負うている 飲んで不味い酒 トシーンへ置いておく に美人と書いてある 和歌山市 武 なか幕が開けられぬ トレス追い払う く少年のナイフ く少年のナイフ

秋風に煮豆が似合う老いの膳土壇場で肝が据わるは女です 大変の名が出ぬまま握手して別れ 梨ぶどうフルーツ好きに秋うれし		では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	満更でなさそう誘いかけて見る 大井のシミが羅漢や鬼に見え 天井のシミが羅漢や鬼に見え	兵庫県 仲 だたらめの帳尻合わす棚卸し だれらせラダも食べて暑気払い でたらめの帳尻合わす棚卸し	尼崎市 清
坮		*	見	井	水
智			末	素	久
力見	П	きくる	野	水	美子
監督も指 夕食は秋 に を を を を を を を を を を を を を を を を を を	秋 棒 盆 踊 か	お夕母子 散焼の守	定 拗 笑 神 年 ねい 様	し人据言きのえい	
図時どきまちがえる 刀魚かと靴脱ぎながら したのにあなた気が付か	風あれもこれもと意欲湧く かの国会中継聞いている がしの顔にも会えた盆踊り	お散歩のコースは犬に選ばせる母焼けをバックに乱舞アキアカネ母の日も敬老の日も祝われる子守役終えて別居をさせられる子守役終えて別居をさせられる	はは似合う男女を探し出す は余生を遊ぶ始発駅 鳥取県	きたりも田舎の良さと決めているの振り見ていて知恵もついてきたの振り見ていて知恵もついてきた	鳥取県
図時どきまちがえる 刀魚かと靴脱ぎながら いンドバッグの中で鳴り	高根 の国会中継聞いている の国会中継聞いている しの顔にも会えた盆踊り	老の日も祝われる一スは犬に選ばせる	は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅	も田舎の良さと決めて見ていて知恵もついて見たった嫁の味	取
図時どきまちがえるしたのにあなた気が付かぬいたがにあなた気が付かぬいと 戦脱ぎながら	高 りズムに乗ったスニーカー りズムに乗ったスニーカー しの顔にも会えた盆踊り	で別居をさせられる ツクに乱舞アキアカネックに乱舞アキアカネ	は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 はのかいテストする	も田舎の良さと決めている 見ていて知恵もついてきた 見ていて知恵もついてきた	取県
図時どきまちがえる 刀魚かと靴脱ぎながら したのにあなた気が付かぬ ハンドバッグの中で鳴り	高根県 皆 田 かの国会中継聞いているの国会中継聞いているしの顔にも会えた盆踊り	で別居をさせられる ・一スは大に選ばせる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 は余生を遊ぶ始発駅 鳥取県加	も田舎の良さと決めている 見ていて知恵もついてきた 見ていて知恵もついてきた	取県橋
図時どきまちがえる	高根県 皆 田の国会中継聞いているの国会中継聞いているしの顔にも会えた盆踊り	一スは大に選ばせる 松江市 山 根	は余生を遊ぶ始発駅 鳥取県 加 藤は余生を遊ぶ始発駅	も田舎の良さと決めている 見ていて知恵もついてきた 見ていて知恵もついてきた	取県 橋 谷

ンネルを抜けると 風の雨でも欲しい 葉がくねくね続く	沢登り甘露の水を手で掬う	愛媛県	物持ちの良さを笑って戦中派	低金利貧乏ゆすりが止まらない	慎重がすぎて追い風やり過す	暑かった汗をうすめる缶ビール	今治市	人々のなさけにふれて小商い	歌わないギターが一つ子の部屋に	たして二で割りたいような片日和	おしゃべりが弾む元気だなとおもう	今治市	人許す広さを持てと波が言う	ふるさとの海は希望を溜めるとこ	青空に感謝している鳶の舞	大切な心が聞こえない祝辞	今治市	採血と注射で腕は痛々し	疲れないのかにぎやかにすだく虫	孫やさし何で報いんこの老婆	元気で老いることのみを望んでる	島根県	
		安					越					中					渡					谷	
		野					智					村					邊					岡	
		案				9	青					好					伊油					d	
		山子					園					恵					津志					4	
切った糸つないで句座の仲間入りカタカナの花好きになる花の本サギ草の翼をゆらす風といる		沖縄県	万歩計土産は野辺の花の束	動かぬが亡父の時計は捨てられず	恋唄の意味わからずに孫唄う	明るさと健康じまんの古女房	香川県	回復した娘の姿だけ描く	癌の娘の命を神よ奪らないで	くじけてはならじ笑顔で娘に接す	メラノーマ町医の誤診より起こる	愛媛県	土俵では見られぬ笑顔のインタビュー	喪が明けて女にもどるイヤリング	風の盆母なき里の墓参り	人目にはつかぬ苦労に咲いた花	愛媛県	閉会の挨拶をする脇役よ	定年後つんぼ棧敷にいるようで	詰めの甘さがまだ抜けきれぬ勇み足	あやふやな記憶の中の虫送り	愛媛県	
		杉					向					黒					宮					中	
		谷					Ш					田					本					居	
		カズ					治					茂					末					善	
		ヘエ					延					代					子					信	

که ا	横浜市 福 田 由美子おにぎりも子等も青空好きらしい七曜がみな踊ってるカレンダー役者だな踊らせられる振りもして	焚けば風はいくの被災に飛んで	れた老婆にもある腹の訛り気楽な夕涼み	ピー機に亡き弟の顔	まぜこぜの薬にしどろもどろの胃 天災人災たんぼトコトン泣かされる 縦揺れに肝をつぶした観光地(gg6)	秋田県 湊 修 水
気 り   i	和歌山県 杉 山 精かけ持ちの通院なんてむつかしい というできた 会部表の花り かんしゅ しかて まけ 単便局にある 眼鏡	排気が路地を暑がお地を暑が	点が美点になって友が出来並びが整いすぎる総入歯務おり御苦労様と妻の酌	うめんの箱を潰して夏終るの人が読んでいるから読んでみる腹になれば機嫌もなおるだろう	洗剤が減った新聞換えようか 横浜市 川 島 良気晴しに弾いたショパンも指が老い	横浜市 豊 田 羊
2	子	夫	子	多留	子	子

クーラーに褒美あげたい夏でした	村おこし息吹きかえす民芸品	見るからに酒豪のような顔で下戸	和歌山市	ラベンダーの匂いを連れた隙間風	老眼にルーペを足して見る辞典	雑巾がミイラになって現われる	和歌山市	何もかも忘れてしまい原点へ	老いの日々ボリュームあげて生きて	長電話コンロの鍋が怒ってる	和歌山市	あの世行き齢の順とは限らない	遺伝子の組替え貴方先祖誰	先送りして繕って居る政治	海南市	いよいよ来た敬老会の御招待	私のテリトリーです四畳半	残り物食べて栄養ゆきわたり	和歌山県	ふところのさいふに聞くとノーと言う	ロ八丁手八丁は信じない	田に急ぐ私の花道まんじゅしゃげ	和歌山県
			木				福		いる		和				谷				坂	フ			村
			村				重				田				口				東				中
			親				美				美				義				和				悦
			跻				子				寿子				男				代				男
爪研いで釦かけるに暇がいり	飛行距離3メートルの蚊にさされ	スローモーになったと孫が背を押す	兵庫県	台風をしのいだ大根甘くなる	天然の音楽を聞く登山靴	都会より村の文化がへそに合い	兵庫県	胸痛もこらえて笑顔のヨーロッパ	雲海を見つめて帰路に夢馳せる	姑偲び墓に詣でて教え乞う	兵庫県	満月のお見舞受ける一人部屋	雨止んで傘一本をもてあます	とうもろこし土の甘味を愛おしむ	兵庫県	お別れがいつかくるとは思うたが	実感のわかない死です線香上げ	畠から帰って来そうな亡夫を待つ	兵庫県 -	有頂天そこから話くい違う	好きな彩足して燃えてる老いの坂	方言の母の手紙に溶けて行く	兵庫県
			植				7				油				刑				ш				11
			植				安				徳				西				中				北
			植村雄				安達				徳 平 毬				西山八				中野 とよ				北川とみ

			ヤッホーが無事を確かめよく響く六十のトキメキもよし夏の夢					童謡へ人それぞれの目の光借金して子との思い出夏の旅
正治	津	河	尼崎市	広	隆	昇	大	枚方市
			父老いて虫一匹も殺せない					香りだけかいで松茸素通りす
			風向きの変らぬうちに酒を注ぐ					一人旅終えた息子がでかく見え
			良妻に甘えてばかりいられない					ストレスを洗い流した里帰り
鹿太	辺	田	尼崎市	鳳	紫	宮	Ξ	枚方市
			ほめられた記憶もないが亡夫の愛					献立に文句言わぬと決めました
			疲れるがやっぱり孫が来てほしい					かかりつけ医師の羨む自由人
			朝顔が疲れはじめて秋便り					成功のフルーツ農家に後継者
美也子	田	内	尼崎市		正	太久	木	河内長野市
			子の主張理が通うているので困る					縁側で団扇がよいと祖父頑固
			ウインドー覗くと財布そっぽ向く					親と子に核分裂の火花散る
			待ちぼうけペアのカラスに嗤われた					惚けぬ妻神経質で可哀想
夢之助	安	森	尼崎市	淳		谷川	長谷	西宮市
			明石橋より橋らしいかずら橋					洋タンス夏の疲れがぶらさがり
			ゴミの山見る月曜の万歩計					縄のれん上司肴にする予定
			魂を奪われて出る名画展					カイワレは土の温さを恋しがり
勝巳	丸	軸	尼崎市	子	郁	谷	樫	伊丹市
			タイガース勝ちっぱなしで眼がさめた					画布ひろげ色づく山を見つめてた
			英国の名門校出の質屋さん					楽しいが通院だけのお友達
			歯科医さま何と優しい声と相				あり	コマーシャルにほうびあげたい台詞な
すみれ	上	井	寝屋川市	俊	喜	中	田	川西市

分相応政治花咲く屋台酒 の大いこと冴えた手料理酒の膳 がいこと冴えた手料理酒の膳 がかいこと冴えた手料理酒の膳 がよいこと冴えた手料理酒の膳	膳の魚何キロ泳いで来たのかな 高槻市 執 行 稲年金を掛けてもらえぬ講の金	確かめて出て引き返す忘れ物深夜ラジオ妻の寝息を聞きながら 通帳にストレス溜まる低金利	昼食のあとはテレビの虫となる   八尾市 輿 田   安焼の空 窓に見て晩ごはん	病む夫猛暑くぐって秋の貌   八尾市   鷲   見   見   見   一過へクトパスカル何語かな	八尾市平川幸
夫	子	子	明	章	枝
おはようと言え言い訳をしないおけ出しても退投げ出しても退れが群れ	弁たっては かぶと虫	空港に来	投げこんだ小	生と死を分け	
<ul><li>えば金魚が寄ってくるれさいている飛鳥道</li><li>退職金は出る仕組みが人生は乙の上</li></ul>	で何も摑めぬ甲斐性なし虫一夏飾り尊厳死	ると不況も忘れそうが出ないので困る	しか見えない頃もあったっけって生きて来ました細い脚んだ小石流れを変えるかも	東大阪市 た五秒の初動ミス かになるボランティア	高槻市
<ul><li>えば金魚が寄ってくる</li><li>れさいている飛鳥道</li><li>豊中市 み</li><li>が人生は乙の上</li><li>が方をは出る仕組み</li></ul>	選めぬ甲斐性なし 原の涙粒 藤井寺市 岸	和そう 羽曳野市 西	しか見えない頃もあったっけって生きて来ました細い脚	東大阪市 北 東大阪市 北 東大阪市 北	槻市 左右
<ul><li>えば金魚が寄ってくる</li><li>は期金は出る仕組み</li><li>が人生は乙の上</li><li>が人生は乙の上</li></ul>	<ul><li>選めぬ甲斐性なし</li><li>原力導厳死</li></ul>	羽曳野市 西 村	しか見えない頃もあったっけって生きて来ました細い脚	東大阪市 北 村た五秒の初動ミス	槻市 左右田
<ul><li>えば金魚が寄ってくる</li><li>れさいている飛鳥道</li><li>豊中市 み</li><li>が人生は乙の上</li><li>が方をは出る仕組み</li></ul>	選めぬ甲斐性なし 原の涙粒 藤井寺市 岸	和そう 羽曳野市 西	しか見えない頃もあったっけって生きて来ました細い脚	東大阪市 北 東大阪市 北 東大阪市 北	槻市 左右

一円玉まだ幅きかす地蔵尊寝ぼけ顔手鏡出して百面相絶飲食の赤札下げてオペを待つ	大阪市 伊 藤 博 仁父さんの炊いたお粥で風邪も逃げくさんの炊いたお粥で風邪も逃げ	水琴窟江戸の匂いと音がする 内緒なら口を閉ざしていればいい プライドのハードル下げて丸くなる	大阪市 松 岡 千恵子空元気寂しい顔は引き出しへ腹の立つ事みな忘れビール注ぐお土産は買わず美味しい旅をする	大阪市 星 野 ひ さかサブランカ古稀の私は日本百合 持ってはるとやっかみに言う他人さん	<ul><li>、 大阪市 中 井 正 秀孫帰省振り回された大蔵省</li><li> 大橋に勝てぬフェリーを惜しむ声</li></ul>	豊中市 岸 田 知香子
キープしたボトル半分病んでいる言葉の暴力 幼心が切れる時どの孫もたぐり寄せてる田舎の盆	予定表作って気合掛ける朝 予定表作って気合掛ける朝 一人分の雑炊を煮る夕げの膳	カタカナの花も顔出す華道展寒い秋過疎の村にも失業者	昇給はもう家計簿に折り込まれ絵ハガキの空の蒼さは信じたい	鯖の首いっ気に妻のサウスポーホラ少しまぜて気を引く蟹の宿男性のスカートゆれるダイアナ忌	大阪府 奥 野 養その笑顔一目悪女になって見たかった 儂より先に逝くなと同じ事ばかり	大阪市 亀 井 円

秋茄子が箸の動きを早くする箸置いて話す酔客目が据わり謎を解く為には墓も掘る時世	れに稲穂がひ	K C 波宙	朝夕に夫と療友の幸祈る 棋手すり頼る歩みに連れ添うて は手さり頼る歩みに連れ添うて	古希祝う働きづめのでっかい手仏間の柱何万巻の経を聞く	本当の事を話せば友は去り温暖化防止を急げこの暑さ	岡山市
	平	藤	録	高	西	清
	井	川	沢	尾	垣	水
	栄	弘	風		美知	金太郎
	翁	子	花	京	子	郎
さわやかに日本語青い目がしゃべる電話口ころころ回る妻の舌腰回り気にして食べるグルメ旅	やかさ保つ苦痛に耐えています。	内者なご出来ない告がよく響く 年の差で人は妻だと見てくれず 年の差で人は妻だと見てくれず 倉吉市	実にならぬ話だけれど潤滑油 実にならぬ話だけれど潤滑油 鳥取市	A人に法話通じぬ舟をこぐ 不景気に冷凍したい福の種 の種	寺の鐘一つきごとに闇の濃く 年甲斐もなく空き缶をけってみる	鳥取市
	池	大	松	徳	谷	西
	10					
	尾	下	本	田	岡	尾
		下智	本つね	田 ひ ろ 子	<b>尚</b>	尾 敬之介

二合の水一日五回飲んでいる 指折って生きてる友の名を数え パーマ屋へ愚痴をこぼしに行ってくる 益田市 岡 田 たけを	居酒屋に下戸の夫が誘う夜やることはやった枕を抱いて寝るクロールで泳ぐ五十路の秋もある	当段着に着替えてほっとお茶の味 がり入れが間近で古米気がもめる でおやかな挨拶うれし通学路	でひと	度か荷くずれしかけた夫婦坂歩みちいくつですかとまたきかれ五年二人で散歩しています	内緒ごと赤いポストは知っている味のよい大根黒い土が好き酒蔵が伝承館に身売りする	
ボチボチと言うてた頃が花でした かだなあこの頃妻にお世辞言う 唐津市 井 上 勝 視	風鈴の風に抱かれて昼寝せり月の夜の虫の語りに歩を移す懐かしき人は司会の役つとめ	きり返す言葉を呑んでいる笑顔 光る日が見たくて青い海に出る	カードばかり使う怖さを知っている聞き流す耳を持ってる処世術リハビリの眠りブザーに起こされる	縄を焼く姿のままに灰になる 好意だけ頂きますとことわられ 冗談の中の小骨が突きささる	クローンには使えぬだろうこの個性保険料払いたくない長寿国斯くあれど沈まないだろなあ日本	高知県 桑 名 孝 雄

てんてこ舞何処を向いても用だらけメンバーが揃って鍋もはしゃぎ出す歳足の列見送って道掃除横浜市	お祭りがすみ みちのくのうろこ雲原宿が移った夏の軽井沢	今朝の道五感に響く秋の声 年前0時コンビニ眠る暇がない	甲子園砂を宝に敗者去る誕生日自分で祝う花一輪横浜市	仰いで討死すいた姿原爆忌東京	コリャ珍しいしみじみ顔を眺められ三年も想い続けた恋破れ東京都高型で丁度時間となりました東京都	八王子市
生	伊	山	岡 近	井	吉	井
坂	藤	梨	田 藤	上	田	上,
#	J.	雅	芳 道	2	土	京
ト 子	み	子	江 子	こよし	風	郎
生き方の違いを認め丸く住み質乏から気骨生まれた一代記質の上き寄せたいと派閥劇質を抱き寄せたいと派閥劇	お犬様下の世話までして貰	患者の勝手よい	クラス会出世 伝言をローマ	要求を一つダウ福の神わが家訪	百薬の長と信じて今日も古希からはケチに徹して古希からはケチに徹して	
記め丸く住み でいと派閥劇 吹田市 吹田市	の世話までして貰い吹田市	大阪市が医者に悪い医者	頭は餓鬼大将   字で書く祖母の見栄   生駒市	ンし妥協する 滋賀	でを でせまく三階建 空せまく三階建 空せまく三階建	横浜市
<ul><li>め丸く住み</li><li>いと派閥劇</li><li>いと派閥劇</li></ul>	い健吹室	医者大阪	大将と大阪	ンし妥協する 滋賀県	がま にて 後今	横浜市 金
め丸く住み いと派閥劇 吹田市 なるネオンの灯	吹田市	医者大阪市	大将・大阪市大阪市	ンし妥協する 滋賀県 中	が捨てられる が捨てられる が捨てられる	市
め丸く住み いと派閥劇 いと派閥劇 にと派閥劇	吹田市西	大阪市 平	大将大阪市尾	ンし妥協する 滋賀県 中 宗	<ul><li>が捨てられる</li><li>が捨てられる</li></ul>	市金

ほんのりと酔えば本音が言えそうだ   原長の車より作しる事美頭	屋の干は) 申べら変鳥		なに騒ぐ星のまたたきほどの世を	東大阪市 今 岡 貞	あれこれとあって六十路の誕生日	先輩が胸をたたいた縄のれん	和泉市 横 山 捷	情報の開示も日本晴れならず	核競い破滅招いている狂気	泉佐野市 稲 葉	飲めば寝る頑固顔だと占われ	遠く行く曽孫成長早かれと	泉佐野市 大 工 静	ハイハイと返事はよいが重い尻	出来たこときっとこの世で治まろう	岸和田市 亀 井 皎	黄泉路へも情け無用の消費税	美術館錆びた頭に差す油	羽曳野市 山 本 た	辛抱が足らんと亡母の夢枕	妻の顔メイク何度も昼下がり	池田市 木 村 一
	忍、			人			也			洋			子			月			けし			笛
調子いい返事の時は気を付けるお作き合い甘辛両工使いわけ		大皿に妥協のお箸音をたて	土産菓子人の器量と味がする	鳥取市 宮	差別なくいただいてます消費税	老いるほど財布診察券が増え	兵庫県 谷	セクハラは女が決める好き嫌い	働き蜂誇りをもって過労死す	姫路市 服	跳ぶことになれて嵌まった水溜り	人形を抱いて少女は夢を盛る	尼崎市 的	赤トンボの赤は寂しい秋の色	老眼を思わず見張るキャミソール	尼崎市 松	ホームステイ仲にたつ娘が今日は留守	自転車に踊る下校の白い脛	尼崎市 尾	何宗か知らず西国巡礼に	遠花火ハイウェーから五 六ヶ所	三国市北
	島			脇			田			部			場			下			宫			野
	庸			道			多			_			+			比			弘、			哲
	_			子			美子			典			四郎			ろ志			治			男

仏送っ た百 H 紅

しきたりの

練習 車 米子 市 猪 森

ス

111

工

滞の先頭を行く 摺る孤児に幸祈る 出 崇市 加 藤 ス

終

戦を引

ズ コ

アル バ ラの花微笑み残 15 ムにオ ボ コの し散り急ぐ(ダイアナ妃 五歳なつかしむ 出雲市 一周忌 栂

111 " I

島 出根県

テイ草メダカに酸素あたえてる

顔見るための用こしらえる りに生きて元気です 槻 谷 仲

島 根 県 松 本 聖 子

ぱり老母に分り兼 ta 鳴 PH 市 八 木 芳

水

闘

病で沢

Ш

良

V

友が出

来た

現

語さっ

友の

年金を頼

常識 の僕を立ち止まらせる花 0 差 が断 絶 を深くす 3

があ 3

量 でや め る 晚 西勺 勇気 n 香 Ш 県

松

村

輝

夫

適

になり亡父の語りが身に沁 みる

高

知

県

百

田

幸

ことです。

棺の際、

枕元には

川

柳雑誌

が

忘 取 り立てて美点は れものしたことさえも忘れてる ない かい 艷 かい あ 1)

> 古日 記 読 80 ば 桜 の散る美学

> > 福

岡

県

本

忠

男

0 姑 0 涙 に嫁 も折

子育 ての 責負 b 2 母 ふえつづ H

本

県

增

H

乗

造花だと言われ見直す精巧さ

## 句

## 君 雲と話す心になり給え

子

昭和42年9月12日没 享年67 水谷

『川柳雑誌』

に出ていた句ですが

とさせられました。 ものを甘く見ていた時にこの句に出会って、 私 が川柳をはじめ 昭和十二年頃の て二、 = 年目 のことで、 Щ ギクリ 柳そ

から 句 勤 ら唯美川柳と名付けておられました。阪神電鉄に 集 めで私たち 鮎美さんは根っ たが、 『びをぷらす』発刊の際、 川柳雑誌』を去り『ふあうすと』に転じられ 晩年には の大鉄局とは仲良くさせて頂きました。 から JII の真善美を追求され 柳雑誌』 路郎先生とのもつれ 0 郷愁が深 る方で自 < お

納 められ 阿 萬 たとの 的

-81

# 麻生路郎の作品とその周辺

#### . . . 3 (94)

橘 高 董 風

### 三都柳壇の今昔

明治新川柳勃興時代 数氏ずつが執筆、 東都・京都・大阪の川柳界今昔を これはその抜粋 高木角戀坊

t) 坊が担当して始めたるが新川柳のスタートな その七月日本新聞紙上に新題柳樽を井上剣花 に旧派の狂句に呆れ果てた明治青年の企てが 明治三十六年日露戦争始まらんとする時代 其見本(此当時の句には面白いのがある) 相撲好き先づ飼猫をとって投げ なきにしもあらず高徳贈位なり 剣花坊

午後三時永田町から花が降り 魚仲間死ぬると蛸をよんで来る 忍ぶれど色に出にけり女学生 久良岐

花の雪此鉢巻の御不審か 令夫人乳母に来られて愚にかへり 福音の帰りサア下駄がないく 雪隠で唄をうたって叱られる 哥薩克は曲馬の一手やって逃げ 三面子 駄 六

放ち鳥鎌倉河岸の空を向き おへんことおへんと仲居腹を立て 飴ン坊

清盛を嵯峨野の奥で悪く云ひ

角戀坊

高須啞三味

ばかりである。僕などの観察では、東京柳界 は、或いは近頃より多い句会が昔にもあった 空前のことであると思う。句会に集る人数で 近頃の東京柳界に新人の殖えたことは驚く 近頃の東京柳界

ぞということは、昔には考えても見られない 昔の柳界は縁故者ばかりであったのが、今の ことであった。これを言葉を替えて言えば、

ことはある。併し、それが大半新人であるな

口にしている所で、それが柳界の大衆的にな ことが出来ないのは、句会当事者のひとしく 句会は昔の句会のように、参会者を予定する ているのは面白い現象と思う。従って近頃の れが却って古い川柳家を悲しませ寂しがらせ 今の柳界は大衆的になったわけなのだが、そ 柳界は他人同士であると言えよう。それだけ た何よりの証拠と僕は考えている

福田山雨楼

という風にはっきり止めを指す。 五客」と間の手を入れ、「五の一、五の止め」 オ」と段階を示し、「代って十秀」 ○選者の披講振りが技巧的に洗練されている。 例えば先ず最初に「前抜、十秀、 五客、 「続いて

れぬか。 名乗りは不明瞭なこと夥しい。聞いていてわ な声をしなくてもわかると言うつもりかも知 或いは一々賞品が届くのだからそんなに大き ーモーションではあるが一寸その比類がない。 のもある。第一声が小さく、不活潑である。 かるのは周囲にいる人々だけ、と言うような ○選者の披講ははっきりしているが、句主の そして仲々名披講が多い。周魚氏などスロ

○賞品には石鹼とか、 風呂敷で大きく包んで帰るものもある。 品等家庭でよろこばれるものが多い。中には 鉛筆とか、又は台所用

明治大正時代の京都柳界に就て

て句会を催し、時に一二の雑誌をも発行され 君などを中心に、時として当百君などを迎え たる事ありしも、殆んど京都川柳社に依て統 しものの如し。 されたるかの感ありて、無事大平を謳歌せ 明治末の京都柳界は藤本蘭華君、 詳くは僕の知る所に非ず。 石田静波

典的柳人の対照を暫らくは続くものなるべし。 新興勢力抬頭の因を為し、幾多の新団体の起 其他の新人続々として出現、 りと、僕も共に京都川柳会に出席するの事あ 今日に到る。今後の京都柳界もまた新興と古 伏するありて、最早、昔の如き統一を許さず 君と相知るを得て『紙衣』を発行す。其句風 り、これを機会に柳舟、六好、孤山其他の諸 都柳界も七分八裂するの動機となり『擬宝珠 や当時にありて新傾向と目され、これより京 大正七年に至り偶々剣花坊氏の入洛するあ 『紅椿』其他の

いる佐一郎氏の労を特筆したいと思います。

数年前の京都柳界、或は十年前の京都柳壇 大島無冠王

n

ものだと私は信じている。此度、私達が川柳 気を与え、以て往年の殷盛を再び為さしむる 現在選者級の力不足というのではないが、い とすれば、果して京都柳界これでいいのか。 してどうしたことか、殆ど私達級の選者のみ 三四名に過ぎないという始末、大家先輩連果 度の減り方、併も私達以上の先輩の出席は又 る。近頃句会を見ても通例三四十名を算す程 同人社を興したのも一つは斯ような処にも発 上し、量に於ては全く沈滞期にあるようであ い先輩の奮起こそ柳壇を新進作家を善導し活 に比較して、近頃の京都柳界は質に於ては向

を目前に控えて目覚しい活躍を始めています。 も力強い新作家をどんどん増やしているので で、若柳を御所車と改題した良之祐氏の一派 誘致に夢中になっている外は到って無風情態 いた無冠王氏が、今度同人社を創立して同人 ○自分等の川柳街が廃刊されても知らぬ顔で ○京都川柳社では今秋の二十五周年記念大会 盛大な川柳忌が催されるのは心強い事です。 過去帳も出来上って今年も又九月二十三日に ○京都が全国に誇り得る川柳聯盟では立派な 近頃の京都柳界 出 紫明

> ないが、大家先輩諸賢の奮起を甚だ僣越なが ら要望したいと思う。 している。現在の京都柳界に対し何の不満も

狂句と分離したのは明治三十八年頃である。 す迄もなく狂句時代で、真に川柳に目覚めて 六厘坊、 明治 明治大正時代の大阪柳界 狂句時代 ―と言っても先ず三十六年頃が最初で、 七厘坊の抬頭時代である。これは由 — 明治三十六七年頃 木村半文銭

大阪訛でしょう。

○個人として川柳聯盟の為に日夜努力されて ○其他に健全な川柳ビルがあります。 意義あるものになって来ました。

> 史であった。第一は狂句より川柳を分離し、 視野を開拓した。だから大阪に於ける明治、 して、川柳の中からまた別個の新しい文学的 識しかけた明治三十八年度は大阪川柳界にと 年と八年初期とは川柳狂句混沌時代たるを免 と見て大差はない。然し厳密に言えば三十七 大正年間は川柳界にとっては波瀾に富んだ歴 を続けて来たが大正十二年に新興川柳が出現 って祝福すべき紀元にあたる。この川柳時代 ぬ。その意味で狂句から川柳を文学的に認 川柳時代 — 同三十八年以降

水府

ず、 味線草、勉強の番傘、 る事が何よりの力強さであろう。 使命の下にそれぞれの分をつくして働いてい いていても、浴衣の柄はよう似た姿、話せば 涼み床几の四人男、おのおの違った方を向 大阪にも沢山の柳誌はあるが、その中に先 熱の川柳雑誌、働く昭和川柳、研究の三 この四つが川柳の重き

界事情のあらましが推測出来る。 神戸 の消息は無いが、 昭和十年の三都の柳

第二には川柳の既成意識より新興意識を分離

したのである。

# 沙湖沙

弓形 熟睡 仏壇 備忘録に私 0 0 な は水飲む の裏から監視され 0 隙 Vi 間 の名前 に電話し 三日 コッ プ決めてより 月 か 指人形 てみよう Va 満月へ れている てお

この道の端を歩けば逢う夕日 赦すの 黙ってリ 月に差し出す が下手でわたくしが ンゴ食べてる旅立つのだろうか 沈 tr

失言 試され 愚痴こぼしちゃった重たい受話器置 眼を閉じてそんな暇などあるやなし は 7 するまい朝顔は真っ白 V るのだ揺れが酷くなる

切 脇役の力不足ということに から り株に腰 が点になった午後から微熱する たくしを料理している笑い声 年月日やっと答えた夢の 僕も還 を下ろしただけのこと 0 て来た一 中 人

寝屋川

取 Ш

新家

1

林

空缶

7

1 玉二つが

口電

車

る

てお があ

迈

ĩ

の目

動かな

61

る

歌山 歌山 東京 松原 取 鈴木 佐藤 古 野 1/2 久保 17 和 げ

大宮市 尼崎市 西宮市 田林 13 根 春城 新井 牧渕 松本 池 公富喜 年代 朋子 7

藤井寺市 米子市 歌山 井寺 米子 歌山 牛尾 高田 政岡 太田 木本 林 美代子 日 扶美代 緑良 枝子 朱夏

疑って椅子には浅く

かけてみ

3

īī 季頴 公弘 7

けもの道歩 書架にある本はほとんど読んでい おしゃ 枕置く今日も極楽ひとりごと れには年齢がない冬帽 いた靴 れが破れ れている

な

Vi

見えて来た上がりへ少し

節ら

ねば

背走に私の影が離れ気味

結婚 小さな嘘は土を掘 b 他人の眼がいくつ有っても 母さんと呼んだ気がする流 まどろんで少し魂休ませ たくしに尻尾 をよいことにして家出 をきっ 0 て埋め 空いてい た痕 3

10 する

い握

手

和

3

響くも 感情 だけ \$ は 風の 0 0 みんな捨てたい 約 水に 部 7 逢う か 2雪月 隅 花 0 6 夜 椅 0 Vi

風呂敷 捨て去 明日という日へ ネクタイがしゃべれば妻が怒るだろう れば更に大きな風 の柔軟性を見習お 楽しい仕掛けして 点を生 まく

風鈴も君もよそよそしくなった 服る b

> 羽曳野 和歌山 西宮 八尾 唐津 米子 取 This 奥 Ш 徳 久 高 石 E 田 Ш 橋 いみつこ 2 夕花 0 富 湖 剣

枚方市 米子市 歌山 今治 砂川 弘前 三重 松江 H 濱 月原 大橋 村 尾 Щ 石 垣  $\mathbb{H}$ 崎 本 中 政良 良 宵 ツネ 花子 知 明 勤 男 畔

和 歌山 fr. 庫県 川上 遠 Ш 大輪 可 住

ダイエットはヤー 友達と同じ顔する化粧品

メタ運

動

do

n すると決

取 西原 茂理 艶子 高 代

和歌山 寝屋川 歌山 楠見 平松 和田 かすみ 美寿子 章子

横浜 米子 玉置 山根 菱田 80 4.

とき 遺豐 自同落 秋 天 逝 羯 踏 月忙 耳彦空 飛本 迷 他 最 鬼 古銀味 被岸 たと地 きなさ 見 由 言 か h 底 星 0 び物 1 後 籍 ग्रा 方 元草天与の 切り 3 に ft H 3 80 0 は 財 込 尾 に 0 か 鏡 ない がどうあろうとも 石 決 0 0 鼓 なれ b 布 塀 43 2 は 他 入 店 多 か たし ロラジ は 中 う 間 が で X V てごらんよ空 動 な るとみん 思えば 12 0 1+ 人 -で笑顔 ち どこ 往 手 ٤ 15 を 浙 つくと途 む お お な n 0 才 ラ干 さだめ 3 病気に 0 10 0 度唱えて消 ^ 守 12 12 こうの きれ オ 7 Ł 油 でと深 B H B 寸 たら 向 りさん 訳は 邪 か 4 断 A がよく見 本を撒 借 付 \$ 雪 帰 ない U 43 魔 0 1 とり だきな て降 深い協 崩 抜 歪 n 3 駄 端 な 7 せ 1 フ ち話 つさきこと 专 H Z 命 目 が かい かい たく で痛み分 D ていてう 17 、見える 腹 入 Us 63 よ す 青 起 2 秋 癖 ほ たきてい どとに 7 る お灯が から 0 0 10 0 いひとに まずく 対対さん 7 14 お 減 b か 6 鳴 Vi 3 3 和 和歌 歌山 H 京都 美祢 H 3/. 海 島 西宮 髙 爱 弘 米子 西 尾 取 Ш 取 节市 取 前 南 取 取 林 媛 前 宮 木 雲 県 市 市 市 市 ili 市 県 市 市 県 市 Щ 安平 福 福 植 1 H 吝 神 + 藤 H 榎 西 11 谷 H 藤 原 橋 治 根 原 治 井 たず はる 智 和 次 Ŧ. 10 ち 弘 恵子 英子 美子 歌 保州 加子 泰子 善信 公子 IE 杜 わ 良 か 3 坊 17 子 的 道 劦 瑩 お 2 文 3 恋文 大きさを 忘 本 萩 菜を バ 友 岸 の 近 消私 遅 砂 ま 風 力 7 風 付 棚 N 12 ち 0 < 糖 ば 船 ++ + 花 来 E 間 た E 1 葉 0 12 壶 たきの 色 眼 J' L 1 0 0 た か 辞 なら ラン +1 1) ま は 寂 抱 す 4 Si 7 0 31 0 0 不 T 藁 E 西 to ことは とっ 選ん 思議 E 10 かい T 書 蓋 0 6 しか < 薔 動 ルに H 花 自 は す 步 叛 影 を時 カに か から V n かい ta 薇 き に 地 To は 善 さに 少う で梨に 主 11 かい 分 6 V 女 ボ ば É が 0 な 成 生球 映 先 ち 連 スト 話 長 間 咲 先 浪 きてて は た 形 許 々忘 かい 実 かい 画 n 晚 人 ば 死 をぬかな に君乗 もう C 状 す n 華 L お 株 を L 完 を やさまら の行 ・に入り ず も居 言 てく 背 強 8 記 2 h E 期 n かい 2 光 0 名 < と思 なる させ 億 葉 n か 0 63 かり 出 せ 待 2 れている て赤 U するも 花 を す かい 0 n ŧ い越 ぜ 2 JEE. た える は to 地 女 また ま 避呼 とんへ な K Vi 敵 ŧ け吸 64 溜 0 かい まる は 41 3 な 富田 和 内長 羽曳 八王子 和 歌 大阪 徳島 吹 E 綾 奈良県 横 歌 J. 鳥取 堺 米子 尾 林 Ш 野 H III 野 浜 取 部 取 浜 槻 取 取 木市 県 市 īħī 市 市 辻 植 清 左 Ш Ш 木  $\mathbb{H}$ 和 石 藤 武 德 岩 中 播 志 鍛 谷 本 村 中 泉 谷 田 村  $\mathbf{H}$ 水 右 H 崎 # 本  $\mathbb{H}$ 原 戸 見早子

帆

雀 華 雄

潮

U 田

ろ子

泰

2

3

江

M

充

千千次正

き子代里男雄鶴

田

さち

美

恵子

芳

郎

美代

Ŧ

喜

鐘

希久

あ

きら

透太

身辺 店名 三角 今日 うさん 宝 旅 最 怖 羽 b 声 人 1 を抜 収後まで たく " を遣う会話 Vi 化 か 縛 き 1 役 石 ŧ やを逃 万点に立 U か コト のは おそく けてく 息 整 1 も x 0 知 箱 0 秋 臭そう n n 理 変 17 L # D 頃 (掃きひろ) を不 た売 だけ 3 せ 3 私 を n 0 b 油 0 一愛と ねば 出 た 3 風 0 欲 飛 b n 宿 簡 野 断 82 と脳 单 る仏か 無し 0 た 0 0 火 单 良 かい 10 召さるな かい 3: 思議と言 てし 1 -さに遅 方向 種 猫 いう 顔 L 私 x 17 な T がかか 伝を見る をため 加に会う な 思う とば 大に げ を かい 情 欲 種 かが恐ろ 出 がわ 深追 しまっ 風 よさる て子 雲 名 0 か 10 なる を信 が息 0 É \$ 遠 n 0 0 梯 6 L になる たとき から た鬼 まで 粥 子 1 b 谱 7 花 取 行 17 0 Va き止 を炊く L ギ す じよう ば n V Vi 0 てしまう 歌 か n 41 ル n n

> 曳野 津 hi 前 藉 幸 次 美

大阪 敷 井 神 碳 富子

米子市 唐津 大阪 Ш 澤 Ш 井 智 勝視 和 加 柳 重 惠 子

大阪市 津 浜 市  $\mathbf{H}$ 渡 さと美 虹汀 羊子

都

Th

都

求芽

尼崎市 犬山 歌山 市 市 長浜 福井 早 JII 桂香 盛夫

寝屋 大阪 弘 Ď Ш 方市 浜市 前市 市 海 後 高 間 野 満 あ 池 津子 早岳澄洋智水子 8 Sh

部

背筋を伸

ば

米子市

村

富

節 美子

スずインブ

玉 如 鉛 筆 0 謀 母 0 0 意前 地

歌

忍、

71

相 1

とじ + から 溢 V n ンジと保身 7 きな 何 処 ~ 1 こころ ジをま をけ 0 置 す た あ 0 きどころ

今治市

八尾 大阪

決

断

をし

しよう

か

空も

晴

n

てき

鳥取県

H

大阪

ライ 落 言 ちる 43 15 か かだけ たで ル が 落 胡 嫌 ち 椒 味 た谷 0 なっ 役 をし 間 7 12 てく 水 10 た b n 3 Un

落ち着  $\overline{9}$ 屋 生も煮 7 墓 豆 地 屋 に 专 来る 咲 ききる 町 曼 住の 華

みぞれ そんなこと言うては 道 本 当 はず がこ 0 疃 を運 遊 ほう 頃 び は 肥 35 n 4 秋 れんそうを à 過ぎて 0 にす 0 たな 3 Vi 黙ら 通 とだ n 雨 せ 3

大阪府 阪 前 取県 相 年 波

のも備忘録に書き込まなかったせいかあらぬ方向に走ったり妙に傾いたり、 そうです。とても れは大きな調べです " 絶対沈むことになるでしょう。 V 身を投入し高まっ おさんの た方との両方の動揺 することで 静 行 かな沼の感じです。 間 0 ね 三 小さな てゆく が伝 H 隙 かと、 プロ た。 月 間 H っかりと我を忘れて つっかりと我を忘れて います。 うっかりとれています。 ~ b かい 何気な 深く E ŋ 80 を踏み外しかける の白 Vi 語溺 13 1) n がします。 い口から、

たる流

圭子さん自:

電話したら

む

池しげ

福 栗 村 111 淡 立.  $\mathbb{H}$ 島 Ŀ 久 本 一多哥 ミッ子 保 きみ 久美子 たも WD 諷 云児 n 登美 信 春子 睦 勇 子花 子. 太 子 7 曲

大阪

取市

倉吉市 高槻市

枚方市

#### 水 煙 抄

-10月号から

老池

海

洋

億光年ちいさいちさいちさい吾

宇宙とは何か人間とは何かを問いかけられ リフレーンの効いた格調高い句 故名原 純 子

見慣れない靴があるなと靴を脱ぎ

がらそっと靴を脱ぐ。ひょっとしたら…。 留守中の突然の客。なんか胸騒ぎを覚えな 和泉見早子

叩く気になれぬのろまなゴキブリだ 徳 山 みつこ

哀愁のある句 ブリは私かも知れぬ。ユーモラスな句ですが 「やれ打つな」の句を思わせる。このゴキ

職安で顔をあわせる元上司

安で顔をあわせる。溜飲は下がるが肝心のい 人員整理に遭ったか、肩叩きした上司も職

い職がない。川柳味のある句

## 自慢する話もなくて芋を煮る

芋ひとつ煮るにも、 誰にも負けぬ主婦とし 忍、

ての自負を覗かせる。 検診は旅を終ってから受ける

老人心理を穿っている。 行けないかも。たとえ行けても気にかかる。 検診を受ければどこか引っかかり、旅行に 山 本 為佐子

故郷のトマト トマトの味がする

り。飢えてた頃へと思いの巡る句 故郷の食べ物はあれこれ懐かしいものばか 井上つよし

何も言わないでわたしの持ち時間

人間関係に疲れこんな時間を持ちたいのも 黒田 茂代

人間。ひとりでおれば寂しくなるのも人間 やり切れぬ不安無心にレース編む 上 地 登美代

スがよく効いている。

持ちがうまく表現された女性らしい句。レー

手に付かぬがじっとしておれない不安な気

平成の家風は嫁が持ってくる

が娘もそうするはず。 家風家風と言わずに嫁に任せましょう。わ

# 台風の中よくよくの事らしい

足止めに会うことも、 何か悪い子感。

まさか。いろいろと想像させられる。 いわくありそう女ひとりの大ジョッキ

吉村 さち子

い。周囲の視線まで浮かびそうな句 失恋でもしたか。迂闊には声も掛けられな

憎いけどやはりあなたをまだ愛し

ように。或いは男が単純すぎるかも。 女心は複雑。自己矛盾を楽しんでいるかの

饒舌な影がだんだん長くなる

立ち話もいい加減にしなさいと、つるべ落

他人のため流す涙を貯めている

としの秋の日に叱られそうな写生句。

涙をあげる涙をもらう、いい仲間に恵まれ

そうな温い句 花屋でもわからん花が売れている

運転台どっさり吊す守り札

崎黄

紅

孫たちと話が合わぬ日本史 3 村 わきみ Œ 雄

## 女性コーナー

# 前者のさ

#### 西 出 楓 楽 選

L ない 葉たん 男と退 屈 と持ってる他 人さま

手い首い 大声になると勝負が見えてくる 八子 首足: 起 出 き目 たどる道 首 逢 は忘 61 Ħ. 元気でいるか振ってみる 心れ上手になりました追へ小さなルビを振る 60 の鈴 が鳴っ てい 1: る

母 嫌 待 やふやに言 0 な人自 宵草きみ待つ舞台し 日に 分の 届 いた花を亡夫に分 5 見る目かえてみる て一線引いて つらえて

鉛

筆

本

削って心ととのえる

茄 を拭く 子漬 1+ 男の の色の 貌 がに 嘘は 深 ぶさの母 0 あ

お

<

やさしさに温度差があり 流 と心 かそうと水や は が 突然 别 期一 17 'n 会 歩きだい 本 すぎて 0 の電 かたち 秋 13 たら

0

中

吹

田

Ш

本希

ス

-8あ

たりから見る甲

子

囊

飛んで帰らぬうちの

竹とん

ぼ

歌 rly 武 村さち 久美

米子市 鳥取 福 出 H H 登美 枝

和歌山 藤井寺市 大阪市 今治 西宮 本市 松 福 岡 本 谷 H 干 たず子 恵 寿代 清美 桂香 俊子

井寺 堺 熊 111 Ш 高 Ш  $\mathbf{H}$ 多賀子

E

ンティ

1

n

0

中に

陽

かい

昇

る

日

は

病

人の 0

顔で

行

V

甘 気が 10 しあう を育て子 だてにも 声で神におす 0 けば辛 友は空気のような人 育 てら 時 がりしてみよう ほどよく 1 10 0 ち 0 뒓

b 助 腹 ダブルパンチ神は私を試 たく 17 立ち紛れ 舟 出 L の無題 してあなたと揺れてい 大根 0 おろし山 ドラマまだつづ 盛 してる りに 3

台風

身構

えてい

る風見鶏

その 国会の エー 枚のカルテに広がっ 先は言うまい絆ほ ゲ海に沈 椅子で不眠が治 めて欲し てゆくも 0 りそう い骨であ n だす る \$

怒るのも早いが忘れるの 暮 ヒー 夢で会う 妥協する位置 n なず 0-人が居るあ 葦で悩みは尽きませ t 母 が時代を背負 街でポ to たしより若くなり にまあるくなる子 たたたか スト は夢を持 Vi 63 も早 窓 夏を去る 明 0 猫

か V 腐され 0 てあげよう喜 腐にネギ茗 寿 だ to 0

歌

歌 西宫 横浜 Ш 尾 大内 Ŀ 保 石谷美恵子 田 地登美代 П H 本 本 いわる 2 絹 0 朝 凡

富田林 歌山 鳥 岡 米子 圖 取 Ш Ш क्त 市 市 藤田 矢内 大石あすなろ 宮本 古久保和 植 石垣 HH 一寿恵子 かりん 花子 子

東大阪 尼崎 歌山 弘前 市 内田 佐治 Ш 村  $\Box$ 三千 美也 千 賢 加 泰 7 子

横浜 奈良 面 島 П 原 セッ子 良

枚方市 横浜 本間 鷓 満津 ますみ

捨て 畳紙 投げ どの 生きも ただ今と表札 故 横 喪 喪 ボ 試 才 力 酸 初 1 文字 老の 郷 着 0 0 " とけ 先は 猫が 女に トし ムー を 出 0 室 雨 ŋ ル を 花 帯をほどい 18 合う 半分 1 泥 の紀行 i 1 手な私 n 開くときも L 降 C た脚に 申し 失意 生か 付け 馴染め ち 82 17 K 何より 月 かず た 6 善 道 7 酔 並 揺 悩 す うて まる みは ま 10 1 に 0 L たままお な n U 秋 を 步 0 言う花 先に 方に 靴 て母 る とり 1 プ せ 弱 \$2 事 て女強くなる 風 喘 17 L 亡母 日 0) 12 いもの う きを 10 候 0 L ほ 3 0 3 は まとい 向 棚 ta が気はも 嘘 踊 ご苦労さん 0 紅 どには走ら n 中 か は 彼岸 青 裾 を引 言 向 < n 0 に 追 出 分け か こえず かぬ 言 小 病 出 磁 か V あ つく 0 花 3 す 壶 6 引 た h 3 ことだ n て 向 め 狙 出 n 3 き 1 わ ず 3 n 3

> 歌 江 JII

取 西 艶子 畔

米子 澤 H 春

歌山 浜 県 坂 秋 東 元 久 和 代 和可

栗

田

寝屋

田

とし

子

大阪 西宫 牧 辻 津 渕 JII 富喜 慶子 柳伸 子

す

I

プ

D

0

新

所帯

歌

大阪狭山 大阪 歌山 鳥取 米子 U 111 伊 ±: 中 宮 久 睦子 WD ŧ

1 弘前 今治 取 Ш 西 JII とよ子 ひで まし 保睦 和

げ

カ

ブを投げる女なり

歌 兵

Ш

X

4

庫

や罪 2 + 犬に 羽拭 裁 つけ がされ まっ 拭 る一人きり < 出 ど浮 た 度 き上

1)

貝

池

H

寿

思 診 付 11 出 0 7 溜 7 を 80 待 7 る 0 てる落 服 は 捨 てら n

人 今 あ 朝 る 畜 温 無 0 2 害 形 見 急に 0 尿 鳥 母 コー 0 かい 裁 笑わ E ち 1 鋏 ++ 欲 3

朴 世 檎 界 飴 もう 7 欲 しがら 2 生

お 42 1111 L 10 > 土 だけ 産 あ と遊ん n 年が とう

43 · で買 仲 0 た 馬 券 かい 大穴 がる

寝屋 歌山 Ш Ш 取 阪 野 市 4 井 坂 町 1 和 Ė 松 田 H 塩 111  $\mathbb{H}$ かすみ すみ 和 智 H 美 歌 寿 達 加 出 Ŧi. n 恵

幼

八尾 松江 iti 安食 高杉 Ш 友子 千步

する道 才 とは上手に忘れるのが、 てのほかである。 師じゃ の言 た。 轍を踏 美さん め い言 を親 つけ 1+ 葉が まれてい ないの 1葉を縦 n 三高と「 が先回 られ しでも どこの句を読 まないよう必要なところは頭に残 V 0 か 句 久美子さん る ないと思えてきた。 の句を読むと、若い女性だからそれは贅沢だと、 K 横無尽に駆使できるとい しか 助け ŋ 空しいものかを感じる。 富湖さんの して案内 おもしろさ」を求め 限の悲しみやつらさに直面 たいという親 し、せめて「 立直り L したり、 若い 0 句 秘訣であろう。 失敗 碧さんの 一近頃の 女性の 心がよく伝 小さなル 8 勝手に変更する う、 めるとい 挫折のあ 45 の要求がある ささか 女性は、 当 ビを振 句 事 子子 う。 者でな した時、 b 情 不 忘 の機 とは、二 0 る てくる。 ながち 落語 れるべきこ 0 快に思って 夫となる人 0 行こうと V ことに 家や漫 なぐさ はも から、 が たく 贅

#### 浜 澄 子

谷

谷川の河鹿の声が涼誘う Uターン待って谷間の灯は消さず やまびこが還る谷間の遭 いつか谷になってた倦怠期 脈の谷が育てて来た緑 長 選

久仁於 あらた 寿恵子 俊 強 谷底から今に見ろよと蛙の子 谷底を見れば昔の僕が居た 登り詰め谷の深さをつい忘れ 谷底にワラー本が落ちている 育児書をムーミン谷で借りて来る 谷底できれいな星にあこがれる

的良 谷あいの秘湯尋ねる登山靴 深山の谷水虚勢など張らぬ 太郎冠者谷で知らない処はない 造成の谷から谺かえらない ダーの勇気谷から引き返す

帆虹啓

雄

指笛へ大直線のまりとなる

洋

潮正大鉄

楢山の手前の谷で躊躇する

大峰の谷間で本音吐かされる 不器用に生きて谷間を愛してる 逆境の谷底で待つ春の風 谷底と思う不況が長過ぎる 谷川に手足浸して子に戻る 谷の水汲んでキャンプのお茶が沸き

杜緑

生きたくて死にたくて見る谷の底 谷もありましたと受賞式の顔

谷に立ちゆっくり日々の科洗う 神さまの声だと思う谷の風

政岡日枝子

よく弾むまりは女の化身かも 運動会まりに隠れた一年生

白いまり弾んで月になりました

岳

水

弾まないまりを温めて出番待つ

美み高文大

子ね栄時輪

親離れやがて来るだろ青い毬

不

IF.

渓谷の名水という水が売れ 濁流に弄ばれた谷の岩 谷川で冷えたビールに喉が鳴る 若人の山彦 谷を喜ばす 谷を越え通った校舎閉ざされる 気楽さもあって谷から出られない 這い上がる勇気を試す谷の底 生と死の谷間で揺らぐ脳死論

風 慕

花

美

人生の谷間で知った真の友 白百合も谷間の恋も消えたダム

> 谷底でする合掌に欲はない 深い谷夢が一ぱい落ちている ビルの谷間で酸欠になる百合の花 千仞の谷で気付いた父の愛 渓谷美借景にしてプロポーズ 行政の谷間で吐息する福祉 渓谷の吊り橋孫が動けない

せせらぎが好きでふる里捨てられぬ 扶美代 しげお 良 郎 子信治

戸

ツ ネ 選

IE. はずまないまりは出番に遠くいる てんまりは寺の屋根から降りてくる 這い這いの子が 追っかけている手まり ま

谷底の呻き届かぬ永田町

色褪せた手毬にふっと亡母がいる まりのように花マルの孫跳ねて来る 夢破れ母の港に着くまり藻

柳五郎

まりつきが上手な女系家族です 弾みすぎ毬は迷路を抜けられぬ 不発弾抱えたまりの孤独死で

まり蹴りも上手になると飯が食え よく弾むまりで脱線ばかりする 親子合作手まり仕上げる夏休み 毛糸玉 三毛に楽しい赤いまり 路地の詩忘れてまりは弾めない

てまりころころ越せない塀が恨めし よく弾むまりで時々帰らない 羊宵銀 上子 子明波

と由鉄俊

よしみ

n

90

路 手まり唄ふる里が見え 母が見え 弾まないまりと残暑の中にいる いびつさを丸めまるめてまりにする 落ちこぼれたまりは屋台のラーメン屋 どうにでも貴方次第で弾む球 日によっていろいろ変わるまりになる 子が返す無言のまりを摑みとる 殿様はまりと女が好きらしい 毬のように弾んで嫁にゆく娘 親離れしたのかまりがよく走り しみじみと老母が歌う手まり歌 よく弾むまりの芯には彼がいる

まりつきのリズムに合わせて猫の首 高美代子 シマ子 美也子 可

撥ねて影の女の手に移る 一母の手まりはあたたかい たもつ

投げ

まり

螢

的

てのひらのまりから貰う阿弥陀くじ 手拍子に乗り百歳の手毬唄 播本 充子

末席のつぶやく声が的を射る

あずま

つぶやきの余生を友に万歩計

よしえ

さち子 和叭

重

鉄のマリでも弾むか

西 出 洛 酔

まり二つ抱えて少女脱皮する 晩学の夫婦のまりがよく弾む 弾まないまりでも親はみてくれる 長寿国祖母百歳の手まり唄 親離れしてから弾みだす手球 手づくりのまりに亡母は生きている

強

子 花 旋

あらた ミツ子 ますみ 伊津志 圭一郎 墓 求愛のつぶやきを待つイヤリング 色即是空何度つぶやく仏間の灯 執拗につぶやく闇が眠らせず 独り言聞こえてほしい時もある つぶやきは銚子の底に溜めてある つぶやいてばかりで何の策もなし つぶやいていては反核届かない 石につぶやきだけの水かける やきに似た黄昏の耳鳴りよ

郎

段取りをつぶやいている朝の靴 留守番が独りつぶやく昼ごはん 立ち上がるコスモス少しつぶやいた つぶやいてつぶやいている影法師 つぶやきを溶かすおでんの縄のれ つぶやいてどうにもならぬ老いの日 h 17

沢蟹のつぶやき光る泡になる 点滴のつぶやき明日を励まされ 秋風かうすい財布がつぶやいた どうせなら大きな声で言いなはれ 少年のつぶやき母にとどかない 窓際の席へつぶやき掃き寄せる

あやめ

洋

選

あずき

信

よしみ 帳尻の小声は悲鳴かもしれぬ 残り火へ魔女の化身がつぶやいた 反逆の矢じりを磨く独り言 つぶやきは老女のうたう子守唄もっと胸張れとつぶやく昼の月 つぶやいて破片拾っている余生 泡一つ金魚のつぶやき聞きもらす つぶやきが遠吠えになる敗者の譜 風紋は風のつぶやきかも知れぬ つぶやきを静かに聞いているグラス つぶやきを拾うマイクに罪はない 木も石も稲もつぶやく暑い夏 つぶやきを九官鳥に盗まれる つぶやきの一人芝居に幕がない やきを拾い集めて母の遺書

和歌子子 とよ子 さち子 ポケットの底につぶやき溜めている 野仏のつぶやきを聞く赤とんぼ つぶやきを悲しく聞いた負けいくさ つぶやいてひとりの部屋の広さ知る カーテンの陰でつぶやき着替えてる 重 京 典 子

有難うと最期の床でつぶやこう つぶやきを拾ってくれる母 つぶやいた風の中から秋になる 0) 山廣あらた

正佳可寿芳雄 清岳権玉充武善 雲住美郎々芳水悟恵子史 91

久仁於

とし子

# 和步数室

超 一 バーゲン

日だ

__;

まれる思いがする。 現一つをとっても語彙の貧しさに身をさいなが苦手だった者にとって、川柳の添削の難しが苦手だった者にとって、川柳の添削の難しが苦手だった者にとって、川柳の添削の難しさ。私のように若い時から国語

削にハタと困らされる。ともあれ自らの使命 削にハタと困らされる。ともあれ自らの使命 のようにこの作者は何をいわんとしておられ のようにこの作者は何をいわんとしておられ のようにこの作者の心底が見えない時その添 るのか、その作者の心底が見えない時その添 は、しかも原作に展がりを与える表現 のようにこの作者は何をいわんとしておられ のようにこの作者の心底が見えない時その添 るのか、その作者の心底が見えない時その添

○バーゲン

は果さなければならないと頑張る次第

▽バーゲンのチラシどっさり主婦の朝感情のこもった表現が欲しかった。

○バーゲンで買った服とは人知らぬ 義 男のバーゲンで買った服とは人知らぬ 意 と 応れない財布掏られたくやしさを ト キ 原句はバーゲンに限らない情況もあること 原句はバーゲンに限らない情況もあること 原句はバーゲンに限らない情況もあること を忘れないで欲しい。

▽目星つけた服のバーゲン待っている ○目星つけバーゲンセール待機する 省 子 の目星つけバーゲンセール待機する 省 子

○見栄を張りバーゲン売場敬遠し 宗明○バーゲンのチラシに迷う夕仕度○バーゲンのチラシに迷う夕仕度○バーゲンのチラシの海に迷い込む 忠男

途中下車と万歩計はそぐわない。 ○バーゲンに途中下車する万歩計 徳 三 ▽バーゲンの値札横目に見栄を張り

売場の三音字が無駄

○バーゲンに目の色変わる市場籠
○買物籠も目の色変える特売場
四三郎
・上七下六の破調句。中七の表現はいい。

○難癖をつけてバーゲンまだ値切り○買って来たバーゲン品に難がある 栄 翁

○バーゲンに出かけて隣と鉢合わせ てる子 中八のてが不要。一字が足を引っ張った。 中八のでが不要。一字が足を引っ張った。 言葉を省く。日出男さんの句をご参考に。 言葉を省く。日出男さんの句をご参考に。 上七の表現が難。句意はやや異るが

令夫人も面白いが女でいいのでは。売場は○令夫人バーゲン売場で素顔見せ 靖 雄○令夫人バーゲン売場で素顔見せ 靖 雄ペガランドのバーゲンを待つ若いマママブランドのバーゲンをもつ若いママ

○バーゲンの時間忘れて疲れ出る○バーゲンに女の素顔ふと覗き冗長な表現といえる。一次では、売場は一次でいいのでは、売場は一次でいいのでは、売場は

下五が安易に流れている。 下五が安易に流れている。 下五が安易に流れている質いあさり マバーゲンで人の心が見透かされ ミツオ

▽バーゲンを競う折り込み鉢合せ○大バーゲンスーパー同志が鉢合せ▽バーゲンに人の心がかいま見え

乗

▽宝石のセール手が出ぬ0の数 ○バーゲンの宝石買えぬ0の数 ▽バーゲンにつられてゆらぐ買い控え 〇バーゲンの安値に又も心ゆれ ▽赤札になってもブランド手が出せず ○縁のない高級品の赤い札 〇バーゲンの同じ服にすれちがい 川信 ▽バーゲンがいっぱい詰まるカレンダー ○バーゲンがいっぱい詰まてるカレンダー 一 ▽バーゲンも不況の波にさからえず ○バーゲンや不況の夏だ見送ろう ▽ボーナスもバーゲンされた社の不況 ○ボーナスもバーゲンされて五割引 ▽バーゲンで揃えこの冬大丈夫 〇来る冬をバーゲンで揃え待っている 単なる表現の差異です。着想はいい。 バーゲンと安値は同義語 高級品で六音字。他に言葉がないか探す。 語呂の関係でおんなじ(平仮名表現) る。中七になるよう推敲されること。 詰まってるが正しい。この場合九音字とな 名無しの権兵衛はいけません。折角の作品 ればよかったのでは だから投句までに再度読み返すこと。 見付けはすばらしい。下五に一考を。 羊 氏名不詳 勝 路 みやこ にす 子 典 久 子 ▽バーゲンもきかない年となる娘 ○バーゲンの魅力わたしの途中下車 ○期限切れバーゲン出来ぬ歳過ぎて ▽バーゲンのように若い命絶ち ▽バーゲンでやりくりしてる年金者 ▽地下鉄で会ったセールの同じ服 ○若いのにバーゲンしている命すら 〇バーゲンと縁切りしてる年金者 ▽バーゲンが女心をよくつかみ ○バーゲンが女つかんで放さない ▽バーゲンの魅力にまけた途中下車 ○地下鉄でバーゲンセールの同じ柄 ▽バーゲンへ女の足は遠出する ○反省せずバーゲン帰りタクシーのる ○バーゲンの足はデパートへ吸い込まれ バーゲンのチラシ大きく丸をつけ 年金生活はプロパー商品に手を出すゆとり 摑んで放さないは重複のきらいがある。 二句を足して二で割ると 風刺と着眼点は買う。あとは表現の問題 がないのが普通。だから中七を代えた。 バーゲンもセールも同義語でどちらか省く。 期限切れ…歳過ぎてが同じ性格の言葉 (山雅 茂 美也子 登 トシエ トシエ 捷 代 夫 子 子 情 私の句 バーゲンに女の恐さ逞ましさ (下五の表現でいただいた)

バーゲンの掘り出し物をプレゼント バーゲンのちらし散らばる事故のあと バーゲンの服とも知らぬ友が褒め バーゲンの服に合せてダイエット バーゲンでない肉を買う給料日 迷ううち売れてしまった特価品 バーゲンのちらしに包むミニトマト ーゲンの札にも不況風が吹き バーゲンでもよい物はよい) 静 セツ子 よしこ つよし 7

バーゲンでも背の曲った服はない (面白い着想) (よく頑張られました)

ブランドも赤札付けてさらされる バーゲンになれて財布の口を閉じ 巨八重子 禮 子

バーゲンをメモする妻のカレンダー (よく観察しておられる) 日出男

ユニークな嘘バーゲンに売れ残る 7 +

商魂を見抜く主婦の目を…)

円

女

バーゲンで街の灯りがひとつ消え (バーゲン心理を巧みに)

(少し淋しいがいい句だ) 方

子

バーゲンにされたやり手の二度の職

# **4**回

[ii]

#### 0 総 会

長が同人・誌友の拡大報告、岩佐ダン吉会計 の後、 川柳塔まつり等の定例行事を行うほか、平成 平成10年度の事業計画案について、 告を行った。 部長が決算報告、 業経過報告を行った。次いで西出楓楽同人部 主幹の司会で開会、橘高薫風主幹のあいさつ ら役員・同人110名が出席して宮口笛生副 王寺区のアウィーナ大阪で開催された。 続いて質疑応答をはさんで前たもつ氏から はじめに平成10年度同人総会が午前10時か 第4回川柳塔まつりは10月7日、 前たもつ企画事業部長が平成9年度の事 河内天笑理事長を議長として議事に入 栞忌句会、 榎本吐来会計監査が監査報 路郎忌句会、 役員会、 川柳塔碑 大阪市天

> 長が閉会のあいさつを行った。 案を満場の拍手で採択し、奥田みつ子編集部 発表があり、 石原靖巳・春城武庫坊の各氏から質疑・意見 任と新役員選出の人事を提案した。 検討することを述べ、岩佐ダン吉氏から平成 を設けること、 これらの報告・提案をめぐって田中正坊・ 担当常任理事の答弁の後、 板尾岳人副理事長から役員 カルチャーテキストづくりを 全議

> > 同

同 百

## 事業経過報告

9年10月3日 11月2日 10月12日 第3回川柳塔まつり(同人総 川柳塔唐津支部結成15周年記 久家代仕男一周忌追悼川柳大 会)をアウィーナ大阪で開催 念句会を開催 会を開催 会・6 賞表彰記念句会・懇親 (出雲市 (唐津市

年1月 11月14日 4 日 川柳塔おっぱこ吟社300 記念川柳大会開催(白鳥町 川柳塔碑合祀法要 合祀者17名 (高野 Ш

誌友拡大計画について、

示すとともに、新たに

一仲間づくり」委員会 仲間つくりの目標を

10

開催すること、二賞選考方法を検討する委員

11年3月20日、

川柳塔創立75周年記念大会を

ii

会を設けることを提案、西出楓楽氏から同人・

5月7日 3月5日 2月 1月 1月7日 月 24 17 6 1日 H H H 川柳塔社同人名簿を発行 が発足 本社句会の会場をアウィーナ 栞忌本社句会を開催 川柳塔850号記念川柳大会 第1回役員会を開催 仲間づくりプロジェクトチー 岬川柳会が公開講座を開催 をアウィーナ大阪で開催 についてのお願い」を発送 ムを結成。 「かわはら川柳会」 「同人・誌友拡大

川柳玉島社創立40周年記念大 路郎忌本社句会を開催 会を開催(倉敷市 94

可 7月 7月 7月7 発足 川柳会「梨花」(鳥取県) 選者交替「水煙抄」河内天笑 「茴香の花」西出楓楽 かい

9 月 30 H 竹原川柳会が「川柳たけはら」 500号突破記念誌上川柳大

同

役員交流紙「こんにちは川 塔です」を創刊(季刊 会を開催

同

9月

川柳塔6賞受賞(平成9年10月号に発表 〈受賞・表彰〉 本社句会月間賞永久保持

「第3回オール川柳大賞」受賞

吉岡

島諷云児 高槻市教育委員会教育功労表彰 東大阪市民文化連盟・功労表彰

### 〈句集刊行〉

新家 椎江 同同同 句 路郎 清芳川柳句集『夫婦道』 完司川柳集3『平成十年』 『城北川 『自選句集』第6号 遺句集『雪歌』 無限』川柳玉島社創立40周年句 『川柳とは何か』 ローズ』創立3周年記念句集 柳』第6集(城北 復刻版 JII 柳 会 集

松下たつみ 静江 子 平成10年2月20日 5 月 18 日 5月2日

〈物故者〉

(8名

平成9年12月12

H

笠原 福崎しげお 児島与呂志 吸江 菁風 同同同同同同 7 月 11 8 月 12 7月7日 6月28日 H

## (72 名

浜市) 早川盛夫(愛知県)神原文(堺市) 村上ミツ子・篠原いつふみ・神原まさと(八 (鳥取市) 坮寛子 鶴田哲郎 (大阪市) 富坂志重 (吹田市) Ш 根めぐみ・楠見章子 (大阪市) 川本畔・佐野木み 菊地政勝・後藤早智 (鳥取県) (岡山県) 村上剛治・ 石上 Щ

> 本丸( 次郎 野下之男 子(八王子市) ロセツ子( 曳野市)福田登美・近藤佳子・岸本宏章・岸 井上松煙・緒方美津子・井上信子(西宮市 加島由一(河内長野市) 小枝ふさゑ (弘前市 妻谷重三 (寝屋川市) 上田宣子 (鳥取市) 出 市) 角野仁清 井上次郎(富田林市) 山田かよこ (東大阪市 え・安食友子・ (大阪市) 児玉蛙 (大東市) 夫(鳥取市)神保坊太郎 高槻市) 水田 (米子市) 近藤春恵・村上信子 (鳥取県) (守口市) 杉澤汀 (大阪市) 三好専平 (羽 藤田泰子(富田林市)山中康子(倉吉市 (岸和田市) 津村志華子 (大阪市) 石森利 (兵庫県)國森武子・吉田孔美子・徳岡 (鳥取県) 谷口義 (東大阪市) 岡本久峰 権代康女・山 (鳥取市) (吹田市)加藤基・原苑子・堂免路 (箕面市) 米澤俶子 (大阪府) 宮木 (寝屋川市) 鈴木トヨ子 的場十四郎 浦辺静江 原みさを(鳥取県)大谷幸 本正光 (芦屋 山川日出子(交野 (松江· (香川県) (大阪市 (鳥取県) 本吉宗 市)福士慕情 寺川弘一 播本充 冨山檳

## 役

常任理 事 板東倫子・三宅保州 住谷石舟 籠島恵子・ 大内朝子・ 寺川弘 中原比呂志・米田恭昌 ·長浜澄子 ·山海友熙

極高薫風

110名

杉澤汀·菱田満秋·的場十四郎 澤田千春 榎本吐来・寺田甚一・春城武庫坊・加島由 吉村一風・福本英子・板東倫子・北岡波留吉 村上剛治・村上ミツ子・坊農柳弘・高田星子 園山多賀子・福原悦子・妻谷重三・上田佳秋 川本畔・舟木与根一・海老池洋・神原まさと 岩佐ダン吉・八十田洞庵・原苑子・ 近藤佳子・岸本宏章・原みさを・ 阿萬萬的 金井文秋 山口美穂・黒川紫香・宮口笛生・長谷川呂万 山本玉恵・岸本孝子・北山悟郎・小池 加藤基・濱野奇童・矢内寿恵子・川島諷云児 堀端三男・塩満敏・三宅保州・大石あすなろ 高橋夕花・吉川寿美・楊井二南・安藤寿美子 奥田みつ子・西口いわゑ・岸桂子・小西雄々 福岡雅楓・西田 高須賀金太·石森利昭 籾山隆盛・高田美代子・ 冨山ルイ子・高杉鬼遊 板尾岳人・山本希久子・ 宮崎シマ子・山本義子・宮西弥生 高杉干歩·嵯峨根保子·大内朝子·木本朱夏 司住 人総会出席者〉木村あきら・ ·八木千代·田辺灸六 ·桜井千秀·田中亜弥 ・田中正坊・川端一歩・川久保睦子 ·三好専平·西原艷子·小林由多香 ・中原諷人・中原汲香・岩崎みさ江 ・岡本久峰・池森子・ 篠原いつふみ 「柳宏子・堂免路子 . . 石原靖巳 米澤俶子 河内天笑 河内月子 . 山海友配 ・仁部 神夏磯典子 . 恒松叮紅 都倉求芽 福田満州 しげお

# 各賞表彰・記念句会

句会代表から花束が贈られた。 笛生副主幹から賞状と楯が授与され、 同準賞・路郎賞と同準賞の受賞者10名に宮口 路賞・茴香の花賞・渺湖賞に続き川柳塔賞と 板尾岳人副理事長の司会で各地柳壇賞・一 次いで平成十年度各賞表彰式へと移る。 の部は一時から新同人の紹介にはじま

お話は弓削川柳社の濱野奇童氏。

と子を思ひ」の句を看板に立て、その下に川 は久米南町のマスコット)を10月1日から毎 岡山からの川柳列車カッピー号(カッピーと ことを考え、 に役立っている。近年行政とタイアップする 人の関心を呼び、 の句の句碑が建っている。 柳の里と書いてある。また弓削の駅前にもこ いに麻生路郎師の作品「俺に似よ俺に似るな 南町では、町の入口にあたる二ヶ所と国道沿 まさに命あるこの一句は町民、 川柳による町づくりを目指す岡山県の久米 JRにも協力を要請したところ、 川柳に対する理解を深める また訪 れる

削駅で句を回収することになり

二輌増結し

度

冷やめしが好きでにんげんらしい貌 妻は魔女ときどき呪文かけられる にんげんがしているとても悪いこと 寝たきりになっても自己を主張する

> しげお ルイ子 あすなろ 生 的 治 峰

11月1日には、川柳列車で課題が出され、弓 弓削川柳社創立50周年記念大会の開かれる

て列車を走らせると言う。

りに間に合うようになったと言う。

日2往復走らせてくれ、町での句会の締め切

っていると結ぶ 整備にも奉仕をし、次代へとつなぐべく頑張 川柳公園(二百三十一基の句碑がある)の

題の披講へと移り、予定の時刻に終了した。 の出席者により、事前投句「 んに輝いた。 月間賞は唐津市から出席された仁部四郎さ このあと二時半から句会は、二百四十二名 (司会—朝子) (清記—希久子 月子・いわる 進む」を含め六

## 兼題「にんげん」 木村 あきら

まな板の上で人間らしくなる 遮断機が降りてにんげん取り戻す 無位無冠急がずにんげん演じきる これが人間時々軌道外してる 生きているかぎりにんげん火を燃やす 札刷ってからにんげんは堕落した 限界に触れてにんげん浄化する 毒舌の裏に隠した人間 人間のお面の下に鬼が住む 言い訳をするにんげんが多すぎる にんげんを創って後悔してる神 にんげんの値段飛行機事故で知る にんげんの天敵人とヴィールスと にんげんの愛土壇場でためされる にんげんの魂売った核実験 にんげんのこころが通う無人店 人間をまあるくさせた七転び 八間の仮面が捨ててある墓場 鹿 美次郎 満津子 智恵子 友求章

后引

写経して少しにんげん取りもどす

クリントンもただの人間不倫説

人間不信自画像黒く塗りつぶす にんげんが神にランクをつけている 人間の欲望やがてけつまずく にんげんの知恵が地球をだめにする 基

ひとときを真人間で聞く法話

主幹と受賞者のみなさん

病む地球今人間が裁かれる 他人めし少しにんげんらしくなる にんげんが一番怖いと言う地球 人間のエゴにカラスが嘲笑う にんげんに追われたハトが黒く にんげんとしての鱗が褪せてくる にんげんの欲に終着駅がない やさしい風に出合いにんげん取り戻す 泥かぶる覚悟にんげんの顔をして 人間に百獣の王も呆れてる にんげんに惚れ職に惚れ決めました 夢中になるとにんげん狂い出す にんげんの内緒ばなしを聞く瓦 にんげんが生まれて地球病みつづけ にんげんになりたくないと思う猿 人間の驕りに地球草臥れる にんげんも地球も傾く世紀末 人間に出合うとギョッとする夜道 にんげんの歩いた道がカビ臭い 金持つとにんげん忘れそうになる 子守唄人間らしさ呼び戻す にんげんの真似はアカンと猿がいう にんげんの皮を時々脱いでみる にんげんは花の命に触れたがる にんげんはまだやめられぬ酒 にんげんの宴へ月も顔を出す 間を疑うことのふしあわせ んげんの心鬼にも仏 けい子 雅久冬周 十四郎 Ŧi. 諷云児 重良宏満 喜美子 玉 まつお みつ子 桂叮 楓い清 わる 武 人知章 夫 文子虹信子 紅 楽 夢持っ 年金に千円札はまだ重 千円の花でくつろぐワンルー 情報 千円でおふくろの味買うてくる シニア料金好きな映画を梯子する 千円で靴のかかとが直らない 千円で野菜をたんと買うてくる 父さんに貸した千円戻らない 千円の味を守っている老舗 千円の紅茶ゆっくりゆっくりと 千円の宴ギョウザとラーメンと 神様に千円分の願いごと 千円で飼いならされている亭王 千円を拾い善人とまどい 千円で豪華に見せる妻の知 千円が見直される日特売日 漱石しか僕の財布に居りません 利子が千円鍋焼きうどん食べていこ 地球儀をこわし人間何処に住 枚の千円札の無表情 んげ は返してくれと言 の渦でにんげん火傷する 兼題 んが住むと緑が減ってくる ているからにんげんは不滅 高 む 4 瀬 霜 石 星げい子 昭 あきら 勇 金 紫 天 信 郎 里 7 子子 步 雄 風 笑 千円でおもろい事はおまへんか千円が木の葉のように散ってゆ バー 千円で今年松茸買いました 千円になったらタバコやめてやる 千円で夫婦茶碗を買い替える 千円とテレカを持った散歩道 千円を三日に割って生き延びる 千円の時計もピタリ合う時報 千円あればすぐに飛びこむ古本屋 税込で千円になる賞味切れ 働いてわかった千円の値打 千円の指輪で釣った妻だっ 銭湯も千円持って行く時代 九百五十二円しか千円で買えません 先輩がいつも千円借りにくる 千円で落札される日の首よ 千円の赤い金魚に恋をする 千円のワインで酔える小市民 千円の時給色気もちょっと要り 千円札なかなか道に落ちてない 千円の価値はパートの汗が知る 漱石の顔がきれいだ不況だな たかが千円だけど どなたも下さら たった千円で味方にしてしまう ゲンの日しか千円威張れない 一円玉になるでない 飲みだけが味方する た X2 (八) 千睦靖完

ミツ子 朱夏

富高

いつふみ

たもつ 希久子 睦靖完剛雄東信哲 次 子已司治郎吉子郎

正森哲楓ま洋かりん子子子楽お敏ん子

禅の心教える飾らないお庭飾り気のない娘に見合話来る	叙位叙勲仏になって飾られる	音布って母こよ母り子を上がお茶席の心を飾る指の先	飾りなどなんにも要らぬ銀世界	金婚を飾る医者いらずのからだ	大会の節目を飾る良い笑顔	労働の額を飾る汗の玉	ごつい手を心に飾る勲章に	金文字の本で飾った議員室	事是「食」で」 者 なり	市 5 B	千円を上手に使う子供たち	天	千円の切符で母に会いに行く	地	ユダの手に千円札は軽すぎる	人	一握の砂にも似たる千円よ	右往左往千円札は気が多い	初任給千円でした若かった	千円拾う小さい小さい福の神	坪千円 星にこんなに近く住む	佳	千円札の値打はあなた次第です	千円に心の底をのぞかれる	千円から歩きはじめた父の道	千円で月に一回医者に行く
萬 政的 勝	叮 タ 紅 オ		宏章	妻子	英子	剛治	幸次郎	協	多道		和歌子		潮華		鹿太		恵子	日枝子	義子	シマ子	季額		蛙	紗弓	可住	壶壶
主義をもつ男の背なは飾らない飾り過ぎて本当の自分見失う	飾っても飾っても吹くすきま風	final にいてきのうをある 自分史に飾る一句を選っている	飾らない私はわたしなりの彩	終章の今更飾ることもなし	飾りけのない人柄が慕われる	飾らない人にいつでも負けている	少しだけ自分飾って書く手紙	飾るもの無い真実が美しい	最後にはわたしも銀河飾る星	飾るもの変えて思春期に入る	飾るもの取ると力が湧いてきた	崖っ渕に立っても飾り捨てられぬ	余命表ラストを飾る一行詩	ほどほどに飾り余生へはずみつけ	慶びのあいさつすこし華やかに	身辺を飾る哀しい嘘がある	全身を花で飾ってから焼かれ	少し飾って病院に行こうかな	飾るより身辺整理を始めてる	ふくよかな胸でときめくペンダント	耳飾り君のささやき聞いている	バラ色で飾られていた落し穴	虹が出て誰の飾りも色褪せる	飾り物つけぬ尼僧の静かな美	飾らない君が好きだと言ったのに	飾ったら妻が女の貌になる
千 諷云児	金引太生		悦子	恭昌	正坊	義	五月	(古)和	八千 代	紫香	真知子	喜美子	勇次郎	由多香	一步	周信	満秋	季穎	伽羅	仁清	西美智子	泰子	完司	照子	てる	靖巳
体力が落ちたと思う口達者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	食りにのから如で多も悩れている	布)ナのよい良でより忽している軸	何を飾ろうわたしの壁はまっ白い	天	飾られてそのまま晒し者になる	地	清貧のころは心を飾ってた	人	飾らない言葉と会いにゆく田舎	飾ったら私らしさがなくなった	自分史のラストに母を飾る章	飾らない丸い心に惚れている	飾らずに生きた明治の亡母想う	佳	言葉飾ると風船は手を放れ	修飾語持たない辞書が擦りきれる	寒くて寒くてひとりの身を飾る	なぐさめになるなら言葉飾ります	これからはせめて心を飾りましょ	飾るもの除くと個性冴えてくる	賞状に僕の人生飾られる	家系図の隅をちいさく飾っている	飾る物もたない母の知恵袋	着飾ると妻も女の香り見せ	追伸に飾らぬ愛が揺れている	飾りを捨てた私が好きと言わせよう
寿恵子	7 7	<b>ド</b>	たず子		大輪		正 子		凡子	孝子	ダン吉	十四郎	調けい子		みつ子	霜石	希久子	欣史子	満州	満津子	悟郎	朱夏	奥美智子	一風	勇太	畔

自分史に随分無理をしたからだ 五臓六腑支える足が萎えてくる 意気込みは青春からだだけ老いる 五体満足その上何を望まんや 咳きながらからだも徐々に秋支度 お薬をのんで動いているからだ 好きなことしてるとからだ疲れない 頑丈なからだ財産だと思う 七色の薬に染まらないからだ 派手を着て人生論は変らない 太陽に治ったからだ見てもらう 天の邪鬼わたしのからだ離れない 一銭五厘の体あれから半世紀 からだから溢れる程のパワー持つ 無理をきくからだに感謝しています 体力が落ちる人参だニンニクだ カロリーの計算ばかりするからだ 秋風や人のからだは生臭し 元気だが時々文句いうからだ 母親を抜いた背丈の食べ盛り 脳の司令と動きが狂って来たからだ 首から下 異状全くありません 働いていると調子のいいからだ 不自由は金だけ からだ大丈夫 柚風呂に古稀のからだも軽く浮く あれこれとしたいがからだついてこぬ 赤ワイン火照るからだは愛の彩 無駄口のなかに光ってくるからだ 喜寿越したからだに活を入れている (八) 奥美智子 シマ子 みつ子 諷云児 Œ たもつ 武庫坊 重 あきら 市 信 千 狸 完 美代子 柳 義度 汀 代 人 雄 知 司

> このからだ賞味期限は切れました 働いて来たからだだよ芯がある 全身で笑った顔がすばらしい ホクローつからだの中に隠してる 刃こぼれのからだで耐えている不況 からだ中アンテナにして好奇心 いたわればからだは脈を打ち返す からだみな使うて笑う嫁がきた スリムだった頃もたしかにありました 亡父と同じ汗のにおいのからだ拭く からだだけ貸してほしいと言うてくる 遊び過ぎてからだが少し枯れかかる からだ張り私を守る彼がいる 自信持つからだそろそろ脳の錆び (小) 昭 あすなろ みさを 登 舞 登剛 富 協 風 子 湖 美治弥子



表彰される受賞者

義歯以外身体髪膚父母の作 体中あちこちひそむ休火山 からだ中診察券を貼っている お見合でからだばかりがほめられる 妻のからだずっと元気でいてほしい 腹ばかり出て諦めの大笑い 止まり木でちょっと給油のいる体 慈悲深いからだ万病棲まわせる 献体をします私もリサイクル 震度七いまも覚えているからだ 綱けい子 求 照 みさ江 石

芽

子

ロボットのからだそろそろ油切れ 少々の毒なら食べてきたからだ

お

舟

胃もたれは知らず蛍火炎えている 内視鏡に自分のからだ見るこわさ (川)絹 重 俶 子輪 子. 章

無理は承知なだめすかしているからだ 恵 子

取り替えの部品が欲しくなるからだ ちちははの川が流れているからだ 季 潁

#### い 河 内 天 笑 選

雄

17

優しさと強さを持ったナー 忠告は聞きます意志は曲げません 懸賞が掛ると強い二枚腰 強敵だしかも僕より男前 貝になった女にとても敵わない ばあちゃんは育ての親という強さ 骨粗しょう私を強く抱かない スの背 まつお 妻文 秋

#### t 橘 高 薰 風 選

怒らない父はやっぱり強かった 潮時を逃さぬ運の強い人 母さんの強さへわが家つつがなし 桃太郎妻には勝ったことがない 強がりを言うから歳に笑われる 芯の強い妻を時どき楯にする 強風にまっすぐ顔をむけてみる 交際費たくさん持っている強さ ポンと帯叩き苦情の客へ出る 人前では妻より強い顔しとく 本当に強いのかしらサングラス 弱虫の僕には強い妻がいる 不甲斐ない夫は強い妻が好き 我慢強い妻にも限度ある別れ 強い名を貰いいじめに遇っている 三人の子供がそばに住む強味 酒強い女と飲んでダウンする 鯛けい子 完清みさ江 紀美女 由多香 靖 波留吉 5 夫 銀行員ですかと見合い進まない 矢印を進んでいつもほぞを嚙む 矢印のとおり進んでもの足りず 回復へ向かいちょっぴり酒をなめ 進ませた時計の針の孤独感 軍隊手帳も新幹線も突進だ 進軍ラッパをまだ聞いている五十年 蟻の行進誰も号令かけてない 話合い無難に進む笑い声 食欲が進み景色が見えてくる 村道が舗装をされて過疎進む 進んでるお人も身内には古い ススメ ススメ兵隊だった僕の春 溺愛の親を捨てねば進めない 一歩ずつ歩にはと金の夢がある 茶を酒に替え円滑に議事進む

六法を齧り女が強かに

麦の芽はいじめに負けず天を向 アンテナを張りめぐらしてある強気

(沢)和

寿恵子

和歌子 朝

基

日枝子

番犬に強い名をつけ金がない 強い方へかたむく旗を持っている

地獄まで根を張っている欲の皮

母さんがとっても強い日曜

強がりを言って後悔ばかりする

悪運と戦い強さ身につける

両親に強い体を授けられ 女には強いがすぐに風邪を引く 雑魚でよい沢山仲間いる強味 (古)和

まさと

勝

貧乏と強い絆があるらし 、そくりがたんと溜ってきた強み

英

7

恋人と螺旋階段進むのみ

言に進む勇気を貰った日

すこし狂うと進むかも知れぬ恋

(楠) 昭

伽

啓

風

満

人徳がみんな味方にしてしまう

やさしさを分配できる強い人

強い男演じた父のデスマスク 強がりを言うから弱さ見え隠れ 突然の事には強い母である 強腰で押し通すのは自己過信 死ぬまではぷかぷかふかす強い意志 欲しいものは何にもないという強味 三世代妻と嫁とが威張ってる 七十でこっそり子ども産ませてる 返事まで強い調子の反抗期 うたれ強い親父で笑顔忘れない 最強の妻がうしろに居てくれる 助っ人を頼むと妻がやって来た 気の強い妻に娘が似てきよる 子供等を味方に妻は強くなり 怖いものもう何もない素っ裸 ギャンブルに強くていつも一人ぼち 泣き虫を強いつよいと抱き上げる 強い子につよい子になるにぎり飯 母ちゃんは宇宙戦艦だと思う 貨車を牽く強いお父さんを見た

洋

進んでも進んでもメリーゴーランド

しげお

丰

前進へ胸にクルスを抱いている

進化論サルが外車を乗り回す

天

笑

世は進む息子産休とっている 前進へ一本の藁はなさない

進むよりほかは思わぬかたつむり 試歩一歩芝生の青がまぶしすぎ わたしには行進曲がよく似合う

みさ江

多賀子

欣史子

富喜子 千寿子 正保 喜美子 まさよ

-100 -

帰省するたび進んでる父の老い 進化と退化つくづく思う孫の守り ころんでも真直ぐ進む性かなし 進行方向決まると早いカメの足 前進のない靴少しも光らない

紀美女

振り返る隙に追い抜く影がある ひっそりと点字聖書を進む指 マイナスもプラスも混ぜてから進む ライバルの前に進んで受く王冠

秋

進め進めと他人には言う独裁者 どちらにも進める駅に来て傘寿 痴呆進む母の頭にある故郷

あやめ

獏

ルイ 子明

進軍ラッパが鳴ったら回れ右をする 進んでも退いても同じ距離に夫 前に行くしかない僕は回遊魚 どちらも少し進んでなんとなく笑うの千 後退をするより進むほうが楽 五. 信

代

月子

笑

結跏趺座 進むサインを待っている 美代子

方向はある盥舟

夏休み子と憲法を読み進む

仁部

過郎

周

信

進の字を名前とするはかなしけれ 薰

風

悲

求

親 夏

がった。 乾杯した。北は弘前、 5時から木本朱夏さんの司会で開催 人副理事長の挨拶の後、 ・四国から一一二名の参加で会は盛り上 会席料理に目も口も楽しみ、程よく 南は唐津と山陰・山陽

会の挨拶は予定の7時を大分過ぎていた。 声に時を忘れた。前たもつ企画事業部長の閉 民川柳会の河内音頭まで、芸達者な人々の 氏の鮮やかな手品に惑わされ、最後の八尾市 量豊かな歌声を皮切りに、岳人氏・恒松叮紅 アルコールも回った頃、 河内天笑理事長の声 美

祝 電 (敬称略・順不同

都大路川柳社奥山晴生・鳥取県川柳作家連盟 小松原爽介・月原宵明・川柳塔おっぱこ吟社

御芳志御礼 (敬称略·順不同

川柳塔きゃらぼく・川柳塔おっぱこ吟社

本間満津子

柳塔まつりの最後を飾る懇親宴は、 菱田満秋氏の発声で 板尾岳

吟社・美研アート・川柳塔おおとり・京都塔 柳社・川柳塔唐津支部・川柳塔まつえ

歌って 踊って

木村あきら 長浜澄子 月原宵明 佐藤季頴 井上照子 **濱野**奇童 吉田笑女 都倉求芽 小野克枝 堀江正朗 西出楓楽 薗田獏沓 小林トメ子 川崎ひかり 堀江芳子 二宗吟平 中原諷人 高瀬霜石 木本朱夏 西口い わる 岩崎みさ江 池田 神夏磯典子 奥田みつ子 岡田たけを 当寿美子

告

## 平成11年3月20日 川柳塔創刊75周年記念川柳大会 土曜日

ホテル・アウィーナ大阪

の会・川柳塔鹿野みか月

#### 第四回

# 川柳塔まつりに

川柳塔まつり

ッスルをした

恒松叮紅

し、午後の第四回川柳塔まつりに移ったが、 一大阪の第四回川柳塔まつりに移ったが、 大も居られるとかで、朝からしとしとと秋雨 大も居られるとかで、朝からしとしとと秋雨 大も居られるとかで、朝からしとしとと秋雨 の降る一日だった。午前中は同人総会で、議 長に河内天笑に両氏のお出迎えを頂いて旅装 を解いた。明けてまつりの当日は、雨男が二 大も居られるとかで、朝からしとしとと秋雨 の降る一日だった。午前中は同人総会で、議 長に河内天笑氏を選出、議事は滞りなく終了 と、午後の第四回川柳塔まつりに移ったが、

> 弓削川柳社の濱野奇童氏、川柳の町弓削の町 本畔さんが新同人として紹介された。講演は そのあとは楽しみの披講に移り、青森の高瀬 た語り口で蘊蓄のあるお話は聴衆を魅了し、 民挙っての川柳熱を紹介され、ゆっくりとし をして頂いたが、他の3名は欠席、代表で川 迎え、私たちは、もう一泊するという気安さ 席はまたアトラクションで盛り上がり、 講には感心もし、勉強させられたひと時であ 霜石氏や河内天笑氏のユーモアたっぷりの披 まつりの楽しかった感激を胸に、 から最後までハッスルさせてもらい、川柳塔 は全員が参加の民謡踊りでクライマックスを た司会で賑やかに開幕、飲む程に酔う程に宴 った。懇親宴は明快な木本朱夏さんの手馴れ いつのまに 最後

> > ものです。

川柳塔の絆

か深い眠りに入っていた。

来ました。

本孝子

(川柳塔おおとり)から参加、七十余名の新第四回川柳塔まつりに新同人として、鳥取

会場も満席の盛況であった。橘高薫風主幹の雨天の中二百四十余名の出席でさすがに広い

思いました。

えは今年4名を推薦し、本社同人の仲間入り挨拶、そして新同人の紹介、わが川柳塔まつ

同性として大変頼もしく、また力強く感じたがてきばきと取り仕切っておられたことに、会の運営では、各分野にわたり女性の方々

打ち解けて楽しいひとときを過ごすことが出打ち解けて楽しいひとときを過ごすことが出れるが呼名することができたことを共に喜び合いました。

想親宴では、同じ趣味を持つ者同士で酒の

想親宴では、同じ趣味を持つ者同士で酒の

が合いました。

私にとっては初めての参加でしたが、懇親 私にとっては初めての参加でしたが、懇親 を気がつけば全員参加となっておりました。 これをみたとき、川柳塔の絆の強さを感じ これをみたとき、川柳塔の絆の強さを感じ この絆を、より太く、より強くすることを微 力ながら、地方においてお手伝いさせていた だきたいと思ったものです。

いた皆様に心からお礼申し上げます。

# エッセー川柳と陶芸

岩本笑子

マオーバーかな……。 私はこの五・六年陶芸にはまっている。ある企画に参加して、生まれて初めて陶芸へ川神を書いてみた。その時の手応え、期待感。 柳を書いてみた。その時の手応え、期待感。

いてある。と書かれた大皿は、我が家の床の間の隅に置と書かれた大皿は、我が家の床の間の隅に置

太さに、しかも空気が入らぬようにするのだ。ないといけない。空気を抜くためである。空ないといけない。空気を抜くためである。空なが入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。気が入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。気が入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。気が入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。気が入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。気が入ったままの粘土を焼くと割れてしまう。

て取り出して、今度は釉をかける

簡単そうに見えるのだけれど、先生の手さば

きて、ますます手におえなくなる。やっと手回しロクロの上に粘土を置き形を作ることになるのだが、あいたりでなったり度くなったり、大変な思いをする。の上に粘土を置き形を作ることになるのだが、の上に粘土を置き形を作ることになるのだが、

焼きにするため釜に入れる。四・五時間焼い焼きにするため釜に入れる。四・五時間焼いた半下半、ワクワク、手が震えて来てイニシドキドキ、ワクワク、手が震えて来てイニシドキドキ、ワクワク、手が震えて来てイニシドキドキ、ワクワク、手が震えて来てイニシドキドキ、ワクワク、手が震えて来てイニシドキドキ、ワクワク、手が震えて来でイニシャルが曲ってしまう。一週間程乾燥させ、素やしいが曲ってしまう。一週間程乾燥させ、素がきにするため釜に入れる。四・五時間焼い

会員の方々といっしょに、良い彩が出たね、会員の方々といっしょに、良い彩が出たね、今度はこんな作品を作ってみたいねと、童心に返ったような気持になり、世界にたった一つしか無い作品をそれぞれ家に持ち帰る。小さい物は箸置きから、大きい物は高さ四十センチもある花器までたくさん作り、皿や花器に川柳を書いたり、低を入れたりして楽しんでいる。

友達に差し上げたり、作品展に出したりし友達に差し上げたり、作品展に出したりし自分で作った作品に、自分で書き、釉をかけ、自分で作った作品に、自分で書き、釉をかけ、自分で作った作品に、自分で書き、釉をかけ、もらっている。夫にはビールジョッキを作り、フリーザーで凍らせている。仕事から帰ってフリーザーで凍らせている。仕事から帰ってフリーザーで凍らせている。仕事から帰ってからず、大好評である。良い妻だとかってにならず、大好評である。良い妻だとかってにならず、大好評である。良い妻だとかってにならず、大好評である。良い妻だとかっても、温くな物を作ろうかと、いろいろ考えている昨今である。

趣味多忙私に四十八時間」

笑子

々思っている。



青酸の毒気に街は揺れ動き

風次第蛇にもなります仏さま おはようさん今日はどちらの風が吹く

## 毎月25日締切・30句以内厳守

南大阪川柳会

吉川

編集部

当然と言わせた僕に落し穴 当然のように平和の中にいる 当然の情けが消えてゆく世代 童顔がしっかり頑張るボランティア 卒寿越え ええ童顔にならはった 童顔の地蔵と蝶が戯れる **童顔の澄んだ瞳に諭される** 童顔の特攻隊員花と散り 童顔と甘く見ていたのが誤算 柳宏子 和歌子 志華子 たもつ

咲修 度

> この人がまさか噂の火元とは 雑草の強さ呆れるばかりです

愛一途呆れるほどの長電話

睦子 かつ乃

脛齧る足しに気楽なバイトする

茂

ほどほどが出来ぬわたしの夏帽子

等分というから油断してしまい 等分にそそいだ愛だが兄がぐれ

カルメンの毒気造花の赤いバラ 毒気煮る土鍋のヒビを黙らせる

ひょうひょうと風に吹かれて歩いてる 過ぎた日の呆れる事を減らしている 見舞うたび母も呆れる父の意地 等分に愛の深さは測れない 排気ガスだけ等分にくれる街 等分に蒔いて咲く花咲かぬ花 お陽さまは等分だった目の配り 逆風は当然君が蒔いた種

> ひさ乃 ダン吉

パン種を等しく分けるプロの腕

当然の老いへ抵抗してる無理 椰子の実がロマンを抱いて流れつく どの子にも届く目線の位置にいる 四面楚歌ちょっと毒気を撒きすぎた 少しくらい毒気がほしい話下手 毒気ちょっぴりまぜて揺れてるバスのビラ 芸人の毒気と灰汁もまた魅力 おおらかな母の手摑み数は合 童顔でコロコロ笑ううちの嫁 ン分けるナイフに光る虜囚の Ħ

柳塔鹿野みか月 土橋

鬼瓦はらはら車ラッシュ見る 雑念を払うお経のいい響き 新築の景気よい音よく響く 炊事洗濯夫に学んでばかりいる 愛されて好かれていたい女の歩 さんま焼く煙に月を救い出す 齢かいな仏心をのぞかせる 宝くじ当らぬ先に予算組む 万歩計が働くように怠らず おかげ様達者で今日も畑を打

枝

気楽さの味を忘れて憧れる 七草を供える習い北の盆

シメ子 凡 頂留子 叡 子 男 里

螢報

くに子 みさ子

眼が合って咄嗟につくり笑いする 梯子酒とっさに妻の顔浮かぶ とっさについた嘘からドラマ始まった 年が増え咄嗟の効かぬことになる 木を揺する風の力を借りている 飛べたのは風が光ってくれたから アルバムに密封された恋の風 散りながら風に吹かれる花になる 手のひらで大きくなれた風の音 秋風が妻の方から吹いてくる ええ帽子かぶって風に飛ばされる

出宣

公 富久江 諷節

はるお

君子報

ローズ川柳会

喜与志

右足が咄嗟に出ない寒い朝

こんな気楽で良いのでしょうか爺と姥 風鈴が鳴らず熱帯魚もあくび 盆灯へ人も仏も安らぎぬ 気楽さを言い淋しさは言わず 地蔵盆浴衣に下駄の子が集っ 盆仕度嫁へ先祖の話など 思案する横で気楽に眠る夫 いわゑ 貴代子 トミエ

闽宣

きみ子 孔美子

智恵子 久

枝

武子

実

盆ラッシュ揉まれて日本人の顔 武庫坊

庭つづき気楽に呼んでティータイム 君民はつ会子平絵

ミサヲ

瑩

想い出を消すに消しゴム固すぎる 元気なら一人暮しは天国だ

雅 子 幸せな長寿でありたい来世

笑

女

病と仲よく生きてきた長寿

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

景気には関係ないよ医者払い 不景気な顔で駅員立って居り 不景気を横目で通る人もいる かつ子

手ぶらでは大もシッポを振りません 不景気なことにはふれず田植歌

水面をすれすれにゆく地獄耳 景気などどうあれ季節の花が咲き

はるみ ちよえ 好 恵美子

手ぶらでは国の動きが止まります 円安も株も手ぶらの気らくさよ 食卓へ網戸の風のやさしくて

> 清 博 英

> > 利

出す話決っていました水面下 川柳塔まつえ吟社 恒松

秋風が財布の中を吹き抜け ファッションは秋少しおしゃれがしたくなる ビールから酒へと秋が動き出す

ひふみ

温かい

気がつけば父の大きな輪の中だ 父の背に修身の文字書いてある ゆく秋を待ってくれない老いの 淋しいな過疎地の秋の祭り笛 父の座が真ん中きょうも無事安泰 高齢を熟慮の秋としようかなア 足 邦 きみ子 畔

17

房 康

父の汗思い出させる農具小屋 単身の父へ時々電話する

父親の分までできる訳がない

帆を張ったままで走ってきた疲れ 帆をあげた風どう受ける小渕丸 未解決の事件がつづく熱帯夜 うんざりと社長訓示を聞いている 父の樹にもたれうんざり叱られる うんざりとは決して言わぬ蟻の列 塾通い虫の捕り方教えてず 軒下に虫かご路地の味があり

ぬるま湯の中へ元気が溶けてゆく

接待で背骨一本抜いておく

実力でパパは大きな手になった

食欲を不振にさせた請求書 食欲を満たしてくれたいもの 食欲に添えるパセリの色冴える どのくらい生きるつもりの長寿食 参考に長寿の秘訣聞いてお 食欲があり回復の兆し見え 食欲がじゃまする秋のダイエット 長寿国やはり女は強かった またしても長寿のコツを聞くマイク

すみこ

典

満

この頃が仲が良すぎて口喧嘩 この頃のことは知らない仙人だ 何かあるこの頃嫁の瞳が涼し この頃の男料理がうまくなり 妻の待つ灯へ食欲ほとばしる ムカついてキレそうになる昨日今日

> 午 義

朗 良

この頃は女尊男卑のアイシャドー

叮紅報

絵を思い出すとんぼ捕り 松川 杜的報 叮

求正友 杜柳宏子 詩芽坊熙的

告げ口は首を洗ってからにする

八起き目の力を膝にためておく

石棺の中に砕けた刻がある

日出子 登志子 迎え火に浄土の亡母を待ちわびる 浄土への切符静かに写経する 安心をして住める所が浄土です 五百羅漢の千のまなこにある浄土 ごめんねが言えぬ自分にうんざり 父の帆を陰で操る影があ まで一緒に行くと惚れられる

百合子

吉之助 白渓子

静

彼のこと浄土でも世話やきたがり 花香華浄土は我が家仏の間 浄土でも夫婦ですねと寺まいり 浄土でもちょこまか動くことだろう 浄土からそっぽを向かれ父白寿

> 波留吉 ルイ子

友 2

露天風呂の浄土に一つ浮かぶ首

傘寿にも帆がたためない苦労性

佳 句 地 十選

茂太 多賀子

美

与根一 紅

(10月号から

ばあちゃんの古い話に蓋をする 贈られてだんだん好きになる扇子 人に向く指が冷たくないですか ノーベル賞狙ってみるか晩学で 洋 風

あや子 起世子 子

則

-105 -

眠れない夜もきれいな夢をみる 顔色に出ないわたしの損な顔 老人を案じてくださる電話口 パンの香りで帰宅の足を止める店 大根の辛さが好きと娘も五 の声に起こされ今日は土用丑

武庫坊 女

7

立ち話しただけなのに疑

# 靖子報

この日照りこぼれ種にも愛そそぐ 似たような話ここにも落ちている 明月へ淋しさつのる亡父の影 足元を照らし続けた父の遺書 楽しさを照らす鏡は吊っておこ 暗証で手帳に書いた内緒ごと 売れてない店へ日照りが強すぎる なにげなく無言で照らす子の温み 七人の敵に生き抜く意地を張 しあわせと手帳に書いたさくらんぼ 敵があり味方が出来るたのもしさ 逃げる知恵授けた神も逃げ給う 七人の敵と妥協の靴をはく 一人部屋照る日入る陽一人じめ お荷物になりそう人生ぶらさがる 多美子 美智子 かほる すず子 とみ子 八重子 靖 ヒサ子 つや子

#### 川竹 松風報

川

桐下駄にもっとやせろと叱られる

外圧に耐えるしかない酒税法 湯の町の下駄妄想が離れない スタミナを少し充電する昼寝 朱美 佳坊々

> すっきりと別れ無口な酒となる 拭くほどに曇りガラスにある疑惑

山あいの旅愁にひたるランプの湯 やきとりが好きでも下戸のままの

いつだって父は大きなシャンデリア

伝書鳩も雨水のんでる夏の午後 墓掃除汗で拝むを忘れたり 成り行きにまかせば気楽な床柱

逆境の中でつかの間虹を見る 虹の橋生涯追って行くつもり 初孫の笑顔もろうて虹を描く 爽やかに自然と生きる途がある ナツメロを聞いて青春呼びもどし

テルミ

江

萌

京

安っぽい妥協流れについてゆく この二人だったら虹が摑めそう 雑踏の流れが孤独深くする 人生の流れを変えた保証印 嫌な世の流れの底で貝になる 目の上の瘤が僻地へ流される 活発な嫁が流れを変えてゆく

佳

風宏

風

功

雄

身が軽い何だか空を飛べそうだ

柳塔みちのく

野

善人の血が流れてる献血車

割勘の額が見事に割り切れる 輝いた過去記念樹が語り出す 湯煙にあらぬ誤解が溶けていく よくやった汗が自分をほめている ぬるま湯の中で拳が風化する 長嶋さん負けてすっきり坊主刈 n

花峯報

父の忌に好きな焼鳥あげられず 逃げ水を追うギラギラ追っている ヒサ子 しげる 井ツ花銀幕順北 誠 ネ 匠 波 情 風 歩

> 残留孤児初めて先祖の墓参り 焼き鳥の串嚙んで折る苦い酒 茶断ちした母の湯飲みが淋しがり 人間が好きでたまらぬポットの湯 水割りも湯割りも好きなカタツムリ ローン終えて口笛軽くなる 五楽庵 一花

花

図書館へ無職が昼寝にやってくる やさしさを使い果たしてまだ夫婦 たたかいの歌が得意な一升瓶 カラスなぜ鳴く喝釆のない田に老いる

バスの旅レールが見えてほっとする 役職をやめたら誰も寄ってこぬ 沈黙のひととき西瓜を食う家族 ケルン積むみんな深い業がある 生活のゆとりか庭木に趣味が出来 もう秋を伝えに来てる赤トンボ 白票を入れにわざわざ来た選挙 ブーメラン逆に戻ると限らない 謀反など知らぬ向日葵の太い幹 猫にやる涼しい場所を空けておく 爪を嚙みながら秘策を練っている

拓 浄

銅治美成

腹割って話ができぬので疲れ 哲秋吟 まさお

花道が過ぎて鎧が重くなる

郎

凡々子

佐加恵

-106 -

チャンピオンの鼻骨がすこしズレている 擬餌針で魚が釣れる朝の どん底に居て逆転の幸を待ち 大 金

JII

天国のあとは地獄のバイアグラ 重い空気八月六日の広場 面 の裏にやさし い顔 がある

柳弘報 鮫虎狼 風

嫁が来て朗らか空気メシうまい 脳裏から消えない顔がたんとある 争いは嫌まろやかにまろやかに

坊

生きるため悲しい狡さ踏絵踏む さよならの予感空気が震え出す 風の声あつい夫婦をなでて行く かけらが胸にひっかかる

朝取り 直球で一徹者が生き通す 新鮮な酸素で歌う一人旅 の野菜かじってタクトふる

尽呂久

珠

宏 理 まろやかに舞う八十の足と腰 打ち水にスダレ通しの風が来る

川雅叭

巣

仏像を見ている顔が皆和み

童

鉄

円やかな握りこぶしで眠る孫

河南子 須賀夫

まろやかな器の中に人を見る

眠ってる子供の顔は平和だね まろやかに解き放たれる好奇心 寝過ごしてホームで化粧する女

情熱の

マスクマン一度正体見てみたい

和めないクラスに登校拒否をする 熱こめた言葉が人をかみ砕く 奥山のなでしこ見たら和みます ゲートイン軽い財布が出遅れる

繕いのフェースばかりも辛かろう

かよこ

灼熱を踊り終えしか蟬の殼

精進が良いので晴れましたとガイド

勇

請求の二の矢は打てぬ涼しい眼 ブランコでしばし空気と遊ぼうか 郷里の空気で肺を掃除する まろやかな味に修業の苦が混じる

比呂志 希久志

美

空気あな拡げ知識の風入れる 胸の内顔に書いてる倦怠期

向日葵の誘いに負けた夏の乱 骨の鳴る音は歩いてきた歴史 風鈴と和んでしまう冷しあめ

森欣元

朝 元 柳

尼崎尾浜川柳会 田辺

江

強情な自分を叱る影法師 道案内トンボの後をついて行く

太美

慕情一つボールに込めて投げてみる

投一打男の値段決められる

天真爛漫隙だらけだが打ち込めぬ

やわらちゃん可愛い顔で背負い投げ

磨かれた鏡の嘘に欺される 院長がベビーフェースで悩んでる 鍬もてぬ農夫一揆の顔となる きな臭い匂いがしそうお大臣 まろやかな地酒探してひとり旅 弁当も空気も旨い山の上 まろやかの裏で打ってる五寸釘 どのフェースも皆煩悩の中にいる

> ダン吉 金 本蔭棒 風 重

弘人太

三和子 東 IF. 美 +

紅紫朗 義 清 和歌子 勇 太

> 柳塔わかやま吟社 宮口

隙だらけ周りのひとはみんな友 ホノルルの消印で出すハネムーン わたくしへ投げる最後の球だろう 国境を消すとやさしい地図になる 遺伝子は僕の消印だと思う

紙つぶて投げて世論に火をつける 外国の消印むすめ元気です 線二本引いて男とさようなら 正あ利豊大保萬博む治太輪州的 太輪州的羽翁

平凡な男に有った離婚歴 痴話喧嘩本気になって割る茶碗 検札に定期の干支を尋ねられ 平凡な日を踏みしめる父の靴 平凡なサラリーマンにひかる趣味 六 浦 勇次郎

知恵熱と妻に笑われ三日寝る それなりに幸せだった実が熟れる 平凡でともにスープの冷めぬ距離 二百十日稲の実りと風の盆 本気でも誰も信用していない 冗談を本気にされて汗しとど 平凡を納得してる共稼ぎ 十石澄正昌四郎舟子治子

街頭の叫び本気で聞いてない

克子報

-107 -

子が卵立て終るまで母は待ち 母代り姉が来ている参観日 冷え過ぎて解凍できぬ夫婦仲 しあわせを追いつづけてるちびた靴 補回戦男の涙見てしまい 今年産新米五キロの盆行事 経文のように社訓を読まされる いい皺の顔に子どもは寄ってゆく 初盆へ思い出語りまた涙 好奇心おんなの地図を炎えたたす 遍歴の地図に懺悔の海がある 巣立つ子の地図にひたすら朱を入れる 私の地図はいつもあなたに通じてる 善人の汗が大きな地図を描く 投票率政界地図を塗り変える 来てみれば地図には見えぬ文化あり 子の描く地球はみ出す日本地図 隙だらけの剣が一番こわい敵 ご先祖は知らぬ素材の盆料理 わたくしの地図にあなたを誘い込む これからの余生の地図を書き直す カーナビを試したいとて子の帰省 娘が住んでなじみが出来た世界地図 地図をみてときめき詰める旅鞄 隙のない人だよ犬も寄ってこぬ 隙見せて母は豊かな海になる 一代目も銀行恨む齢になり 久保 正剣報 輝勝 紀美女 さち子 紀久子 英 健三郎 柳宏子 千寿子 良 視汀 縄電車家族の足がよく揃う 恍惚の兆しに秋の風が吹く 生いたちにこだわりがある床柱 こだわればひばりの唄も古くなる 古い街古い看板そば処 散骨もよし灯台の火が届く 時化三日灯台守も無事らしい プライドにこだわり逃がす二度の職 蕎麦の花大事に思う人がいる 意気込みの割には食えぬわんこ蕎麦 空襲の焼跡真っ白な蕎麦の花 出会いも別れも蕎麦の花咲く頃だった 生き下手の父は灯台だと思う 若き日の灯台だった人が逝き 風の向きかわって灯台気をゆる 熱い息かけると鬼になる面 罪ひとつわたしを責める熱帯夜 情熱の筆は一気に走り出 節約が文明病に効く薬 刀工の熱気伝わる槌の音 大統領昼夜分たぬまつりごと 人柄に<br />
惚れて<br />
年には<br />
こだわらず こだわりを捨てたら傘が軽くなり 一代目のこだわる味は祖父譲り しだわりは朝一杯のお味噌汁 こだわりを持たぬ男の妥協癖 いて左右形の違う指 槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報 の恵美子 您恵美子 波留吉 とみ子 比ろ志 きよえ ルイ子 柳宏子 正坊 白渓子 スミ子 武庫坊 澄 正四 礫 剣郎 美人かなアクセル緩めチェックする 長江の緩い流れの五千年 離婚沙汰緩い絆であったの 老大の緩い足取り胸迫る 敬老の日ベルト緩める祝い膳 緩めると帰って来ない夫です 眉を引く女悔しさ秘めている 差し引きは零で人生終りたい 引き金はいつでも引けるこのように 引き寄せて愛し子のごと抱くペット 引いた弓どうにもならぬ放たねば 名幹事押しと引きにもたけた人 引きちがい夫婦飽きずに五十年 駈け引きに勝って孤独の座にすわる 身を引くと決めた夜です丸い月 どこまでが本音か試す大ジョッ 色付きのメガネで私試すとは 試されているとも知らず有頂天 試されて人はますます強くなる 食糧を送りミサイル試される 媚び甘え流す涙で愛試す 試してるつもりがいつか試されて 句読点ない人生を泳ぎ切る 傘立てにあった返したはずの 質ながれ人の涙を安く買い 泣き癖の布団は思いっきり叩く 生きてるのも仏も帰ってくるお盆 ほたる川柳同好会 井上

和歌子

直博まみ子

昭

雪セ久昭 ツ子子子

正馬蛍郎安洗柳

直次報

諷云児 満寿蔵

吉太郎

緩慢が身に添うてくる昨日今日 食べっぷり見てると病気治ってる 弁当の蓋から食べる癖抜けず 胃に溜まる話を食べた不眠症

緩やかな弥勒菩薩の指のさき

桂敞

お土産は勝手にきめた婚約者 聞くだけが探るに変わる人の

H

ただし 実 童

窓閉めて二倍三倍言い返す

窓明けて母に満月めでさせる 知らんぷり窓の向こうは茶番劇 盆の詩ニッポン列島さんざめく

還暦からスピードをます砂時計 点滴の雫が光る窓あかり

まらない事で喧嘩の種つきず

生きている証に汗が吹いて出る 土産などいらぬというて心待ち さなきだに少なき余生昼寝など 通の便りに込めた母ごころ

房

喜美子

診療所窓で雀が聞く告知

いわゑ 退陣の総理を昼寝から送る 方円に従う水が堰を切る

IE.

のし紙の中の粗品に自負がある アンコールのない幕を引くありがとう 古傷は何度なめてもほろ苦し 四捨五入してから計算狂い出す ふっ切れてシルバーシートからも虹 下車駅までつまらぬ電話聞かされる

担ぐ手の重さ軽さよギャルみこし 流れには逆らわないで櫂を置く 実力をつけてもう珍事とは言わせない

みつ子

あずき

神夏磯典子報

淋しい指がささくれてゆく 母が居た 子が居た 椅子はそのままに 先生のくれる答はつまらない 秋風やつまらぬ男脚を組む 夏よりも冬がいいなとひとりごと

北川柳会

珍しく母が香水つけている 夕立へ客の珍談とまらない ムードには負けず本音を守る女 歓声が波打ち際を走り行く 新婚の窓から愛が落ちてくる 相変らず娘と話す長電話 本の銚子と庭の虫を聞く あい子 千恵子 典達 登美子 トヨ子

って飛べ全身で受けてやる

中立を通すダルマになっている

登美枝

持ち駒の金は最後に詰める役 どこまでの中立だろうか二枚舌 修行僧ハエも知ってか飛び去らぬ 土砂降りに稼ぎ止み間のないままに ラストスパートどうにもならぬ古稀の足 浮き草も小鮒目高の拠り所 珍しく二人で出かけ別の通夜 うぶみ川柳会

黙光報

くにお ひろ子

妻に似たコケシ土産に買ってくる とし子 久留美 和歌子 白 順 朝 志華子 春 峰 里

寿美子 ただし

> ライバルのお茶は苦みが舌を刺す この邪心冴えた鏡に見すかされ 酒飲むも仕事のうちと午前様 子の事になると近視の度が進む 散り際も見せ場さくらが乱舞する

あユ天宣正 ガリチ人子和

あやめ

時広 路報

竹原川柳会

人のため世のため暇を潰すため

横にいるあなたを見てはホッとする

朝起きて頭バクハツどうしよう 力仕事汗は真珠の色で落ち 仁王さん肩の力は抜くことだ コショーふると美味しい不思議だな 高2 千

気力ではどうにもならぬ孫を呼 聞き投に回り力になってあげ テレビからまざまざ水の底力 知恵を借り力を借りて生きて 小さいが蟻の力は侮れぬ いる

炎天の桔梗の愛の剛さなり 追伸のただ一言で湧く力

力 夫子

やわらかい月の明かりに想う事 柳友の明るい笑顔戴けり 一陣の風がビールと友を呼 3:

如水館今日の一勝明るいね 電話口娘の退院へ胸晴れて 千代紙のもの入れ部屋を明るうし 千房孝節 年 枝子枝夫

喜久恵

父と子の明るい気合となる竹刀

米を研ぎ終えて主婦から女史になる 朝ごはん食べず胃カメラ吞んでいる 正不夏

子枝

早場米ゆっくりゆっくり味を食べ 新米を雀が毒味してくれる 米粒の字を誉めている虫眼鏡

路

夏の夜に浴衣で二人地酒飲む コレ病魔無断で転移するでない 喧しく言えば子供は貝になる 橋本多哥由報 多哥由 輪多朗 惠

涙拭く孤児の瞼に刻むもの

夏の海光り若人よんでいる

幸福を運ぶ女神が微笑んだ

川柳塔ふくべ

紅を拭き女の業を鎮ませる 半券がまだ酔うているコンサート 盂蘭盆会精霊舟でゆく割符 診察券に無沙汰となっている平和 半券を大事にとっておくロマン 割引券貰いその手に乗せられる 自動改札口にひったくられてゆく切符 神の目の死角で口を拭いている 真っ直ぐに生きて無冠の汗拭う 十界を拭く雑巾を縫うている まるかじりしょうかしまいかりんご拭く 百合子 干み 章 めぐみ

> 尽くされて酸素不足になる金魚 金魚にはなれぬ私仕事好き れるたびに金魚は強くなり のために生まれてきた金魚

> > 鉄

あすなろ

波風を立てまい老母の知恵を借る

尾鰭振る金魚を追って行っ 好奇心強い金魚の凸レンズ 世渡りの下手な金魚に藻が絡む 軽いジョークへひらひら揺れている金魚

今日という光を無駄にしたくない 光と影の狭間で生きた半世紀 光る子に末は博士の夢を見る ストレスを捨てにおいでと海光る

陽よ風よキラキラ光る夏帽子 大原川柳社 矢内寿恵子報

達筆の返事へ苦労しています ナイフ持つ手の冷たさよ世紀末 逝った娘に年を重ねてあれやこれ くちなしの白ほんのりと夕茜 久し振り先祖と話し墓洗う 足元の幸せ忘れ虹を追う 風無欲その日その日の風が好き 死ぬ程に悩んだ昔馬鹿みたい あやこ 喜美子 辰 さちこ

登美代 満洲子 公子 碧

起世子 墓掃除先祖の顔も拭いてあげ

町 敏

さち子

二人三脚どこまで続く旅だろう 逆転のドラマは風が裏返す 気まぐれな上司が今日を暗くする 夕立も放ったらかして喋る主婦 日曜百姓休耕田という自慢 気まぐれで続かぬ五十年の 正直な人だ仮面置いてゆ 同窓会互いの老いに活を入れ

柳塔みそくち 茜 4

はじ芽 地佳平 和歌子 みさえ

ジョギングへ朝露顔に飛んでくる 露おりてうるおい貰う秋野菜 朝取れの鮮やか茄子に露光る 朝露も深みをまして秋近い 朝顔も昨夜の雨で顔洗い 朝露へきらりとひかる母の 朝顔の露にほほえみ清楚感 風に出す手紙は花の露で書く 露玉を芋茎の葉っぱ溜めて朝 露草のみどり田舎の匂いする 滴の露が生命の砂漠なり

子光敬

小倉 アサ報

17

111

招待券重たい腰をあげにくる

三千子

ハイハイと言うて気さくな山の神ばあちゃんのラッパ疲れる夏休み

ひでの はるみ

腹の虫なだめ女は紅をひく

眉かいて口紅ひいているおかめ 約束を守って苦い水を飲む ひらめいた趣味と余生を流れ

こふゆ

仇討ちのつもり雑草とのいくさ

匹になった金魚と睨めっこ ビスにもらった金魚だけ元気 人間を商品券で値踏みする

ハンガーに私の疲れ背負わせる 庇い合いだんだん丸くなる夫婦 かぎり土に生き抜く丸い

子子子子

公美枝

気疲れの底で縦糸縫うている 道楽も生業なれば疲れます 組板のへこみキュウリは手をつなぎ 寝苦しい夜はひとまず起きてみる 丸刈りの球児の姿未来見え 丸い腹夢が膨らむ見ぬ孫に 年重ね親の疲れが身に沁みる 流行の丸文字書く児減ったかな 煮え返る腹といっしょに熱帯夜 公約も何時もその他で丸められ 腹の立つニュースは国の内外に 八分言 いたい事は後にする ふ重悦和正 みを男子義 智恵子 IF. 幸 哲 良

雄

九十の母がきれいに折った鶴

宮崎シマ子報

省略をすれば視界から消えるのはあなた 本当の自由は棺の中にある 新仏の墓標に語る虫の声 転ぶこと入れてなかった予定表 以下同文省略されているわたし 省略の中したたかな芽が育つ 妻の都合夫の予定まで狂う 予定欄だけで終った日記帳 欣史子 喜美子 シマ子 あずき 田実子

ポト

おふくろの味煮含める落し蓋 雑踏を抜けると碧い空がある

マツエ あきら

柳東大阪

そのまさかあって人生面白い 石になる少年が抱く起爆剤 期一会笑顔で席を譲られる 頂留子 シマ子 たもつ 雅

文

損少し盛られた策と握手する 釜飯の釜バアさんの旅土産

先生があこがれだったお下げ髪 あこがれが敵方にいてやりにく

すみえ

番に彼の話は母にする

時々は折れたまんまの道しるべ 当選後公約の旗折っている 首折れてくる向日葵も夏バテか つい酒を口にしたがる夜の鬼 夜だけの月下美人と夜もす が病窓覗く午前 がら

騒ぐ 男ばかりの席に女神のミニの 人間を好きな女神の笑い皺 折りたたむフクサの上にポチ袋 饅頭がまさか一番怖いとは リ祭の女神は革命歌を唄う 血があって女神に逢いに行く

あや子

良

伸

賢

子

太 弘

郎直雲

P

八月の嗚咽をきいている女神 川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

口下手をわかって貰うまでが損怒ったら損だと老母は知っている 公約は選挙と共に消えてゆき 別嬪のオダテに乗った泥鰌すく 盆商戦啼いているのは閑古鳥 ルーム弾む会話に国訛 13 坊太郎 Œ 放節

フルムーン金をアチコチ分けて入れ 損したと思いたいよな寄附もある ンポトン蛇口の損を締め直す いさむ

> X線全て知られている恐さ 高々と上がる合図はVサイン 言が言えない為に損をする

くに子

恭

虹の橋渡ればキッと亡母が居る 目で合図目で返事する夫婦仲

> よしみ はつ恵 ひかり なみ子

岸和田川柳会 長谷川呂万報

倒されるブナが涙の音を立て 涙など無縁極楽とんぼ舞う チャップリン笑いの 蜩のしきりレポート進まない

ダン吉 城

しがらきの狸レポート書いている 体験がにじむレポート心引き よろけてる記者台風の現地レポ

おり 任 金星を臆面もなく取る業師 北浜の業師泣かせる乱高下 優勝へ鬼の業師も目に涙 花火師の業が梅雨空裂いてゆく 土俵際伝う業師の足の裏

激震も耐えた無名の匠業 裏をかくこれぞ業師の冥利かな 赤坂に集う業師の夜の策 ほこりある業師が守る京の ほこりある業師が守る京の味どの顔も業師に見える永田町

城君にあこがれ過ぎた岡田さん 甲子園ダイヤモンドにあこがれて 和歌子 美津江

鹿太郎 村南万齋風 弥

博子

-111 -

は

あこがれの地で幻の名酒酌 永遠にあこがれている原節子

スポート命の次と腹に巻

っつ川柳万画会 延寿庵野鶴報 甚路

子

冗談言わぬ蛙は草の彩になる 問題のない子もやはり考えも 冗談のふりして石を投げ返す

冗談のところどころに灰汁が浮き 脅迫に近い手紙でプロポーズ もう少し泣かせてあげる肩を抱く

迫真の演技のままで幕閉じる パン皿に京漬物が盛られてる とびきりの冗談つめた玉手箱 もうあかんなんぼいうても貸しよらん

持ち歩く内緒ばなしの数が増え 戦後飢餓ごちそうだったパンの 儲け話なんぼ聞いても金がない 大真面目に話してるのに笑いはる

富美子

英

雄

晴 加寿老

子

森伐った涙集めて川溢れ この頃のニュース冗談かと思う 英語の冗句みんなが笑うので笑う 迫られているのはピアス男の子 何を祈るや鉦叩き

哲

文

夢之助

冗談でとばした種が芽を出した 冗談がポンポン弾むいい朝だ 針の穴見抜けぬパンにある怖さ 申し分ない男だが肩が凝

> 挨拶もなしに隣の葉が落ちる 死んだ子の名でダイレクトメール

来る

Œ

子和

典

冗談も皮肉に聞こえ倦怠期 模索するなかで手応え感じ取る もう少し長生きしたく通う医者 もう少し内緒にしたい彼のこと

猛烈な仲だったのにかわいそう

洞

庵

冗談でテポドンなんか飛ばせない

堺

JII 柳

河内

月子報

打ち水に陽炎ゆれる京の路 間違いをめがねの罪に歳を取る イザ行かんポチと散歩だ朝の道 くる来ないゆらぐ心に祭りの灯 真剣に蟬取る竿の先ゆらぐ 噴水がちょっぴりゆらぐ夏の風 賽銭の嵩で神さまゆらいでる ゆらぐ度愛は傷つけあうものか 携帯を持て余してるろくでなし 大胆な下着スタイル風ゆらぐ ひとゆらぎタンス倒したエネル いざ離陸無神論者が祈ってる 貸す貸さぬ義理がからんで気がゆらぐ イザ行かん50年振りの異国の丘 黒めがねうるさい奴と見てとられ 携帯もなくて安泰わが老後 いざ行こう亀の歩みで老い二人 携帯と思った妻にぬれ落ち葉 不景気でぐらりゆらいだ屋台骨 イザという時のへそくり貯めている

永 鈴 京

ケベルは便利であるが身を縛る

**育筋を立てて冗談怒ってる** 金三郎

宿り木で名前聞く程野暮じゃな 挨拶がとても苦手な鬼瓦 盆踊り抜けて二人は何処へ行く 盆終り仏送りのナス拾う

殿和 鬼 枝

宿帳に偽名でツイン申し込む 二代目のクローンで親の名を越せず UFOの挨拶を待つひとりです 色即是空心の変わる音がした 深々ときらいな方に御挨拶 明かつみ 和歌子 悦 きみ子 公 輪多朗 桜 漁

ユニークと言われちょっぴり変り者 名と体が合って心に残る人 堅い名で損だと親にごねた日よ 司会者は元大臣と大げさに 同窓会名前と顔が一致せず 紅引いてこころ変わりをするつもり の符牒と思う名の重み

I ちゃ子 扶美代 みつこ 美代子 日の出 柳宏子 りつえ つづや Ŧi. 月 初盆に間に合うように父が逝く 画数が良いので名前決めました 新盆も三つ重なりゃ荷が重 ペンネーム三回変えて売れ 顔色を変えて交番探してる 朝一番挨拶なしで始まらぬ 血が滾るうちに変わった事をする 夕焼けが俺にむかって今晩 マヨネーズ刺身にかける変り者

ました Vi

良子生

郎

夫男男

紀美女 かりん 梓 虹 太

キープしたボトルの名前主を待つ 檳榔樹

見合い席本人よりも親が決め 決意した別れに未練隠せない 心やさしく生きると決めて母送る 決め球を打って球児の汗ひかる つぶやいて心おさめる秋の夜 つぶやきの一票ずつが世を直す ママごとのつぶやき家中みんな見え 寿 ふじ子 茂登子 IE

民衆のつぶやきやがて風になる つぶやいてみたが親にはとどかない つぶやけば聞こえぬ姑が返事する 秀 悦静

**酒吉川柳会** 

松本よしえ報

ありがとうその一言で輪が和む 世渡りのコツは辞書から学べない 真っ白なバトンにもどし子に渡す 見渡すと三百六十度ふるさと 良く笑う女神のような妻である 別れぎわ渡しそこねた物がある オッ美人和服姿にふりむいた 美ッチ 喜美子 枝 句 子

女ふと菊の白さに恨み持つ

かみさんに一枚抜いてから渡す お笑いに理屈なんぞはいりません 洗脳をする気か聖書渡される 雄

かつみ 石花菜 民康 雀 17

手の指に文鳥のせている平和

羽だけおくれて飛んだ渡り鳥

月の夜はお連れがほしい帰り道 暮れの鐘はかない夢を抱いたまま はかなくてやたら指切りしてしまう

諷云児

合鍵を渡し損した事がある

薪割が面白いのも五六本 じいちゃんが孫に叱られ苦笑い 下積みを笑い飛ばして切り抜ける よく笑う娘がお嫁さんになる マスコミの和の提言は眉唾だ したたかに笑い渡り合うのはもうごめん

究極の和食はのりとおつけも 笑い合う日を心から待っている 隣とは形式だけの和解なり 0

聰

子子

恋文を渡されてからつきが落ち

田中 正坊報

その気にさせた女の嘘が恨めし 身から出た錆とは知らず恨んでる 戦争を恨む地雷を踏んだ足 国境を飛びこえてゆく竹トンボ 国言葉まぜて都会の水に慣れ

登代子

きく子

寂しくなると風に向かって走り出す

人間てはかないものよ紙オムツ パソコンが魔法に見えるメカ音痴 風そよぎはかない命 秋の蟬 あんたにははかない思いさせまへん えらい優しい誰か魔法をかけたのか 魔女からの楽しい電話待っている かけられた魔法 利息が倍になり

ただし

和香子 重

正三郎

柳宏子

笑ったら三割引きにしてあげる

ゆり子 完 秋 よしえ 男 司 草

賀寿恵

昇進

の噂ばかりで遠い椅子

明庸

光佑

秋三昧松茸づくし平和なり その裏は読まずコーヒーあまく吞む

杜和歌子 しげお

的

休耕田実りの秋が笑えない

和歌子

夫

病息災長生きしています

真っ直ぐでないと動かぬ古時計

春城 年代報

魔の辻に花を手向けて風よぎる 逆風にルージュを濃ゆく引きなおす 日本のピンチ北から弾が来る ミサイルが自主権乗せてとんでくる ここというピンチに強い母が居る 一昭笛三 日出男 芳

すこし癖毛を靡かせ一輪車の少女 送電線鳩もスズメも同じ向き 送られて送って秋日たそがれる 風無情脆いアンテナのいくさ

遠花火音にさそわれ闇を見る ライバルに拍手を送る手が寒い ちっちゃい庭に地響きがする蟻 送り火や月下美人は今夜咲く またひとり見送る数珠を直してる 初の列

歌子

静

初物のぶどうをどうぞ仏さま 曼珠沙華今年も逢いにいくつもり 生きているかぎり煮物を煮るだろう ひとり食べる贅沢やはり味がない 茜雲われも旅人風も旅人 ヤス子 とみ子 比ろ志 夢之助

キク子

風鈴の音色に寄せる里心

終戦の知らせ木炭バスで暑い日に

芳 年 子代 武庫坊 久子 十四郎 -113

子の育ち母のタクトは追いつけず 短夜の羊かぞえて朝のこおろぎ の皿まがったきゅうりで味がい 10

光正千

江口

柳ねやがわ

有給休暇が欲しいと思う自由業 同じ人二度も殺して休暇とる 休み無く父の軍手は野良仕事 指折って休暇を待った日が恋し 休暇の子顔を見るまで落着かず 盆休みお待ちかねです仏様

> 日出子 勇太朗

客足がめっきり減った五ツ玉

不服ないあなた一人に飽きただけ 嫁姑箸が転んでさえ不服 不服とは言わず反対側歩く 万灯会霊に不服のないように 妻に似たナースで不服など言えぬ

たもつ

洋

休暇とらず走りつづける父の貨車 凍りつく向こうが見える電話口 四捨五入四捨のわたしにある不服 キャンプ場熟年ふたり浮いている 台所朝から皿の派手な音 髪あれば俺も茶髪にしているさ ワイン飲みメニューの料理待つ余裕 メニューにも質も目方と書いてほし 不服でももうリサイクル出来ぬ夫 品にこだわりもっているメニュー 頂留子 波留吉 弘、 茜 郎 風 太

子恵 痩せはったなと眼科医にまで言われ 電気つけ我が家の色にホッとする 初体験孫の土産の旨いこと 嫁の留守うんといじ悪しておこう 五十年妻の手のひらから飛べず 大本営発表のよう倒産

JII

目

約束をした小指には夢がある

P

3

ス

寿 玲 文 保 晶 々 子 子 葉 子 子

夏の朝めっきりふえる蟬の めっきりと増した色気に目をそら 来るたびにめっきり大きい孫の靴 ミチエ ٤ 令 朋 信

2

大鉈をふるう何ともつらい役

子

釣書きの返事大安繰ってみる 背を丸めめっきり老けた母が居る 食い違う意見に親子荒れている 栗のいがめっきり大きく口をあけ 若き僧サーフィン焼けと盆に言 荒れた子に投げてはならない親の匙 みつ子 庄

益

かすみ とし子 やめ 路 31

新聞にめっきりふえた使い

洞

庵

柳塔きゃらぼく

政岡日枝子報

順

十田洞庵報

みやこ

ユ 里 昌 子 夫 孝 IF. 子夫子 すべてがととのった沖へ漕ぎ出そう 人質が済めば毒入り缶ジュー 大和路に白い孔雀と雨やどり 一言に動いて風も秋となる

古釘で土に描いた輪はいくつ 秋の月しみじみ友と語らせる

手捻りのぐい飲みでのむひとしずく 屈託があってなさそで花の世話 吉兆へ障子の骨を洗っている

代々の母が護って来た土蔵 ニュースまた老いの笑いは減るば かり 富美子 日枝子

言の葉をきざみ続けて風の中 はびきの市民川柳会

幸せをしみじみ感じる大ジョッキ 今さらと思えどうれし美人の湯 ファックスで孫から届く通知票 專末昭山絢 平一平久子

-114

焦点を合わされているトップの 辛口も甘いはなしにのってくる 秋の気配にコスモスも乱れ咲き 草笛を天の青さにとけるまで 本心を言わぬ影だがつれてゆく

座

花

子

再会の人めっきり老けてやさしい 一言が病に効いてめっきりと

観光地めっきり客足閑古鳥 あかあかと狐つけたか彼岸花

台風が去ってめっきり秋の空

英壬子

ルイ子

成 秋

炎え切らぬカンナ花火に嫉妬する 銀婚へちょっと派手目の服を選る 年金の暮らし派手から遠ざかる

断層も三年たてば客を呼ぶ

不景気の風がめっきり肌に染む 古希すぎてめっきり淋しクラス会

千鳥足めっきり減ったネオン街 骨のきしみ衰えわかり年を知る

骨のある主張めっきり大人びる

勇

り向かぬ亀の歩みを鑑とす

てい子 八重子

安芸田泰子報

グラウンドの砂を袋に涙ぐみ

年とった箸も背骨もチビてきた 傘寿越え無事息災で趣味の日々 無事帰る怒り忘れて抱きしめる 無事な顔見れば小言が二つ三つ 晩酌の一本今日の無事に酔い 無事なのか風の便りも寄越さない ホームスティこのままうちの子にしたい 生々流転読書しているホームレス 故里を捨てる覚悟で立つホーム 漬物の味比べする冬ごもり 家庭のリズム妻のタクトに任せましょ 階段で聖書枕にホームレス 身の軽さ自動ドアーに笑われる まだ明日を睨んで軽い古稀の杖 軽い口冗句にまぜている本音 正論も力めば軽くいなされる 包装紙大きな期待かけられる 新入りも仮面をはずす三次会 植木鉢合いかぎ抱いて待ってい 兵隊の頃の男は強かった 逆転があるからこの世おもしろい 闘病二年良いお報せが続きます 今年も見事律儀な庭のさるすべり 赤トンボとばして君に残暑見舞 何かある女房がビー ぱしの哲学を持つホームレス の箸木の箸重く骨拾っ 柳塔おおとり ル ついだ時 原 3 みさを報 かつみ 美柱獏 りつえ 四三郎 美代子 佳 雄 志 重庸 洞 たけし みつこ 信俊 聡 子 子 喜 沓 貫庵 武 男 17 先生に「さん」で呼ばれる参観 狂 世辞送り敵の出方を模索する 停年で送る上司へありがとう 見送りの中に一人が見当らぬ ファックスで着いた返事が冷めてい 珍しく小銭と妻と街に出る 使わずに書き換えだけの免許証 姑を送り小さなあくびする 波風をたたせぬように順送り 年金の枠で小荷物送ります 葬送を終えて虚しい喪服脱ぐ 盆の客送りクーラー弱にする 送り火の向こうに父が母がいる いい返事早速貰い気も晴れる 感激ですぐに返事が出てこない 今日こそと思う返事をまた迷う この顔で返事じらしたこともある 若返って思い切り恋してみたい 美しい恋抱いたまま学徒征 箸袋旅をメモって思い出に 子は巣立ち置いてきぼりの夫婦箸 旬を追う箸に財布が吐息する 炎暑にも負けずお箸がよく弾む 一日が始まる朝のいい返事 菜子屋の味で昔を懐かしみ い咲き秋の夜長の花見酒 横浜あおば川柳会 食事に箸がつきだした H 菱田 る 満秋報 敬之介 ゆきの 幸伝風次郎住花 句多留 みさを 艷 由多香 宏 せつ子 良 純 道 崇 章 子 子 子 草 高下駄のようなヒールで闊歩する 借金とりがほのぼのとした顔で来る 可能性試す記録に励まされ 約束を破る朱肉は薄く押す 待ちぼけの日からわかっていた別れ 無駄もまた良しと思える昨日今日 絶縁を告げる紙きれ宙に舞う 珍しい豪雨が牛を泳がせる 現状を打破する鞭を買いに行く ポケットが破れるほどに夢拾う 郷愁を誘う霧笛のひとり旅 蔵の中鑑定人の眼が光る 手をつなごうなんて言うから赤くなる ドアに立つ夫の手にはバラの花 休日にルームサービスする夫 破れ目が声かけにくい場所にあり 目いっぱい無駄を省くと何もない 這い這いの目には珍しいものばかり ご破算にされた指輪の行きどころ 幸福に生きる自由に無駄がない 活気ある漁港の朝にあるくらし 珍しく家に居るから雨になり しばらくは転入生を取り囲み 港唄女はいつも待つばかり 港町ネオンが夜を厚化粧 入浴に痩せるセッケン使ってる り道無駄でなかっ た花に会 米田 幸子報

羊嘉

士 三 子 子

子江

亜希子

風

土德街絹雅

サト子 和

II]

あらた

潮政充

勝

たけ

0

見

かづ子 為佐子

### 柳クラブわたの花 吉村 風 報

せ

美代子

折からの雨が別れの時を止め 足止めて大道芸に手を叩く 蜘蛛の糸揺れると母が食い止める お喋りの口のテープが良く取れる テープカットの度に緑が消えてゆく ガムテープペたペた母から来た荷物 カセットテープに時どき入る妻の 亡き妻の声が残っているテー 今だから真相言える謀反劇 今のままなら長生きも悪くなし 生きている今をたしかな絵にのこす 酒 声 柳宏子 トミエ はつ絵 絹 義 子 鹿 いわる 晴 美的太 汗かいて無駄なリフォーム蟬の声

努力して育てた子供船出する

ひさ子

用心に人間ドック受けている

恋病用心しても治らない 古稀迎え船出に貰う万歩計 下駄蹴って顔見ず決めた妻がいる 用心はするぞとベルト締めて乗る

きみ子 かつみ 打止めの花火にほっと手をつなぐ 遙かだが月で金婚式したい 絵の具箱遙かな山の彩を選る 遙かなるひとへ自責の灯を点す 父母逝きて古里はるか遠くなり ママ止めてくれると知っている喧嘩 跳ぶ妻を止めるすべなく苦い 六十のまだときめいて老い遙か

しろう

よしえ

用心深い女で少しヒステリ

船出した日本丸は視界ゼロ 下駄履きのままの家出だすぐ帰る 人情がほのぼの包む山陰路 ほのぼのと恋の花咲く喫茶店 新婚さん満艦飾で船出する 嫁入りの下駄が今でも眠ってる 交差点用心しすぎ渡れない

睦セツ子

流し目に用心あとが高くつく 不用心な戸だとつぶやく午前様 用心と冒険心を混ぜて飲み 湯上がりにほのぼの匂うもうはたち

丈

涼

生

秋風に身の上話ふと洩らす 偶然の出逢いを月が北叟笑む 約束の好きな小指が振り回す 遙かより来たる流氷の話し声 十三回忌遙かな人になり始め

正とし秋

Z

我を待つ傘とも知らず走りぬけ 針ほどのことを大きくする他人 居眠りの仕草で席を譲らない 八角時計十二時打ってほっとする

しげお

諷云児

踏まれてもいのちの芽生え花さかす

トシエ

まさと

ますみ

道

一十年納屋で眠っているピアノ

たず子

恋やぶれ未練とともに焼く手紙 夏休みみんな揃うて墓参り

今はもうお国訛りを気にしない

7

る

西宮北口川柳会

哲子報

ほのぼのとさせる孫との糸電話 幸せをほのぼのくれる青畳 船出する娘の手引きにと家事ノート 用心がすぎて運動不足です 憂き事を忘れほのぼの水中花 手折れない用心深いバラの刺 子ぼんのうほのぼの海や山へ行き 愛と憎ほのぼの胸に溜まる哀

> ちぐはぐな夫婦あきずに五十年 二の足踏む流石に暑い大暑の日 冷蔵庫たっぷり無駄が詰まってる 豪邸の無駄な間取りにあるゆとり 無駄口も少し使って世をわたる 母がゆく花いっぱいに囲まれて 出来すぎの釣書二の足踏んでいる 嫁が来てステテコ恋し家の中 色白になりたく顔にキュウリの そこそこの無駄が潤い娘

> > 八寿子

明

宏

無駄な脂肪やっと減らしてMサイズ バーゲンは無駄も買わせる値札つけ 無駄骨もいつかはきっと生きてくる 長靴のおニューちゃぶちゃぶ水溜まり 墓に傘さしてやりたや炎天下 無駄でない父の元気な電話口 無駄話覚えていないハイキング ストレスをいっぱい溜めた換気扇 絵手紙の心のこもる見舞状

秋子子嗣

父さんの後から無駄を消していく 治療費に比べりや楽し無駄遣い ゆっくりと見えるが母に無駄がない 隆幸一春君道 ミ剛 盛枝風子江子子治 寿隆幸 美智子 司 甫

明日来い当てにならない集金日 夏帽子ななめ目深に歳 かく n

児玉 鬼

春

遊江

以心伝心虫が好かない者同士

童心にもどって虫の声

た飼

豊かさの中で乱れている言葉 どの笛でも踊るおとこは意地わるい 虫籠の虫が覚えている昨日 言葉数少ない父の目で解る 笑顔して言葉の裏を読んでい 虫ぼしに亡母のきものが捨てられ 虫一匹殺せぬ妻にあやつられ 2 英壬子 凡 千千照 步

語り継ぐ言葉が重い原爆忌 羨ましい虫は半年寝てくらす チチロ虫わたしに聴かすセレナー 日にち薬治りましたよ腹の虫 言葉尻取るが責任取らぬ人

> さと美 志華子

ハエ夫婦網戸にすがる秋彼岸 いじわるも心の糧とうけとめ

鈴虫の音色が冴える星月夜 虫のよい話で何時もだまされる いじわるをしてるつもりが喜ばれ リストラの虫けらのよう社を追われ ありがとう だけでまあるくなる絆 やましさについ多くなる言葉数 薬とも毒とも読める酒を飲み あなたあと甘く優しい僕の妻

会 澄

楽

偶然を計画してる腹の虫

蚌

ぱいの苦楽をともにした絆 ぱいの実りを定年後の皿 あなたあなたと妻でないのに呼びつける どうしてもあなたと合わぬ節 孫の夏蟻の行列絵日記に 酷暑避け虫も葉影でひと休み まわ

じいばあが孫のしつけをわやにする わが子には躾苦手という教師 たもつ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

祭り囃子包んで母の手紙くる ラブレターもらった覚えない どことなく育ちの違う子の躾 玄関にきちんと躾ぬいである きびしくても愛がこもっている躾 女

背比べ柱の傷はダムの底 絵手紙にあなたの好きな花を描く 母よりと書いた手紙はもう来な 力比べ兄ちゃん力ぬいていた すれ違う蟻は獲物を比べ合う ふるさとの潮が匂うて来る手紙 10

欣千

比べたら笑った数だけ花が 比べたらあかん隣はお役人 嫁はんは美人兄貴に差をつける くらべられ首すくめてる鳳仙 席あのいっぱいにひっかかり 花

とみを

ダン吉

12時·松花堂弁当

千枝子

子子

夢いっぱい風に孕ます紺スー

"

0 0

いっぱいで済まぬと誘い知って行く

車に乗っていじわるをしに行く 鬼舞日の出 みんな省略笑顔だけ残る いっぱいで済まぬお酒と知ってい いっつ ぱい食べたい夢がない

不幸

弘

扶美代

弘

彼にだけ省略したくない心 人生論省略すれば全て酒

十五夜の恋は省略許さな りもの省けば消えていた私

シマ子 洋 花

宏

全幅の信頼ことば省略し 京都 塔の 会 秋の 吟行句会

ح 11月27日 金

春勝ます子

ところ

10 時 40 京阪電車 分 「くずは」

風

11時02分発バス乗車 15 大芝 (松花堂前) ス3番のりば 駅前

句昼 会 題 当日雑感A·B(各題3句 碑・あくせく・大型 1時-4時 4500円 当日

直

投句的 〒600 90円切手3枚同封 11月20日

-842京都市下京区諏訪町通松原下 石清水八幡宮社僧·松花堂昭乗、 松花堂弁当発祥

隠

-117 -

## こ城下

## 川柳まつりに 参加して

#### 古 JII 喜美子

この上ない名鉄犬山ホテルに案内され、 内願う事になった。ホテルから車で約二十分 館として昭和四十年に開村した明治村へ御案 りで待望の日本ライン下りは不能の由。 流れを、眼を転ずれば国宝大山城を望む眺望 名鉄犬山遊園駅到着。眼下に雄大な木曽川の 佐藤一粒氏他のあたたかいお迎えを受け無事 の御好意で明治建築を保存展示する野外博物 の大雨に木曽川は増水し濁流はあふれんばか 地方名物の数々を盛られた昼食を頂く。 グはあったものの昼過ぎに鵜かご川柳社主宰 古屋行特急の乗客となる。途中少々ハプニン 薫風主幹他八名は前日九月二十六日朝近鉄名 第十三回ご城下川柳まつりに出席のため、 皆様 この

> 間半。 明治村正門の前に降り立つ。持ち時間は二時

だけです。 御多忙の中をと、 出席下さり、賑やかな一夕をお招き頂いた。 間お世話願った皆様に加えて青年部の方も御 央玄関前に着く。幾何学模様を彫刻した大谷 最古の市電に乗りゴトゴト走る。次は当時の のそれぞれ個性豊かな建物を回る。 時折ばら 造に時代を逆行。 石と黄色いレンガを仕上材料にした複雑な構 ンクロイドライトの設計になる帝国ホテル中 走ると仮設東京駅。当時の代表的建築家フラ 蒸気機関車でピーポーと煙を吐きながら数分 つく小雨にかえって風情を添えられながら。 先ず前後に救助網をつけ一本ポールの日本 鵜かご川柳社の皆様には句会を明日に控え 夜は犬山駅に近いサンパーク犬山にて、昼 唯々感謝、 尚その周辺にある文明開化 御礼申しあげる

#### 指 宿 千枝子

瓢太郎氏、 柳まつりの当日には、きやり吟社主幹、竹本 印象に残っています。 一粒氏のご挨拶に続いて、犬山市長、朝日 十二時三十分開会。鵜かご川柳社主宰、 九月二十七日、鵜かご川柳社主催ご城下川 NHK学園、 大木俊秀氏のお話が 佐

藤

ランプリ入賞句吟詠、 新聞社の方の祝辞があり、その後、鵜かごグ

々と吟詠されました。 の三句を鵜かご川柳社の片岡文雄さんが、 銅賞「もの言わぬ山と話をして飽きず」 銀賞「枕木の一生だったループタイ」 「強い子にされて泣けない膝小僧 朗

ことである。 は、この伝統を守って次の世代に残していく 柳は、二百五十年の歴史を持っている。私達 七・五の定形川柳の伝統を守っています。 竹本瓢太郎氏のおはなし。「関東では、五・ 大木俊秀氏のおはなし。「日本語の特質に

本語を大事にする。川柳は、 のリズムについて話をされる。短詩形は い。音や拍の例をあげられたり、五・七・五 一音一拍があることや、二拍の音が非常に多 自分の意志がス

ーと読者に伝わるように。 五・七・五の土俵で勝負をする」。

大変興味深いお話でした

み、秀句の二回目に耳で味わってもらうとの 説明がありました。 の呼名は、平抜きは一回読み、秀句は二回読 プログラムは、記念句会へと進行、

なり、ありがとうございました。 参加させていただきましていろいろ勉強に

#### 第 48 Ш 富 田 林 柳 市 民文 化

۲ ところ ŧ 富田林市中央公民館2Fホール 11月1 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ Ħ (日)午後1 時開場

おはなし (各題2句 社会教育主事 室 #

面 底 高 前 橋 H H 定 雄 男 選

静

中

由

たつお

選

宿 席

題 題

風 午後2時 欲 席題なし 西田 池 柳宏子 選

参加費 1000円 秀句賞呈 (作品集·参加賞呈

懇親宴 4000円 (当日受付

富 富田林市·富田林市教育委員会  $\mathbb{H}$ 富田林市文化振興事業団

連絡先 池森子(0721-林 文 化

> 第 40 П 豊中市 民川 柳大会

٢

第19

回川柳塔鹿野みか月川柳大会

ところ

鹿野町営国民宿舎「山紫苑 11月29日(日)午前9時開場

2 ところ ŧ 11 月 23 日 祝 正午開場

1500円 軽食・記念品・発表誌呈

2 0 0 m 彦

会

氏

おはなし あいさつ 大坂の陣 豊中川柳会会長 石川 勝

番傘川 任幹事 片岡湖風氏

(当日発表 声 中田 前 浦 H 由紀子 たつお 諷云児 完次 良 咲 子 選 選 選 選 選 選

豊中市長賞ほか各題に賞呈 午後1時 (各題2句 披講五十音順

賞

締

切

父

森中 恵美子

催 豊中市立中央公民館 中 Ш

主

**〒**56015豊中市赤阪1−6−9 06-854-1990 石川 勝

豊中市立中央公民館1Fホール 阪急宝塚線曽根駅東100 m

おはなし「関東の川柳&関西の川柳」 出席者のみ)各題2句 ハンカチ 0 8 5 7 8 4 2 2 1 1 川柳きやり吟社 竹本瓢太郎氏 貞岡 信太郎 出 高 Ш 楓 風 楽 選 選

長谷川 博子

◎席題なし・出句締切午前11時半 (出席・欠席投句者) 各題2句 流 2000円(昼食・発表誌・記念品呈

「ピアノ」 瞬 牛尾 森中 恵美子 選 小林 由多香 足緑良 選 選

雑詠」(1句のみ)土橋 1000円 (発表誌呈

〒○ 中原諷人方 大会事務局連絡先895気高郡鹿野町鹿野1279 山紫苑・6000円(11月5日まで申込 ②応募締切10月31日 B5大用紙に連記、 宿泊など明記の上、事務局へ。 11月28日 (土) 午後6時から (消印有効 大会・前夜祭出

## 柳界 박!

センターで開かれ、本社同 ★9月27日、第13回ご城下 柳まつりが大山国際観光 五十年洗った顔が光らな

は次のとおり。 彰された。本社同人の受賞 モナークでの川柳大会で表 受賞者が8月30日、 ホテル

妻癒えて明るい雨になっ 名人賞> みさを

忘年句会が12月6日(日)

★第34回川柳塔きゃらぼく

人の準秀句は次のとおり。 が発刊された。 ★9月末、第一回の役員報 「こんにちは川柳塔です」 にさせる余暇 おふくろをエッセイスト 西出楓楽

★第22回茗人賞及び佳作の

住

れる。 塩・そして・暦、 耳・板・中・回る・ティー 12時半。会費4000円、 米子市観光センターで催さ 午前10時開場、締切 各題2句

## ▽人事往来△

紫香・柳宏子・武庫坊・石舟・澄子推薦

+ &

四

郎

選者をつとめた。 城下まつりに大山市へ赴き かご川柳社主催の第13回ご 9月27日、薫風主幹は鵜

記念第一回鳥取県川柳文芸 た鳥取県川柳作家連盟創立 大会に出席した。 鳥取市「対翠閣」で開かれ ■9月27日、天笑理事長は

## ▽同人消息△

分かち合った。 熊本市から表彰式に出席さ 選ばれた永田俊子さんは、 文芸祭川柳部門の第一席に んともども、受賞の喜びを 第四席の奥山美智子さ 第二席の川島諷云児さ

#### 新 同 人 紹

的意 介

#### 谷 П 義 男

鬼遊・千秀・保州推薦

良太郎特別公演に出演、 得意の喉を披露した。 式の場の村人役で長持唄と 芸人役で最上川船唄、 結婚 旅

#### マ出 版△

■9月6日、第53回尼崎市 序文長谷川紫光氏。 を発刊。A4判132頁 同人)は句画集『心煌々』 ・水粉千翁氏(倉敷市・元 ▼訂正とお詫び▲

祀慰霊法要は11月14日(土)に行われます。

高野山大霊園内の川柳塔碑への本年度物故者の合

JII

柳塔碑合祀法要の御案内

集合時間

午前8時50分

南海なんば駅3階・改札口時計下

加

◎南海高野線特急券を用意しますので、参加者は

8000円(交通費·昼食費

川柳塔社事務所までお申し込みください。

## 目高橘夕花→高橋夕花■P 10月号—P3 (目次) 2行

住句地十選→佳句地十選■ 八聞を→人間を■P10下段 (九月句会) 中段1行目

■川内叭笑氏(大阪市)は

大阪新歌舞伎座の杉

#### とき 12月2日 22号室 ンケイビル本館3階3 17時開場 大阪川柳の会 題と選者 ところ=サ 水

野いさむ 席題なし 橘高薫風△いつも・礒 む・奥山晴生△行方・ 今年・住田英比古△嚙 会費800 各題2句

P • 110 下段13行目8月13日→12日 →**礫**■P126(柳界展望 (各地柳壇) 上段12行

#### 11 月各地句会案内

句会名	日 時 と 題	会場と投句先		
富 柳 会	1日(日)午後1時から <b>富田林市民川柳大会</b>	富田林市立中央公民館 本号P119参照 〒584-0043 富田林市南大伴町4-4-10池 森子		
八尾市民 川 柳 会	3日(火・祝)正午から 八尾市文化祭川柳大会	八尾市文化会館4F 前月号P124参照 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子		
川 柳 ねやがわ	3日(火・祝)正午から 寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立総合センター 前月号 P124参照 〒572-0063 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉		
尼 崎いくしま	6日(金)午後1時から 耳・低い・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代		
川 柳 塔わかやま	8日(日)午後1時から 闇 ・ 握 手 ・ 斜 め	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良		
西宮北口川 柳 会	9日(月)午後1時から 隣・詫びる・豊か・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子		
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 割る・恐れる・うとい	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次		
堺川柳会	12日(木)午後1時から チャンス・屋根(共選)・やがて(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑		
川 柳 塔まつえ	14日(土)午後1時半から 賞 ・ 兆 し ・ 寒 い	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松叮紅		
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 勲章・ばらばら・売る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊		
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 正午から 屋根・濡れる・とぼける・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児		
岸和田川柳会	21日(土)午後1時半から レッテル・路地・わざわざ・新しい	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村		
はびきの市民会	22日(日)午後1時から レジ・光る・芸・「新築」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏		
南大阪川柳会	25日(水)午後 6 時から 温い・抜ける・塗る・盗む	王造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲		
京 都塔の会	27日(金)午前10時40分集合 碑・あくせく・大型	<b>秋の吟行句会</b> 本号 P 117参照 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽		
東大阪市川 柳同 好 会	28日(土)午後6時から 弱い・サービス・袋・読む	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風		

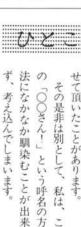
[★]日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

#### 編 後 記

★第四回川柳塔まつりは平 中に座り新聞を広げた。 ★しばらくしてから、

とで心配したが、皆さんの 日でもあり、雨天というこ ないだろう」「年寄りなら 文句を言うな」「後も先も 分からないが「後から来て はじめた。きっかけは何か

ろ」と激しい言葉のやりと 持はないのか」「静かにし ろう」「譲り合うという気 年寄りらしい常識があるだ



## 大会等で脇取り(披講助手)の さん付け呼名について

しめている」という意識があるも

せて頂いたことがあります。 で呼名するところに何度か出席さ 呼名係が、作者名を「さん」付け のですから、

の「〇〇さん!」という呼名の方 その是非は別として、私は、こ さん付けの呼名はやめて欲しい

感がしてなりません。 司さん!」等と再呼名されますと の呼名の後で、呼名係りから「完 「なんかへんだなあ」という違和 「完司!」という私

とまでは申しませんが、私の時だ なあ、等と思ったりしています。 けでも呼び捨てにして頂けないか

☆狭い家の中でこの頃よく て収集がつかなくなる。 ☆この探しものを始終して

わって再呼名して、他者に周知せ

私自身に「呼名係りは作者に代

★何か勤め先で面白くない 動こうともせず後から座っ 開き踏んばって、頑として こに置いた筈、 探しものをする。 で出かけようとして鍵がな のものが見当たらぬ。急い 蔵ったはず 確かにこ いか、捨てたのではないか 夫も然り、「あれを知らな いるのは私だけではない。

つきやすい机の上に置いて おくに限るなどと思ってし 大事な書類などは目に 改めて教えられた な協力の仕方があることを

ことでもあったのか、また

こんな経験が度重なる

などと、あらぬ疑いをかけ

河に囲まれ絵のような街で ギーのブルージュは花と運 を旅したことがある。べ

っていた。真ん中の二人が 五人掛けの座席に四人が座 ★ある夕方の電車内の風景

気持がいいのにと思った。

し譲ったら当事者も周りも は性格かも知れないが、少

これが女性同士なら譲り合

まう。

0

て軽いお愛想でも言うだ

その句を理解し、みなに広 句を作ることも大切。 熱意に頭が下がる。命ある 弓削の人々の川柳に対する

また

チほど空いているのに足を

輩

あ男性は、 隣と二十セン

った。日本一の川柳の町 会場はシーンとして聞き入 のしんみりとした語り口に ★当日の濱野奇童氏のお話 り、有難うございました。 御協力で無事に盛会裡に終

始めから座っている五十年 りに周りの人は声もない。

めることも大切。

いろいろ

た男性を睨みつけている。

☆お互いに思い違い、しま と言わぬ日はない。 てくる。二人してないない い忘れを棚にあげ、相手の る建物、 問に、図書館、 あった。中でも特別夢のあ います?」現地ガイドの質 「ここは何だと思

正解は国営老人ホームであ ゆる答えを出したがNO、 役所等あら

っかり書類や句報、本、手 ☆従って茶の間の机は、 住所録で埋めつくされ す 三つ違いの夫婦なのに何故 かこの頃老化の歩が揃って せいにしたりしている。

が軽く会釈して、その真ん て来た七十歳ぐらいの男件 たところに、次の駅で乗っ ゆっくりと場所をとってい

女性だからだろうか。

(H) 私が

ろうにと思ったのは、

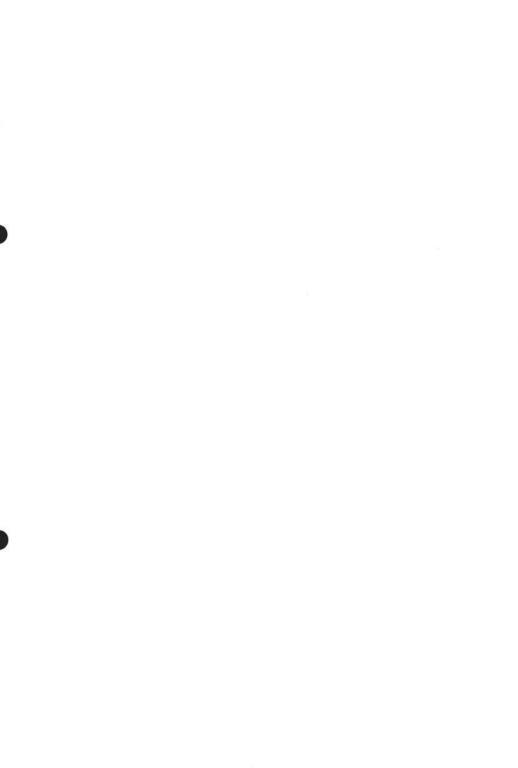
った。

しまったようで、

私の方は

納得し難いものがある。 ☆以前オランダ・ベルギー

	川柳塔・水煙抄投句用紙 			種 目 「
◎8句を楷書で正確に書き、				」 発表(1月号)
				地名。きりと
15日までに到着するようお送りください。				きりとりせん



#### 作 品募集

課題吟 苘 7K 111 初 步 湖 煙 教室 (3句) の 花 抄 抄 塔 3 和 (3句 IJ 8 8 句 句 句

6 of the ボ <

(3句)

1

公

担当

70 橘 川藤 木 次 薫 弘 大 代 -選選 選 選

「意外」「うぬぼれ」 2月号 初步教室 「茶

#### 本社11月句会

題

1

月号発

表

11 月

締

切

短 0

h

ŧ

美 希

選

当日発表(各題2句以内) 投句料 4 0

平川日柳

ます。

地下鉄谷町9丁目徒歩8分 天王寺区石ヶ辻町19 アウィー

06

7772

5

11

月7

日

 $\widehat{\pm}$ 

後5 4

JII

1

の投句につい

持 後 押 5

近鉄上本町 野 房

風 選 選

(2) 渺湖抄

本社12月句会 7日(月)予定

「やっと」「大 根」「指 紋」 兼題 裏」「外 見

してください。

室への投句は、

#### 夜市川柳募集

第6回  $\mathbf{m}$ 長谷川 博 子選 ハガキに3句 11月末締切

投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

₹545 -0005

発編 編集 兼 十 成 十

年分分 阪市阿倍野区三明町二——〇— ウエムラ第2ビル202号室 九百円 干 (送料共) H

振替 〇〇九八〇一五一三三二六八番 (分)至一六九一

の投句用紙を使用してください。年分以上前納の定期購読者)に限川柳塔欄への投句は同人、水煙抄 ・茴香の花欄・一 上前納の定期購読者)に限り、 投句は同人、水煙抄欄へは誌友 ただし茴香の花欄は女性だけ。同人・誌友に限り、川柳塔柳箞の花欄・一路集(課題吟)および でまでにおいている。 必ず氏名と住所 路集 願は、 61 い土 ・日曜、 (県・市名)を明 本誌最終ページ よび

釜 を使用を使用

(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお (3)各欄への投句は、 千日の10時から18川柳塔本社事務所 16 所 時へ します。

定 価 六 百 (送料76円

# 第五回 全日本川柳誌上大会

ので、こぞってご参加ください。
芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大行事です芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大行事ですので、こぞってご参加ください。

## 課題と選者(各題2句・連記)

定 脇 ボランテ 自 分 史 清水 猿田 唐沢 内 寒坊 春樹 佐藤 佐藤 秋山 真砂 曙光 口 延 舟 住 枝 共選 共選 共選

長賞・全日本川柳誌上大会賞平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・経済平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・経済

賞加

費

2000円

(投句料:『平成柳多留』第5集代)

参加方法

t刀

平成10年12月12日 (土)

電話·FAX (66) 352-2210 社団法人 全日本川柳協会 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

